

メルヴィー ・リングロード

著: 秋月しょう一郎



目次

プロローグ	
プロローグ	2
第一章 蔑まされた少年	
第一節	8
第二節	14
第三節	17
第四節	24
第五節	31
第二章 指輪の継承	
第一節	38
第二節	41
第三節	49
第四節	57
第三章 称賛のあとに . . .	
第一節	66
第二節	68
第三節	71
第四節	80
第五節	86
第六節	90
第七節	91
第四章 対決！ アンクレック対エミュルタール	
第一節	96
第二節	98
第三節	106
第四節	107
第五章 メルヴィー暴走？	
第一節	114
第二節	124

第三節	128
第四節	131
エピローグ	
エピローグ	140
自認認証：表明表記	
自認認証：表明表記	146

プロローグ

プロローグ

ある小村の酒場で、一人の老人が酒を飲んでいて。

黒のローブに胸元までのびる白い髭、どっから見てもその者は、世を捨てて魔導の道に身を委ねた魔術師にも見える。

深く皺の刻まれた偏屈そうなその顔、やはり魔術師特有の小難しそうなその生来を滲ませた鷲鼻の鼻梁、そして英知を悟りすべてを見透かすかのような賢哲な眼差し、そのどれをとってもこの者は、ごくありふれたこの小さな酒場で酒を飲んでいるのにはとても不釣り合いな珍客だった。

普通、魔術師といえば、人里離れたあばら屋で、隠遁的に自らの魔術の研究とその研鑽に没頭しているというイメージが強い。

だが、そんな者が今この酒場で酒を飲んでいるという光景は、他の客達から見れば非常に奇異の光景に映るはずだった。

その証拠に、この老人は、先程からこの酒場に集うこの村の若い連中に、怪訝な目で見られていた。

しかも余所者、この老人は、この村の者ではなかった。

しかし、この魔術師然とした老人が、先程からこの酒場に集う人々に注目を浴びているのには、それなりの訳がある。

それは、店のカウンター越しに座るその老人のまわりには、ある奇異な現象が渦巻いていたからだ。

実は、その魔術師的、老人の頭の周りを先程からシュルシュルと軽快な音を発して飛び回っているあるものが、この酒場の人々の目には映っていたのである。

それは身長二十センチぐらいの薄衣を纏った生き物、腰にまで達する長い髪をなびかせて、無邪気に背中の中の鳥の様な白い両翼の羽をはばたかせ、老人に纏わり付く様に巡回して飛びまわる。

一見すると、それは精霊界をその住居とする、ごくありふれた妖精の類の小人のような観も受けるが、実は妖精ではない。

そう、実は天使なのだった。

数は三つ、いや三人。

一人は、燃えるような色の赤髪が目付きが鋭い美人——着ている服はやはり赤で、太ももの辺までしかないその衣からのぞく脚は、目を見張るほどの妖艶な美脚を誇っていた。

そして、もう一人は水色の髪のアнгел、着ている衣はこれも髪の色と同じ水色で、特徴的なのは複雑な紋様の刻まれたその水色の薄布からのぞく胸元が、非常に豊満であるという事だ。

目付きはやはり鋭く、赤髪のアнгелよりもいくぶんその瞳は大きめだが、見ると陶然とする様なその瞳は、何か現実感をよそに神秘的な面影をそこに湛えていた。

ちなみに、瞳の色も水色である。

そして最後は黒髪的女性———彼女は先程からぐるぐると老人の頭の上を旋回する赤髪のアнгелと水色の髪のアнгелをよそに、その老人の座るカウンターに腰を下ろし、酒の肴として注文された鳥のもも肉を両手に抱えて頬張っていた。

この黒髪のアнгелは、その髪の色に反して目の色は赤である。

そして白い貝殻のような肌と紅い唇、そして明るみのある薄い純白色の衣を纏っていた。

その為、何度も言うが、その魔術師然とした老人の座る場所には、自ずと他の客達の視線が集まる。

しかし、身長二十数センチ弱の美しい女性が、この胡散臭い老人の傍にまわり付いているのだから、それも仕方がない。

それは明らかに、奇異な光景に映るからである。

だが、そんな中でも、この老人とその三人のアнгелは、注目を浴びつつ呑気なものであった。

とくにカウンターの上に座り、鳥のもも肉を頬張っている黒髪のアнгелは、物凄い勢いでその酒の肴を平らげていた。

そして、その光景を見て羨ましそうに涎を垂らしている赤髪のアнгелと水色の髪のアнгел——彼女たちは、シュルシュルと酒場の室内を旋回すると、その次には突然、老人の頭にたかって、その頭を苛立たしげにボカボカと殴り始めていた。

「痛い痛い痛い！！ 何するんじゃマルレリスそれにミュルル、そんなに叩くとわしゃー頭の血管が切れてポックリあの世にいつちまうよ、だから叩かないでくれ」

すると、それに耐えかねたような声をだして、老人は、頭を叩く二人のアнгелに情けない表情を向けながらも、その頭を抱えて抗弁していた。

しかし、

「うん、もう、どうしてヒュール爺はメルヴィーばかりに轟然するの！？ こう言っちゃ何だけど、私たちも鳥のもも肉、食べたいのよ。それをどうしてどうしてメルヴィーばかり、もうこれじゃ轟然を乗り越えて差別だわ差別、私たちに何も食べさせないなんてズルいわよ！」

そう言って駄々をこねたのは、水色の髪のアングルと呼ばれた天使である。

彼女は小さいくせに、その豊満な胸を老人の頭の上で揺らすと、その老人の白髪まみれの頭髪に腕を絡めて、そこでそれを思いっきり引きぬいていた。

ボカッ！！

すると、それに呼応して、赤髪のアングルマルレリスが、突然、呪文のようなものを唱えだすと、いきなりその手元にでっかいハンマーを召喚し、それで思いっきり老人のおでこを殴打するのである。

その為、老人は頭にでっかいタン瘤を作って、その場でくらッと意識を失いかける。

しかし、そこは齢六十過ぎを生きた手練れの老人だけあり、意識を失いかけながらもなんとか踏み止まり、頭のまわりを星が回転する中、おでこを押さえてカウンターにしがみ付いていた。

そして、

「あーもう分かった！ 分かったからこの老いぼれ爺を殴らんでくれ。そんなに喰いたいのなら、しょうがないからあと二つ鳥のもも肉を頼んでやるから、そこのカウンターに座って大人しくして居てくれ！ でないとわしゃマルレリスのウォーハンマーでタコなぐりにされて、明日にはもうポックリいっちまうかもしれないから勘弁してもらいたいよ。まだ老人としての余生は、あと二十年は残されておるんじゃないからな・・・」

ヒュールという老人は、そう言うと、不承不承カウンター越しに、この酒場の主人に対して鳥のもも肉を二つ追加注文すると、ため息混じりに嘆きにも似た声を上げていた。

そしてその顔には、やれやれといった疲れた顔の表情がわき浮かぶ。

だが、そのような光景を見ても、相変わらず黒髪の天使はその食欲を逞しくして、自分の鳥のもも肉に噛り付いていた。

それを見て、

「しかしどうだいメルヴィー、その酒の肴の味は？ 人探しのご褒美としては中々のおつなものじゃろ。何せ五年間もワシが探していたものを、お前さんの力で見付けだすことが出来たんじゃから、巡遣使としてのワシのしがない給料から特上のものを調理してもらったんだ。だから味は格別じゃろ、よく味わって喰っておくれよ・・・」

ヒュールはそう言うと、偏屈そうなその顔を緩め、ニコニコとメルヴィーという黒髪の天使を見つめて、手元の酒杯に口をつけていた。

だが、そう言われても、メルヴィーは頷きもせずやはりただ黙々と鳥のもも肉にかぶりつき、その貪欲なまでの食欲を逞しくしている。

つまり、ヒュールという老人の問い掛けにも、一切、反応せず無視しているのだ。

だからその光景を見ると、老人は内心では（まったくこいつ等ときたら、ワシの金にたかって高い食いもんばかりを欲しがらるから、ワシの金がいくらあっても財布はふくれん。だからさっさとこいつ等を厄介払いして、早くどっかの田舎で隠遁生活がしたいものじゃ・・・）と、そうぼやき、目の前の無遠慮な天使には気付かれぬように顔を顰め癖癖した表情をその顔に浮かべるのだった。

するとその時、先ほどヒュールが追加注文した鳥のもも肉が、二つ店の主人の手によってカウンター越しに差し出されていた。

そこへ二人の天使、ミュールとマルレリスが、猛烈な勢いでその出された鳥のもも肉のところまで急降下すると、急停止し、空中に浮かんだままその肉をひつつかみ、これまた猛烈な勢いで噛り付きだす。

だからヒュールは、『まったく喰い意地のはった女三姉妹じゃ・・・とほほ・・・』と、極端に嫌な顔を見せて嘆くのである。

だが、

「ねえ、ところでヒュール爺、この際だから正直に聞くけど、本当に明日、私が見付けたあの少年のところに行くの？ でもそれって本当に私たちにとっていい事だと思う？」

その時、突然メルヴィーが鳥のもも肉に噛り付くのをやめると、目の前のヒュールの顔を見上げてそう聞いて来ていた。

メルヴィーは、そう言うと、疑問げに目をしばたかせ少し不安げな顔の表情をする。

その表情は愛らしく、その性格をよく知らなければ、箱に入れてつれて帰る人間もあらわれるかもしれない。

しかしそこが曲者、このメルヴィーという天使はヒュールが知るかぎりでは、天使のくせに性悪な、しかも小悪魔的な性格を持つ善良性の欠けた様な欠落天使だった。

だからその愛らしい顔を覗いながらも、ヒュールは「それが一番いいことだと思うがのう」と言って、嫌に素っ気ない態度であしらっていた。

だがここで何かヒュールには、郷愁じみた思いが浮かんでくるのは否めない。

何せ、今までこの三人とは、自分の人生の半分以上を共に過ごしてきたのだから、実を言えば彼女等とあと少しで別れる事になるのは辛いのである。

しかし、それは巡遣使に定められた規約の義務、老いぼれてもう既に現役を退かなければならないこの老人にとっては、その左の指に輝く三つのリングは用を成さないのである。

だから、それを譲る後継者を、明日、訪ねなければならなかった。

そして継承の儀式を・・・

これは今ヒュールの居る王国、《カルディリス・メン・ヒュール》で、五百年前に定められた、明確な規約なのである。

だから、それを一切、不履行にすることは出来なかったのだった。

第一章 蔑まされた少年

第一節

黄色い薄レンガで彩られた街の路地を、駆け抜ける少年がいる。

ダブダブのレインコートのような学衣を纏い、青白く痩せ細ったその体を酷使しながら、いま彼は、自分を追いかけてくる追っ手の足をまこうと懸命になっていた。

降りしきるひた雨は、少年の学衣の裾を濡らし、その顔に大きくかけられた丸虫眼鏡は雨の水滴でびしゃびしゃだった。

しかし、それにもかまわず少年は、街の裏路地をひた走っていた。

後には、追っ手の足音が聞こえるのだ。

バシャバシャと水溜まりを蹴って聞こえるその足音の数は三つ、そう三人の人間の物だった。

(まずい、追いつかれるよ・・・)

その足音を後ろ手に聞き、少年はさらに恐怖を滲ませて、目の前の路地の曲がり角を曲がる。

「はッ!？」

しかし、そこで少年は、息を飲むことになる。

そう、その先は、行き止まりだったのだ。

それを見て少年が『しまった!』と、その心の中で思った時には、もう追っ手は既に彼のすぐ後にまで来て、悠然と身構えていた。

三人の追っ手が、逃げていた少年を追い詰め取り囲む・・・

そして、

「おいアルビレート、なぜ逃げるんだ、待ってて言っただろ! それなのに俺様を無視して逃げるとは、どうなるか分かってるんだろうな!!」

ガツン!

「ひいいいッ!」

少年が路地の行き止まりに直面して、後を振り返り、追っ手の顔を見据えると、その時いきなり一振りの拳が飛んできて、少年の左頬が殴打されていた。

その衝撃で、逃げていたアルビレートという少年は、短い悲鳴を発すると、路地の水溜まりに顔からつっこんで、そのレインコートのような学衣は、水浸しでビショビショになっていた。

「あッはははははは! いいザマだ。オメーみて一な奴は、そこの水溜まりに顔つっこんで泣いていればいいんだよ。ピーピー泣いて、ぼろ服着たかーちゃんの名前でも呼んでいろ。しよせんお前はビンボー人なんだからな・・・」

アルビレートが水溜まりに突っ伏して苦々しく顔をあげると、そこには、ずんどうの瓜のような顔をした大柄の少年の笑う姿が大写しになっていた。

ベレンケスである。

頭髪を短いモヒカン頭にした赤毛の少年、悪怯れた悪意の観がのぞく菱形の目と、その右目の眉がしらの辺りには大きな痣のような青い傷跡を残すこの少年は、アルビレートと同じ学校に通う、いじめっ子の悪ガキだった。

「な、何するんだよベレンケス、いきなり殴るなんて酷いじゃないか！！」

そのベレンケスに、水溜まりに突っ伏したまま抗議の声を上げるアルビレート、

しかし、その横で「ニヒヒ」とか「ククッ」という、彼をバカにした様な二人の少年の笑い声が聞こえていた。

パトン・コンクラートと、ゲトル・ビンテールである。

その二人の少年は、赤髪のもヒカン頭ベレンケスの脇でアルビレートを見下ろすと、彼を小憎らし気に見て、悪怯れた顔をその顔にのぞかせていた。

そして、「おいおい、アルビレート、何するはねーだろ。お前がベレンケスの前から逃げ出すからこうなったんじゃないか。それを殴るなんて酷いじゃないかって、そんなのは通用しねーんだぞ。この街で、ベレンケスに逆らうなんて、誰だって許されねーんだからな・・・」

「そうぞアルビレート、ベレンケスに会ったらちゃんと挨拶して頭を下げるんだ。それをしないからこうなるんだバカ、身の程、知れよ」

そう、このパトンという少年とゲトルという少年は、赤髪のもヒカン頭、ベレンケスの子分なのだ。

その二人の少年が、アルビレートを見下ろすと、ペツと地面に唾を吐いて、また悪怯れた態度をその仕草にとって見せていた。

そして、水溜まりに倒れこんだアルビレートに近付くと、ベレンケスの命令で、その倒れたアルビレートを二人で抱え起こし、左右から羽交い締めにもするかの様な格好で押さえ込んでいた。

「や、やめてくれよパトン、それにゲトル、僕は何もしていないじゃないか！！」

そんな二人に、半ベソで必死に抵抗するアルビレート、

しかし、パトンとゲトルは、そんなアルビレートをベレンケスの前まで連れていくと、徐に地面に膝をつかせ、彼をまるで罪人のように引っ立てていた。

そして、

「おいアルビレート、よく聞けよ。俺はな、お前みて一な貧乏人のペーパーが、この街の伝統と格式を誇る聖マントレス学院の学院生として入学していること自体も赦せねーんだ。貧乏人は、貧乏人らしく、村の分校にでも通って大人しくしていればいいんだよ。それをお前は・・・」

ガツン！

そこでまたベレンケスは、自分の目の前に引っ立てられて跪くアルビレートの右の頬を、左の拳で殴打するのである。

「ひィィッ！」

だからその暴挙に、アルビレートは小さく悲鳴を上げると、もはや狂乱状態で泣きじゃ

くり始めていた。

「やめてくれよベレンケス、僕は何もしていないじゃないか、それをそれをどうして僕ばかりいつもイジメるんだ！！」

アルビレートは狂乱すると、その場でひ弱なくせに、パトンとゲトルの拘束を逃れようと、猛烈に暴れだす。

そして、パトンとゲトルがその狂乱に驚いて一瞬の隙を見せたとき、アルビレートは二人の拘束を抜け出して、路地の袋小路の壁に退避していた。

「あッ、この！」

だから、それを見てパトンとゲトルは、アルビレートに詰め寄る。

そして、再びこのひ弱な少年に暴行を加えようとして、二人、同時に拳を振り上げていた。

しかし、

「ちょっと待ちなさいよあなた達、弱い者イジメはそこまでよ！」

今や、アルビレートがパトンとゲトルに暴行されるというその時、一人の少女の声がこの四人のいる裏路地の空間に響いていたのだ。

だからその声に驚き、ベレンケスとそれにパトン、ゲトルが今いる自分たちの後を振り向く。

するとそこには、金髪のやはりレインコートのような青い学衣を着た育ちの良さそうな美しい少女が、路地の曲がり角に忽然と現れ立っていたのである。

それを見てベレンケスは、

「な、なんだテメー、レリル・マスタールじゃねーか。今おれ達は、このアルビレートをシメているところなんだ、だから俺たちに何か用があるなら後にしてくれよな、邪魔するなよ！」

と言って、その少女が突然この場に現れたことに、少々、面食らいながらも、それを無視して、再びアルビレートを睨め付けていた。

そして、そのベレンケスとパトン、ゲトルの三人は、アルビレートを取り囲んで、その頭を小突き始めるのである。

しかし、

「ちょっと止めなさいって言っているのよ、聞こえなかったのベレンケス。それ以上、三人でアルビレートをイジメると、私が赦さないから・・・！」

そう言って足を踏み出しかけたのは、先程のレリル・マスタールという少女だった。

彼女は、不機嫌にいじめっ子三人を睨み付けると、その可愛らしい顔に似合わず、恐相的な顔の表情をその顔面に浮かばせ、指をボキボキと鳴らすと、ベレンケスに近付いていきなりその後頭部を平手打ちでベシッとひっぱたいていたのだった。

「なッ！　なにすんだテメー！！」

だから、当然そのいきなりの行為に、殴られたベレンケスとその子分パトンとゲトルは、いきり立ち、その少女を前にして身構えていた。

「おいレリル、どういう心算だよ、ベレンケスを殴るとはただじゃ済まされねーぜ。まさか、義善心を出してアルビレートを助けようとしたって、テメーみたいなお嬢様面した女が、おれ達の力に敵うわけないんだからな、だからすっこんでいろよ！」

そう言ったのは、ゲトルである。

彼は、レリルという少女をやはり小憎らしそうに睨み付けると、目を血走らせた格好で鼻息を荒くしていた。

その顔は、やはりいじめっ子の顔だ、自分たちがアルビレートにイジメているくせに、危害が自分たちに及ぶと、これ見よがしに騒ぎ立てる。

それは、弱者を何とも思わない、ねじ曲がった自己中心的、不良精神そのものだろう。そういった精神の者は、大抵、加害者に対し、多分の攻撃的な性情を抱く。

だからゲトルもその習いに則って、ベレンケスに張り手をかましたレリルに、案の定、肩を揺らしながら絡んで来ていた。

しかし、レリルという少女は落ち着いたもので、そのゲトルを軽くあしらうと、ツカツカとアルビレートのもとに歩み寄り『大丈夫?』と声をかけていた。

そして、「あなた達、どうしてアルビレートにイジメるのよ!!!」

レリルは、ベレンケス達に対して厳しい視線を突き付けると、少女のくせに大腿を開いてすごんでいた。

「な、なんだよ、やる気かよ!？」

すると、それを見たベレンケスは、少々、気圧された口調でレリルに対して身構えていた。

しかし、レリルに『やる気かよ』などと言り返したわりには、弱腰である。

ベレンケスは、二人の子分と共に数歩あとずさると、やがてはその顔色を次第に変えていた。

それはレリルが、左の拳を突き出して構えていたからだ。

そしてその左手の拳の中指に、銀色に輝くリングが埋められているのを確認したからである。

だからベレンケスたち三人は、レリルがいま何をしようとしているかの察しがついていた。

「ちょ、ちょっと待てレリル、その指輪はエンレースの指輪だろ!? それを俺たちに向けるなよ。街中でリングロードの力を使うのは、校則違反だぜ、学長に怒られても知らねーからな!」

そう言ったのは、ベレンケスである。

彼は、先ほどアルビレートにイジメていた時の顔とは裏腹に、いまは、レリルに対して恐れを抱く様にうろたえている。

その顔は、悪ガキにしては意気地のない情けない顔のようだが、この後のことを考えると、仕方がなかった。

彼女レリルは、指輪の力を使おうとしているのである。

「おい、やめろよレリル、リングの力を使うなんて卑怯だぞ!」

今度そう言ったのは、パトンだった。

彼もベレンケス同様、レリルに対して恐れを抱くと、もはや逃げ腰で先程までイジメていたアルビレートの事などもう眼中になく後ずさっていた。

しかし、

レリルはその時、突然ニヤリと不敵に笑うと、呪文のようなものを唱えだすのである。

『・・・わが守護天使エンレースよ、その御姿を現し、我が瘦身の助力となれ・・・』

そして、握り締めていた左拳をぱっと開いていた。

直後———

ゝるイン！、

という音がすると、レリルの左の指にはめられていた銀色のリングが一瞬明滅し、そこから眩い散光がはじき出されていた。

それはやはり銀色の弾けるような散光で、その光が辺りに逆ると、一瞬まわりの空気が歪んだようにゝブオン、という不穏な音を響かせるのである。

そしてその後、指輪からの散光はレリルの頭上に収束すると、突然、ある一つの形を形成し始めたのである。

それは人の形だった。

細い腕と脚のある、そして胸の膨らみのある・・・

それがレリルの頭上で形づくられると、そこでさらに突然、散光が辺りに霧散していた。

そして・・・

レリルの頭上には、いつのまにか、約二十三センチ大ぐらいの翼の生えた小さな女性が浮遊していたのである。

「「「・・・！！」」」

それを見てベレンケス等、三人は、その場に硬直する。

そして口々に、

「レリル卑怯だぞ、リングから守護天使を召喚するなんて・・・」

「そうだぞ、それは校則違反だ！」

「やめろよレリル、学校以外では、その力を使っちゃいけないんだからな」

そう言うと、いじめっ子三人は、これ見よがしにレリルを非難してきていた。

しかし、

「何よあなた達、アルビレートをイジメておいて、いまさら卑怯だなんてそれはないでしょ？ 私を卑怯だというのなら、三人で弱者イジメした、あなた達の方がもっと卑怯じゃない！」

レリルは、そんな少年たちを睨み付けると、やはり何か口元で呪文を唱えだしていた。

『雷を駆る使徒エンレースよ、その御手の雷印より激烈なる電撃を迸らせよ・・・』

そして「ゝメルク・エスカレーク！！」と最後に声高に叫び声をあげると、徐に右手を突き出して、その手の人差し指でうろたえる三人の少年を指差していた。

すると、

ぎゅるん、ぎゅるん・・・

突如その時、先程レリルの頭上に召喚された女性の天使が、背中の羽をはばたかせると、今度は、猛烈な勢いで回転し始めたのである。

そして、

ビッ、ビビビッ、ビビビビビビビッ！

その回転する小さな体のまわりに、物凄い電気の力を帯電させ始めたのだった。

『エンレースよ、その御手の雷印により、目前の敵を討て！！』

その直後である。

レリルが召喚した天使に、標的となる敵の存在を指し示すと、その時、天使のからだからは帯電した電気がいく筋もの細い稲妻の束になって爆発し、その電撃はまごう事なく三人のいじめっ子に向かって迸っていた。

「うえっ！！ 冗談だろ！」

「まじかよ！」

「うわあ、やめろ！」

だから、それを見たベレンケス等、三人は慌てていた。

彼らは、その顔を極端に青くすると、その天使の放った電撃をさけようとして、その場に身を伏せる。

そして、頭を抱えて、うずくまっていた。

しかし、

「「うぎええええええええええ！！」」

その天使から迸った稲妻の電撃は、三人の少年たちが身を伏せて避けても、容赦なくその体に直撃し、その電撃の威力を否応無しに発揮して、いじめっ子達を感電させていたのである。

そして約十秒間、その電気ショックがつづくこと、次第にその威力は弱まり終息して消えていったのだった。

しかし、その電気ショックを受けた、三人の少年の行く末は憐れである。

彼らは、路地の地面に、ガチガチに固まった状態で、黒焦げになっていたのである。

そして、その黒焦げの体からは、三人とも白煙をぶすぶすと吹き上げていた。

まさに人間の丸焼き状態である。

黒焦げになった三人は、しばらく身動きができず、意味不明な言葉を、二言、三言、口走ると、やがては力尽きた様に、その場に脱力して放身していた。

そして、完全に気を失っていたのである。

「まったくいいザマね、あなた達が弱い者イジメするからこうなるのよ！！」

それを見て、憎たらしそうに言葉を吐くレリル———彼女は、三人の少年に舌を出した後、『イイイイだぁ！』と捨て置きを残すと、そのまま外方を向いて踵を返していた。

そして徐にアルビレートの手を取ると、

「さあ行きましょアルビレート、学校に遅刻するわよ・・・」

そう言って、何事も無かったかの様に彼の手を引いて、その路地の一角を後にするのだった。

しかし、黒焦げになったベレンケス、パトン、ゲトルの三人は、その体から煙を吹き上げ、雨足の強くなった雨に打たれながらも、そのままかれこれ一時間はその場で目をさます事無く気絶したままだったのは、不幸なことに誰も知らない。

いじめっ子三人を憐れんで助ける者は、誰一人としていなかったのだった。

第二節

カーランクルという街に、聖マントレス学院という学校がある。

この学院は、約二百年前に、ローゼン・ハバンという一人の神学者によって創設された、由緒と歴史のある学校だった。

街外れの丘陵地に、広大な敷地を以て建てられたマントレスは、カーランクルでは唯一の巡遣使養成学校なのである。

《巡遣使》———すなわちリングロード・マスターは、その名のとおり各地に巡回派遣され、カルディリス・メン・ヒュールでの各都市の治安をはかるといのが、その巡遣使という仕事の目的と役割である。

巡遣使は、カルディリス・メン・ヒュールという国の法務機関により正式に承認されたリングロード・マスター派遣協会《ネグリドル・ファビス》のリング使いで、メン・ヒュール各地でホムンクルスや闇教会《エンデルス・デンドニール》の襲撃や反乱があると、それを鎮圧して討伐するために、彼らはネグリドルの協会より派遣されて、そのリングロード・マスターとしての役割を果たすのである。

カルディリス・メン・ヒュール国内では、約五百年前の魔術大戦が残した遺児、ホムンクルスとの闘争が問題になっており、その異形の人造生物たちが起こす街や村への襲撃行為がいまでは日常茶飯事の災難ごとになりつつあった。

そして闇教会の暗躍———闇教会エンデルス・デンドニールは、カルディリス・メン・ヒュール国内にとどまらず、大陸各地に衛星的支部を持つ邪教背神組織なのだが、その魔界天使デンドニール・オームを崇拜し、その彼の降臨を求む彼ら闇教会は、既存の王国と敵対しているため、王国とその邪教集団との対立は、ホムンクルスの災難事よりも重要視されつつもあった。

だからメン・ヒュールでは、リングロード・マスターとしての魔術的超常能力を会得するリング使いが、王国の騎士団や街の警備隊よりも、それらの諸問題に対抗できる唯一の有効的人材として重宝されているのが現実としてあった・・

そのマントレスという学院に、指輪召喚術師、専門の学科を学ぶための教室が幾つかある。

守護天使召喚の間、と称されたその各教室には、約五十の席があり、当然そのそれらの各教室では、五十人ほどの男女が巡遣使としての養成教育を受けられることになっていた。

しかし、その教室の西側の窓辺でいま一人の少年と少女が、その窓際の窓枠にもたれ掛かって、その外に広がる丘陵地の木々の景色を眺めている姿が目についていた。

一人の少年は、眼鏡を掛けた茶色い頭髪のボサボサ頭のチビで、彼はいま窓辺から丘陵地の景色を遠目に見ると、深いため息と共に何やらうな垂れていた。

「どうしたのアルビレート、元気ないのね。さっきのベレンケス達のことを考えているのなら、余り気にしない方がいいわよ。どうせあいつ等は、一度、痛い目を見ないと自分たちがどうしようもなく悪い事をしているという事が分からないんだから、だから元気だしてよ。あなたが辛気臭くしていると、私つまらないわ」

しかし、そうその少年の隣で声をかけたのは、金髪の育ちの良さそうな少女レリル・マスタールである。

彼女は、長いウエーブがかったその頭髪を後頭部の後で括って、いわゆるポニーテールの髪型をしているのだが、いまはそのテールの髪を指でなぞってそれとなくアルビレートの顔を覗っていた。

「うん、レリル、でも僕はたとえベレンケス達にイジメられても、なんて言うか街中で不用意にリングロードの力を使っちゃいけないと思うんだ。だから後で君が学長に怒られるような事にならなければいいなとそう思っているんだよ、大丈夫かな？」

しかし、レリルが少年の顔を覗く中、そう言ったのは、その少年のアルビレートである。

彼アルビレートは、レリルに心配されながらも、実は逆に彼女のことが心配であったのだ。

何故なら、アルビレートとレリルが通うこのマントレス学院の校則では、守護天使すなわちリングロードの力をその学院生が授業の実習以外や修業目的以外の為に、妄りに乱用してはいけないという決まりになっていたからだ。

だから、先ほどその決まりを破ってレリルが街中でリングロードの力を使ったことが知れると、それなりに学院側から重い罰を言い渡されるかもしれないのである。

だからつまりアルビレートは、そのことを危惧していたのである。

だが、

「ふ～ん、それじゃアルビレートは、私のことを心配してくれているんだ。でも大丈夫よ、こう言っちゃ何だけど、私はマスタール家の娘だから、何かと祖父がこの学院の学長とも仲がいいから、もし学長に私が、今朝、街中でリングの力を使ったことがバレても、そんな事もみ消すぐらい簡単にできるわ。だから心配しないでよ、私の家の家紋をちらつかせれば学長だってまさか私をこの学院から退学させることなんて出来ないんだから、何も問題はないわ。ウチ（マスタール家）は、代々の有能な巡遣使を何代にもわたって輩出した名門の家柄なんだから、多少の校則違反なんて大したことないのよ。だから心配しないでアルビレート、決して罰なんか受けないわ・・・」

そう、レリルの実家となるビオル・マスタール家は、この街ではレッタ・バクニスク家に並ぶ巡遣使の名門的な家柄であった。

ビオル・マスタール家の先祖は、代々が巡遣使のリングロード・マスターで、その職を生業にして、いまではカーランクルーの富豪とまで言われるほどの地位と名声を高めた名家なのである。

だからこの街では、領主のケンクラート家よりも実質的な実力をもっているといわれ、街の財閥や、このマントレス学院にもかなりの顔が利くのである。

だからその家の当主、ビオル・マスタールの息子テリアートの次女として生まれたレリルは、その次代当主テリアートの歴とした令嬢で、いわば名家のお嬢様なのである。

その為、ある意味ではレリルは、この学院の優待生的立場にいる生徒でもあるのだった。

ちなみに、レッタ・バクニスク家とは、あのいじめっ子ベレンケス・バクニスクの実家でもある。この家も代々を巡遣使として生き、家名を高めた名家であった。

レリルは、それを自慢げにアルビレートに話すと、ニコリとしてその可愛らしい顔に笑顔を浮かべていた。

そして、

「でもアルビレート、私を心配してくれるなんて嬉しいわ。お礼にキスしてあげるね」

チュッ！・・・

レリルはそう言うと、いきなりアルビレートの右頬に軽く唇を押しあてていた。

「あっ、レリル何するんだよ、僕、恥ずかしいよ・・・」

すると、それに驚いて、アルビレートが顔を極端に赤くして狼狽える。

すると、

「ああっ、またアルビレートとレリルがいちゃついているぞ。見ろよ、貧乏人のアルビレートが、マスタールの玉の輿になる心算だぜ！」

「やーい、アルビレート、レリルをたらしこむなよ。お前はピンボー人のペーペーなんだからな・・・」

「そうだアルビレート、家柄の違いを考慮しろよ。マスタール家とニケリス家では、天地雲泥の差があるんだから、いい気になるなよな。お前レリルをマスタール家から盗む心算だろ、このぬすっと貧乏人・・・」

「そうだそうだ年の差を考慮しろよ、レリルは、お前より二つも年上なんだからな！！」

そう、そのレリルがアルビレートにキスした光景を見た教室内の他の生徒たちが、その時、これ見よがしに囁きたてて、アルビレートだけを馬鹿にしていた。

だから、アルビレートは、困惑した顔をして下へうつむく。

彼は囁き立てた他の生徒達を見ると、何か形容しがたい屈辱的な思いが湧き、そこで少し落ち込んで見せてはいたのである。

「あんた達ちょっとうるさいわよ！ アルビレートを馬鹿にするのは止みなさいよね。私がアルビレートのことを好きだから彼にキスしたんだから、彼をぬすっと、呼ばわりするのは止めなさいよ。そんな事、言っていると、私が赦さないんだから・・・！！」

だがしかし、そんな生徒達に対してレリルは、眉を逆立てて怒りを顕わにする。

レリル彼女は教室内をみまわすと、囁き立ててアルビレートを馬鹿にしたその生徒たちをねめつけて、有無を言わさないように制して見せていた。

だから、そのそれらの生徒たちは、罰の悪そうに口を噤んでいた。

どうやら、レリルが恐いらしい。

そう、このレリルは家柄もそうなのだが、この学院の生徒達には「雷の烈印」として一目置かれ恐れられるリングロード使いの優等生なのだ。

だから生徒たちは、アルビレートを馬鹿にして囁き立てたものの、このレリルには反発できずしょぼくっていた。

しかし、アルビレートを馬鹿にした目だけは隠していない。

そう、アルビレートは、今朝のいじめっ子ベレンケスやパトン、ゲトル達に限らず、この学院の生徒たちからは、貧乏人として軽視され蔑まされていたのである。

カラン、カラン、カラ・・

だがそんな中、`守護天使召喚の間、の教室には、二時限目から始まる `リングロード・マスターの歴史について、の授業を始めるために、担当の指導教員、つまり先生が教室に姿を見せて予鈴の鐘を鳴らしていた。

その為、教室内で騒いでいた生徒達は、徐に自分の席に着き、講義を受ける準備をする。

だからその為アルビレートとレリルも仕方無しに、自分の席へと向かい、その席に着席していた。そうそして、その日の講義の授業を、無事、何事も無く彼等は受ける事になるのである。

第三節

雨上がりの午後、冬の初旬にさしかかる季節の昼下がりの中、マントレス学院の修業グラウンドでは、巡遣使養成学院の生徒達による `法陣合わせ、の実習がその後、行われていた。

グラウンドの所々には、その手に守護天使を召喚する為のリングを填めた生徒たちが、二人一組となり向かい合った形で対局している。

そして、各生徒たちとも、自分の足元に守護天使の魔力によって描かれた魔方陣を配して、リングロードの魔術鍛練を行う。

`法陣合わせ、――つまりこの二人一組になって対局して行われる召喚魔術合戦は、巡遣使（リングロード・マスター）をめざす養成学院の生徒たちの守護天使使役能力を高めるための実習であると同時に、巡遣使としての実戦をこういった一対一の戦いの中の模擬訓練で生徒たちに、その教えの本旨をたたき込むという思惑も含まれていた。

だからこの実習は、この学院で学ぶ生徒達には欠かす事のできない、貴重な授業のカリキュラムだったのである。

今グラウンドのある一角では、レリル・マスターと、やはりこの学院の一人の生徒が両者、互いに四十メートルの間合いをもって向かい合っていた。

彼ら二人の足元には、それぞれ魔方陣が描かれ、そこから互いの守護天使の力を駆使して魔術合戦は行われる。

レリルの傍を浮遊しているのは、身長二十三センチ弱の背中に白い羽の生えた守護天使エンレースである。

彼女は、その主人レリル同様、緑掛かった金髪の水色の衣を着た天使で、どこか上品な雰囲気漂わせる、見るからに格の高い守護天使であった。

そして、そのレリルに対局するもう一人の生徒の頭上には、やはり身長二十五センチぐらいの勇壮な男の天使が直立不動の姿勢を見せて浮遊していた。

この守護天使は、メンデルという。

そして、その守護天使の主人の生徒は、この学院で五本の指の数に入るリングロード使いの優等生、マニスエルという少年だった。

この両者が相対して向かい合い、互いに守護天使の力を発動して、魔力の攻防戦がいま繰り広げられ様としていた。

そして、リングロードとしての、召喚魔術の技術を鍛錬して研くのである。

レリルとマニスエルは両者互いに睨みあい、そして守護天使の力を呪文の詠唱によって発動させ様としていた。

そして、

『わが守護天使メンデル・スイートよ、其はその火印の御力により、我が両腕に火炎の御徳を充たし、対する目前の敵を討つべくフィレア・ストールの御業を示し給え！！』

レリルという少女とマニスエルという少年の対局、つまり法陣合わせの魔法合戦が始まると、最初に呪文を詠唱し攻撃を仕掛けたのは、天使メンデルを守護天使として使役するマニスエルの方からであった。

彼は、すみやかに呪文の詠唱を済ませると、複雑な結印を胸の前で組み、それをパッとレリルの方へ突き出し、術者らしい攻撃態勢のポーズをとっていた。

すると、それに呼応した形で、頭上に浮かぶ守護天使からは、マニスエルの両腕に大量の火炎の力が流れこみ、次第にその腕が不思議な力で満たされ発熱を始めていた。

『わが守護天使エンレースよ、その雷印の御徳を我が眼前の敵の前に示し、その御力を身を護る盾とすべく、私の瘦身にガーディアスの障壁を築き給え！！』

そして、それに少し遅れる形で呪文を詠唱し始めたのは、レリルである。

彼女は、自分の守護天使に対抗魔法の発動を命じると、即座に胸の前に垂直になる形で小さな魔方陣を形成し、対局者マニスエルの攻撃を防ぐべく防御系の障壁を張り巡らしていた。

その呪文に呼応して、レリルの前面には、見えざる魔力の力が充満し、ちょうど半球形の透明な防御陣が形成される。

だが、その直後、対局者マニスエルの突き出した両腕からは、大量の炎熱をともなった火炎が乱舞して吹き出し、それが直状的にレリルの眼前に対して迸っていた。

そして、強烈な火炎の帯がレリルの眼前二メートルまで瞬時に走ると、その直後、その火炎は、レリルが張った半球形の防御陣に弾かれて霧散していた。

「チッ！ 弾かれた・・・」

それを見て唇を噛み締める様にして悔しがるマニスエル、だが、彼が自分の攻撃魔法

の失敗を苦慮している間に、その対局者となるレリルは、もう次の呪文の詠唱に移っていた。

『わが守護天使エンレースよ、其が対局者なるマニスエルの虚をつき、雷の激烈なる洗礼を示させ給え！ 『マフニクト・エレベス！！』』

そして、その呪文の詠唱と共に、レリルの守護天使エンレースは、即座に反応し上空へと飛翔すると、地上から、約二十メートルの中空で静止し、徐にその体に力強い雷撃の火花を帯電させていた。

直後——パチパチパチという電気がショートして弾ける強烈な音がしたかと思うと、エンレースは、下方に臨む対局者マニスエルに対して落下傘状に広がる分散状の電撃を撃ち放っていた。

「くそう、上からの攻撃か！？」

すると、その攻撃を察知したマニスエルは、やはり即座に呪文の詠唱を整えて対抗魔法の手続きをとる。だが、先ほど自分から火炎の攻撃をしかけてその攻撃が失敗したことにより、彼は、その失敗を苦慮して戦いに備える数瞬の間をつくっていたため、レリルの守護天使から迸る雷撃の攻撃に数秒の遅れを取り、その攻撃に対抗すべき防御陣の形成に不備を生じていた。

その為、エンレースから放たれた電撃が彼の眼前に差し迫ると、メンデルの張った障壁の防御陣は、その攻撃を完全に防ぐことができず、エンレースの強烈な雷撃に破られて、マニスエルは、その雷撃の攻撃をその体にまともに喰らい、その雷撃の衝撃で自ずと横へ弾き飛ばされていた。

「おおお、スゲー、やっぱりレリルの勝ちだぜ。みんな見たかよ、マニスエルが吹っ飛んだぜ！！」

「本当、やっぱりそうね、この学院で一番のリング使いはやっぱりレリルお嬢様よ。あのマニスエルでも負けちゃうんだもの私たちに敵うはずないわ・・・」

「そうだよな、やっぱりレリルが一番だよ。さすがマスタールの家の令嬢だよな、実力の違いがあり過ぎだよ・・・」

そして、その魔術合戦を先程から取り巻いて観戦していた他の生徒達が、口々にレリルの勝ちを称賛する中、マニスエルは地面に投げ出され苦杯を飲むことになっていた。

この魔法合戦の対局の勝負は、早々に決着がついていたのである。

二分後・・・

「いやー、レリルには参ったよ。まさか上空から攻撃を仕掛けてくるなんて、さすがは天空の雷雲を股に掛けるエンレースならではの攻撃法だね。正直、僕の完敗だよ、ちょっと悔しいけどね・・・」

エンレース、そしてレリルの攻撃魔法をその身に喰らい吹き飛ばしたマニスエルは、その後、立ち上がると、レリルにつかつかと歩み寄り、法陣合わせの魔術合戦の惨敗を認めるべく、レリルに握手を求めながらそう言っていた。

彼マニスエルは、その体を、多少、痛めながらレリルに対して手を差し出し握手を望む。

しかし彼は、レリルに負けたとはいえ、清々しい表情をその顔にのぞかせて笑って

いた。

それは、お互いにいい勝負ができたという事に対する、友好的な好意の意思表示的なものの表れなのだろう。マニスエルは、たとえ勝負に負けたとしても、決してそれを妬まない、正々堂々としたバトルシップの持ち主でもあるのであった。

「いいえ、こちらこそいい勝負ができて楽しかったわ」

だからレリルもその精神にこたえて、固い握手を交わしていた。

レリルも、その正々堂々としたマニスエルのバトルシップの気風を、快く思っていたのである。とても気持ちの良い戦いが出来たと、歓迎的にそう思っていたのであった。

だが、ここで疑問なのは、なぜエンレースの強烈な雷撃を喰らってもマニスエルは吹き飛んだとはいえ、その体が黒焦げにならず元気な姿でいられるのかというのは、どういう事なのかと思う方もおられるだろう。

強烈なエンレースの電撃を喰らって、ただでは済むはずがないと・・・

しかし、それは別に不思議な事ではないのだ。

実を言うと、この法陣合わせの魔法合戦では、あくまでこの勝負は真剣勝負をかたどった練習的な魔法合戦である為、この対局を始める前にレリルとマニスエルはお互いに自分の守護天使の力を使って、もし相手側が自分の魔法攻撃の直撃を受けた時にそれをなるべく無効にする緩衝魔法というものをあらかじめ相手側に対してお互い掛け合っておくのだ。

つまり、レリルはその対戦相手となるマニスエルに緩衝魔法を掛け、そしてマニスエルも自分の守護天使の力を使って、レリルに緩衝魔法の効果を施す。

そうする事によって、戦いの中で相手の攻撃をまともに喰らっても、その緩衝魔法が発動し、防御陣魔法とはまた別のガードをしてくれる仕組みがあるのである。

だから、レリルの雷撃攻撃をその身に受けたマニスエルは、ただその攻撃の直撃を受けて吹っ飛んだだけで、体を丸焦げにされる事はなかったという訳なのだ。

これは、この法陣合わせの実習を行う上で、大怪我を負わない為に義務付けられた魔術合戦の相互、互いの約束事なのである。

しかし、だからといって魔法攻撃の直撃を受けると、その衝撃を少なからず受けてしまうのは否めない。

だが、この学院で今までの歴史の中で、この魔法合戦を何万回と行ってきても、瀕死の重傷を負う生徒は一人もあらわれていないのは確かなことでもあった。

魔術合戦、いわゆる「法陣合わせ」とは、その様な約束事を守ってすみやかにその学院の修業グラウンドで行われる、安全無事なリングロードの実戦訓練の有効的実技鍛錬法なのである。

*

午後から始まった法陣合わせの実習は、まだマントレス学院の修業グラウンドで行われていた。グラウンドには、生徒達があちこちで法陣合わせの魔法合戦を行い、守護天使使役の技術を高めるための修業実習が再現されていた。

各生徒たちにとって、この実習は重要な修業を促す模擬実戦の場なので、だからその

実習を行う生徒達の目は真剣だった。

生徒達は、各自自分の左の指にはめられた各々のリングから守護天使を召喚すると、その天使の力を駆って、法陣合わせの実習に励んでいた。

しかし、そんな中、各生徒たちが魔術合戦を実習する光景を見ながら、つまらなそうな顔をしてアルビレートは一人観戦している生徒達の取り巻きから少し離れた場所で、その輪から隔絶したかのような格好でポツンとたたずんでいた。

そして、自分の指にはめられたリングを見て「はぁぁ・・・」とため息をはく。

アルビレートのその填めているリングは、やはりリングロードの召喚リングなのだが、それを見たアルビレートは、何だか遣る瀬ない気分が苛まれていた。

「どうしたのアルビレートため息なんかついて、何か今朝にもまして元気がないのね。もしかしたら、また自分のリングの事を気にしているの？ もしそうだとしたら、悩むのなんてやめなさいよ、それはどうしようもない事なんだから・・・」

アルビレートが、一人、自分のリングを見てため息をついていると、その時、あのレリル・マスターが彼の傍に近寄ってきて、そう声をかけて来ていた。

「あぁ、うん、でもレリル、僕は何だか今日の実習には参加したくないんだ。またみんなに馬鹿にされるのがオチだから・・・」

しかしアルビレートは、そのレリルにそう答えると、やはり苦々しいような顔をしてその面を曇らせる。

すると、

「アルビレート、あなたの気持ちは私も痛いほど解るわ。でも、あなたはこの学院で巡遣使となるための修行を積むためにここに居るんでしょ？ だからどんな理由があったとしても、この実習に参加しないで逃げているというのは、私、良くないと思うわよ。せっかくあなたのお母さんが、この学院の入学資金や授業料を払ってくれたんでしょ？ そうなると、弱気なことを言ってちゃ駄目のような気がするわよ、もっとしっかりとしてもらいたいわ・・・」

レリルは、そんなアルビレートに、同じく顔を曇らせると、彼を諭すようにそう言っていた。

しかし、

「でもレリル、僕のリングは最下級の石化リングなんだ。だからどうせ法陣合わせの実習をしても、またみんなに笑われるに決まっているんだよ。だから僕は気が重いんだ、どうして僕にはこんな守護天使しか降りて来てくれなかったんだろうね、大笑いだよね・・・」

だがアルビレートは、色玉石が輪切りにされて研かれたような自分のリングを見つめると、また落胆したように、ため息をついていた。

「・・・・・・・・」

その為、それを見たレリルも、無言で押し黙る———彼女には、そんなアルビレートをどう慰めていいかわからず、一緒に「そうね」といって落胆するしかなかった。

「おい、次はアルビレートの番だぞ、アルビレートそんなところでポツンとしていないで、早くこっちにきて実習を行う準備をしなさい。もう対戦相手のレジッタは、法陣を組む準備をして待っているんだからね。早くしないと、時間の無駄になるよ」

だがするとその時、アルビレートとレリルが落胆していると、実習を取り仕切ってい

る一人の指導教員からの呼び出しがあった。

どうやらアルビレートが実習を行う順番が回ってきた様子で、その為に呼び出されたみたいなのだ。

だからアルビレートは、その声にビクッと反応すると、徐に指導教員の方を振り向いていた。

そして、またその後、徐にレリルの方を見る。

するとレリルは、

「とにかく頑張ってアルビレート、私、応援しているから！！」

彼女レリルは、そう言ってアルビレートを元気よく、勇気づけた。

レリルには、今はそう言うしか、他に何も言うことは無かった。

彼女レリルには、他にアルビレートに対して何かしてやれることは、彼を勇気づける言葉、以外、その他に何も良い言葉を掛ける考えは、そこでその時、何も思い浮かぶ事は無かったのである・・・

*

だが、その後、修業グラウンドの一角では、アルビレートとその対戦相手レジッタという少年の法陣合わせが、いよいよ始まりを迎えようとしていた。

まず二人は、始めに実習指導教員の指示の元、お互いに自分のリングから守護天使を呼び出すように命じられて、互いに向かい合わされていた。

しかし、そんな中、そのアルビレートとレジッタの法陣合わせが行われる場には、他の場所で行われている実習の場をよそに、その観戦者の数が異様に多かった。

それは、ほとんどの者がこのアルビレートとレジッタの魔法合戦に注目していたからである。

そんな中、まず始めに、レジッタが自らの銅色のリングから守護天使を呼び出すと、まずアルビレートに対して緩衝魔法の保護をかけていた。

そして彼は、アルビレートの次の行動を待つ。

だから次、今度はアルビレートが自分の守護天使を呼び出す番なのだが、その時、その場を取り巻いていた他の生徒達の視線は、アルビレートの召喚の行為に食らい付くように自ずと惹き付けられていた。

みんな期待しているのである。

だからアルビレートは、そんな視線を感じながらも、嫌々ながら言葉を唱えて自分の守護天使を呼び出していた。

『いでよ、僕の守護天使チチル！！』

すると、

「あははははは、出たぞ見ろよアルビレートの守護天使だ。チチルだってよ、相変わらず子供じみた守護天使の下級な在り来たりの名前だよな。しかも いでよ、チチル、だってよ、まったく幼稚な魔法ごっこ遊びの呪文の言葉じゃないんだから、もっと格調のある呪文が唱えられねーのかよ。でもホントおもしれーぜ、な、ホント、アルビレート様には参りましたよだ・・・」

アハハハハハハ！　アハハハハハハハ・・・！！

そしてそこで、どっと観戦者となっている取り巻きの生徒達の輪から、大笑いの声が沸き上がっていた。

そして、

「おいアルビレート、早くレジッタと対戦してみろよ。どうせお前なんかすぐやられて負けちまうんだから、せいぜい怪我しないように逃げ回るだけにしておけよな。でないとレジッタの守護天使バンガニスにボコボコにされるぞ、絶対、お前、小便チビんねーよーにしろよな！」

そう彼ら他の生徒達は、アルビレートの守護天使と彼本人を馬鹿にしたくて、この二人の魔法合戦の場に群がっていたのだ。

だから、その声を受けるとアルビレートは、自分の頭上を見上げて済まなそうにしよぼくれた顔をしていた。

アルビレートの頭上には、彼の守護天使チチルが、やはり馬鹿にされて恥ずかしそうにして首をうな垂れている光景が見られていたのである。

チチルは実は、天使は天使でも、まだ未成熟の女の子の天使なのである。

だからその姿は、まだ十歳ぐらいの子供の格好で、とても美しい守護天使であるとは言えなかったのだ。

そして馬鹿にされるもう一つの理由は、そのチチルが、女の子であるにもかかわらず、衣を一糸纏わぬ全裸の格好を晒していたからであった。

実は、その天使が全裸であるという事は、その天使の階級が非常に格が低いということの意味していたのである。

その為、それを知る他の生徒達は、「早くチチルに服着せてあげろよアルビレート」とか、「アルビレート、お前ロリコンなんだろ」といって、さらに彼を馬鹿にするのだ。

だからアルビレートは、それが嫌で、先ほど実習を行う事をレリルに嫌だといって話していたのである。

しかし、そんな事はともかく、アルビレートは馬鹿にされ悔しがりながらもまた呪文を唱えて、対戦相手のレジッタに対し緩衝魔法の効果を施し、そして更に自分の足元にチチルの魔力によって形成した小さい三十センチたらずの魔方陣を描き、魔法合戦の準備を整えていた。

そして、ようやく対局が始まるのである。

だが、

その決着は、取り巻きの生徒達が馬鹿にして予想していたとおり、アルビレートのあっけない敗北で幕は下りていたのだった。

レジッタとアルビレートの法陣合わせの対局は、まず、アルビレートがチチルの「氷牙」の魔力を使って先制的に攻撃し、その戦いの口火を切ったのだが、チチルの力を駆ってアルビレートが繰り出した攻撃魔法は、ことごとくレジッタの守護天使バンガニスの防御陣にまるで蠅をたたき落とすがごとく粉碎され、そしてそのバンガニスの「爆砕」の攻撃で、アルビレートは防御陣を敷く暇もなく打ちのめされて吹き飛ばされていたのだった。

だから、その勝負が決したとき、生徒達はアルビレートをまた馬鹿にして、その無様

な負け方を嘲弄して止まなかった。

そう、結局アルビレートは、彼を蔑む生徒達の恰好のいい笑いの種にされていたのである。

彼を小馬鹿にする、意地悪いこの学院の他の生徒達等によって・・・

第四節

だが放課後、アルビレートは、レリルと共に学院から家へと帰宅の徒についていた。

二人は、その途中まで、同じ帰路をたどる道筋を、横に並びながらトボトボと歩いていた。

いま二人が歩いているのは、カーランクルの街の西地区なのだが、その街中の街路地を一路、南に向かっているのだった。

しかし、その二人の歩く後ろ姿を見ると、何やら辛気臭げに見える。

二人して肩を落として歩くその姿は、気の抜けたシャンパンの様に味気のないものであった。

「ねえアルビレート、元気だしなさいよ。いつまでもしょぼくれていても仕方ないでしょ。まあ、みんなに馬鹿にされて落ち込んでしまうのは判るけど、ここでみんなのイジメに負けたら、それこそこのまま泣き寝入りするばかりになってしまうわよ。それに、ただでさえあなたって頼りがいがないんだから、そんなに落ち込んだりしていると本当にダメ人間になってしまうからね。だから元気だして、前向きな心をもとうね」

そんな中、レリルは、右隣に肩を並べて歩くアルビレートを見て、なんとかして元気づけようと、そう慰めの言葉を発していた。

「・・・・・・・・・・」

しかし、その言葉を受けてもアルビレートは無言、彼はトボトボと歩きながら下をうつむくと、その時、悔しそうに路地に落ちていた一つの小さな丸石を蹴飛ばしていた。

「ねえ、アルビレートったら・・・」

するとレリルは、その姿を見て、なんとか彼を前向きにさせ様として、肩に手を置いてあげたりして、落ち込んでいる気持ちを持ち上げてやろうとする。

だが、アルビレートは、それにも反応せず、ただ押し黙ると首をうな垂れるだけだった。

彼は、今日の実習鍛練で、他の生徒達に大笑いされ馬鹿にされたことが、未だに悔しくて悔しくてならなかったのである。

だから、いま彼が落ち込むのも無理はないのだけど、アルビレートにとってこれは屈辱のなにもものでもなかったのだった。

いつもみんなにイジメられ馬鹿にされる、それは彼をイジメて面白がる他の生徒達にとっては大したことはないのだが、このひ弱なアルビレートにとっては、それは耐え難い苦痛でしかなかったのだ。

いじめる側にとっては、アルビレートが落ち込もうと、大して気にも留める事ではない。

だが、アルビレートにとっては、重要な大問題でもあるのである。

これは、イジメられる立場の人間にしか分からない心境だろう。

弱者はいつも軽視され、侮蔑、嘲弄の対象になる場合があるのだ。

これは、力を獲て上級へのし上がろうとする世界での、常識ごとでもあるのかも知れなかった。

しかし、何故アルビレートが、これほどまでに他の生徒達に馬鹿にされるのかは、それなりにある意味、訳があった。

それは、アルビレートの家系にも、問題があったのである。

アルビレート、つまりアルビレート・ニケリスの家系は、もともとこの街カーランクルの住民と昔敵対していた東の蛮族の支配下にいた従属奴隷が奴隷解放されてこの街で後に定住権を得て家をもつようになった、余所から来たいわば流れ者の家系の出なのである。

つまり、敵対していた蛮族が労役を強いていた元下民の奴隷、だからその奴隷がこの街に来ていまの時代になって定住権を得ても、その過去の身分上、疎まれ蔑まされる立場をこの街でいまでも暗に一部の人間にそれを強要され虐げられていたのである。

そう、これはある意味、身分が高い優越感を誇示する高邁な人間が、以前、蔑まれていた人間に対して抱く理不尽な差別的根性なのだが、こういった侵害な感情を抱く愚昧の人々は、どこにでもいるものなのである。

自分は身分が高い故、優越者で身分の卑しかった者はすべて劣等種、この秤にかけて物事を判断する人間は、すべての表向きの名目だけの肩書きや素性を重要視するのである。

だから、そんな経緯がある以上、アルビレートは、この街の人間にとっては余所から流れてきた卑しい下民と等しい立場とされていた。

そう、そんな蔑まされるような理由が、確かに存在はしていたのである。

だが、これはあくまで、一部の人間において言える性情である。

そんな人間が多い中でも、アルビレートと対等に付き合い、好いている人間もいるのだ。

そう、レリルである。

彼女は、この街の名家に属する家の子息の令嬢であるにもかかわらず、彼とは親しく接してくれている、そして、多大な好意を持ってくれてもいるのだ。

しかし、マントレス学院では、アルビレートは卑しいイジメの恰好の対象だった。

アルビレートは、レリルはともかく、マントレス学院の生徒達には、無関心派を除き、ほとんどの生徒には疎まれ馬鹿にされ嫌われていたのである。

その現実には、まだ十四歳のこのアルビレートには、コクな酷い仕打ちでもあった。

だが、これ程までにアルビレートが学院の生徒達に馬鹿にされるのには、その友人（恋人？）のレリルには、なかなか納得のいかない現実だった。

もともとアルビレートは大人しく真面目な性格で、人が善いので、他人から嫌悪されることはそれ程ない少年の筈なのである。

しかし実際には、学院のほとんどの生徒達にイジメにあい、そして馬鹿にされる。

その現実、レリルにとっても、とても承服できるものではなかった。

レリルにしてみれば、アルビレートは頼りないが、可愛い弟みみたいな存在なのである。

そして、なにかと面倒を見てあげたい存在でも・・

だが、そんなアルビレートをいじめる学院の生徒達には、レリルも頭にくる部分が、至極、多分にあった。

どうしてこんな良い子をいじめるのか、どうして馬鹿にするのか、レリルは一度、学院の生徒達に面と向かって問いただした事があるのである。

しかし生徒達は、その訳を話そうとはしない、ただレリルを恐れて口をつぐむばかりだった。

そして悪気があって馬鹿にしている訳じゃないんだよ、などと、言い訳がましいことを言う他の生徒も一部にはいるのである。

だが、レリルには、それがどうしても納得できない。

どうしてアルビレートばかりを・・・

どうして、どうして・・

それがレリルの正直な心の内の心情なのである。

確かにアルビレートは、他の生徒と違って鈍臭くとろい部分もあるが、何もいじめることはないではないかと、レリルはつくづくそう思うのだ。

これではアルビレートが、あんまりにも可哀想であるとそう思うのである。

レリルは、実際こんなアルビレートが好きなのだ。

だから、いつも一緒に傍にいる。

そしていま、アルビレートが落ち込んでいる気持ちも、痛いほど解るのだった。

でも、いまのアルビレートは、今までのイジメがつもりに積もって相当へこんでしまっている様子であった。

その為、レリルにしてみれば、彼をなんとかして勇気づけてあげたいのである。

だからレリルは、二人して家路に向かう路地を歩く中、無言で押し黙るアルビレートに、また優しく声をかけるのであった。

「ねえアルビレート、お願いだから元気だしてよ。あなたがそんなにしょぼくれていると、何だか私まで悲しくなってくるわ。私あなたのことが心配なのよ、だから嫌なことはもう忘れて、楽しい事だけを考えましょう？ その方がきっといいわよ」

すると、

すると、そのレリルの言葉にアルビレートはしばらくして頷くと、「レリル、僕を気遣ってくれてありがとう。でも今日は、どうしても前向きな気分になれないんだ。だから気持ちは有り難いけど、少し放っておいて欲しいんだ・・・」とあって、鼻をジューツと吸るのである。

だがそして「ここで今日はお別れだね」とあって、歩いていた路地の目の前の角をアルビレートは見据えていた。

そう、いま二人のいる路地の角で、アルビレートとレリルの帰り道は別々になるので

ある。

だからアルビレートは「それじゃ、また明日レリル、気をつけて帰ってね」と、そう元気がない声で別れの文句を言うと、その路地の角を曲がってまたトボトボと歩いて行ってしまふのである。

だから、

「うん判ったわアルビレート、でもあなたも気をつけて帰ってよ。あまり落ち込んで俯いてばかりいると、石に躓いて転んじゃうから、とにかく元気だしてね。明日になったら、またあなたの笑う顔が見たいんだから」

だからレリルは、そんなアルビレートに、少々、心配の気を残しながらも、『きっと明日になれば、彼もまたケロッとして元気になっているわよ』と、心のなかでそう思い、少しべつ方向に向かって去っていくアルビレートをその場で見送ってから、彼女も家に向かう路地をその後、歩いて帰宅の途についていたのである。

レリルは、そんなアルビレートのその後を、それほど心配してはいなかったのがあった。

だが、

だがしかし、レリルと別れたアルビレートには、この後とても酷い災難が降り掛かる事になるのである。

*

それは、アルビレートが、レリルと別れてうな垂れながら路地を歩いていた時だった。彼アルビレートが、突然、人の気配を感じて顔をあげたその刹那である。

その目の前には、三人の少年が立ちはだかっていたのであった。

ベレンケス、パトン、ゲトル、そう、あのいじめっ子三人組であったのである。

彼らは、突然アルビレートの目の前に姿を現すと、鋭い目を向けて、彼アルビレートを睨み付けて来ていた。

だから、それには落ち込んでいたアルビレートも絶句していた。

またこの三人に絡まれると、そう思ったからである。

「ようアルビレート、久しぶりだな、元気してたか？　でもよ、こう言っちゃなんだけど、俺たちは、今日オメーとレリルのおかげで学院にも登校できず、酷い目に遭ったんだぜ。そのことをオメーは判っているんだろうな、おれ達は、その事でここで待っていたんだよ」

そして、そう言って、一番最初に声をかけてきたのは、ゲトルであった。

彼は、アルビレートを目の前にすると、相当、怒りの面を顕わにして鼻息を荒くしていた。

だから、

『相当、怒っている・・・』

それを見たアルビレートは、今朝のことを思い出して、その顔を青ざめさせていた。

すると、

「おいアルビレート、お前は、貧乏人のくせに意外と頭だけは良いから、おれ達の言うこ

とが判ると思うけど、なんでおれ達がここでお前を待っていたか解るよな？ おれ達は、今朝お前のせいで、レリルに電撃喰らって真っ黒焦げにされたんだ。だからおれ達は、それを怒っているんだよ。何もかも、お前のせいでそうなったんだからな・・・」

そして、次にそう言ったのは、パトンである。

彼もゲトル同様、鼻息を荒くして、血走った目をギロつかせて、アルビレートとその目で睨み付けてきていた。

そして、

「アルビレート！！ いまからお前を徹底的にいたぶってやるから、お前の守護天使チチルをいますぐ呼び出して、ここでおれ達と法陣合わせの勝負をしろ！ ここで今朝の屈辱を仕返ししてやるからな！！」

そう最後にそう声を荒らげて怒って来たのは、ベレンケスである。

彼は、そう言うよりも早く自分の左腕をアルビレートに突きだすと、その左手の指に輝く銅色のリング見せ付けて、即座に呪文を詠唱していた。

「我が守護天使、背徳のビクタンサよ、その御姿を我が前に顕し、その御力の助力で我を補佐し給え・・・」

そして、パトンとゲトルもそれに呼応して、自分の守護天使を次々に呼び出していた。

「我が守護天使マイチート、現れ出でて我の腕となれ！！」

「我が守護天使ベニクマ、御姿を顕し我に呪力を与えよ！！」

すると、その守護天使の召喚の呪文により、三人のいじめっ子たちの頭上には、それぞれビクタンサという名の男の守護天使、そしてマイチートと言うやはり男の守護天使、そしてやはりベニクマという男の守護天使が三体勢揃いし、その厳めしい雄姿をアルビレートの顔前に曝し出して来ていたのである。

だから、それを見たアルビレートは、極端な恐れを抱き萎縮する。

そして、

「やめてくれよベレンケス、また僕をイジメないでくれよ！！」

と、彼アルビレートは、そう叫んでいた。

しかし、

「うるさいアルビレート、つべこべ言ってねーで、早くお前もチチルを呼び出せよ。そうしねーとお前を本気で殺すからな。そうなりたくなかったら早く呼び出せ、おれ達の本当の力を、お前に嫌と言うほど見せてやるからな・・・」

そう、しかし、アルビレートが半泣きで叫ぶと、ベレンケスは殺気立った視線でアルビレートの言葉を制し、そして威喝してきていた。

その為、アルビレートは、落ち込んでいたことも忘れて、その場でオロオロと慌てるばかりになっていた。

しかしそうかもしれない、三人のいじめっ子、それに三人の守護天使たちに睨まれているのだ、だからアルビレートは恐くて恐くて、その場から逃げることも出来なかったのだ。

「早くしやがれアルビレート、お前も自分の守護天使を呼び出すんだ。そうしねーとこうだからな！」

だがすると、ベレンケスがそう言った直後、右隣にいたパトンがいきなり短い呪文を

唱えると、自分の守護天使マイチートに攻撃命令を下していた。

つまり自分の守護天使に、攻撃呪文の発動をさせたのである。

だから、その呪文を受けてマイチートという天使は、その右腕を一振りすると、そこから突然、鋭利な魔法の刃を迸らせて、アルビレートに直状的に放ってきていた。

その刃とは、死に神が手にしているような鎌状の物で、それがアルビレートに対して一直線に飛ぶと、その頭上をスレスレに掠めていた。

スパッ！

だからその直後、アルビレートの頭髪が、ごっそりと切り取られて宙を舞う。

「ひいイイツ・・・」

その為、アルビレートは、その攻撃を喰らうと、脳天を両手で押さえて彼等の仕返しを望む怒りの強さを、そこで嫌と言うほど思い知らされていたのだ。

「さあ、これで判っただろ。お前がチチルを呼び出さねーと、今度は、本当にお前の首が飛ぶことになるぜ。そうなりたくなかったら、早くお前のロリコン人形を出せ！ おれ達は、そんなに優しくねーんだからな！！」

そう、そして、アルビレートが頭を気にして冷や汗を流していると、またベレンケスがそう叫び威喝してきていた。

だからアルビレートは、仕方なく、怯えながらも呪文を唱え自分の守護天使チチルを召喚し呼び出そうと、声を出して叫んでいた。

「いでよいでよチチル、いでていでて僕を助けて！！」

だが、その召喚の呪文は、何かやけくそ的であった。

彼アルビレートは、どうやら怯えて気が動転している様子で、そんな呪文の呼び出ししか出来ないでいた。

だがしかし、それに反応して、彼の指輪からは律儀にも、守護天使のチチルが『ぴゅうっ』と姿を顕わにし、アルビレートの顔前に召喚されて出て来た。

そして・・・

「あの～ご主人さま、こう言っちゃなんですけど、いつもと違う召喚の呪文で私を呼びださないで下さい。あまり違った呪文で呼びだされると、私、頭が混乱して出てくるのが辛いですから、お願いだから何時も通りにして下さいね。『いでよ、僕の守護天使チチル！！』にしておいて下さい・・・」

だがチチルは、その呼び出しを受けると、状況もわきまえず、そこでアルビレートに対して呑気にもそんな事を言って来ていた。

だが、アルビレートにしてみれば、ここでそんな事を言われても、どうしようもなかった。

彼アルビレートは、ベレンケス達に恐れを抱く余り、やはり気が動転してか、かなり慌てていた様相をそこに見せていたのだ。

だから彼は「チチルそんな場合じゃないんだよ、いいから僕を助けてくれ！ このままだと僕ベレンケス達に殺されちゃうよ！！」と、そう言って極端に狼狽えた様子をそこで見せ、自分の守護天使に対して、情けなくもそんな事を言って助けを求めたのである。

だがしかし、チチルは、そう言われても天使のくせに馬鹿なのか、キョトンとして辺

りを見渡すと怪訝な顔をして、少し呆けていた。

チチルはこの状況を把握していないのか、まったく警戒心のかけらも無く、ケロッとした仕草をそこに見せていたのであった。

すると、「よ～し、やっとチチルを呼び出したな、こうなれば、お前は自分からおれ達と戦う意思表示を示したって事になるから、正々堂々とした戦いの勝負が出来るってことだな。そうなれば、もうレリルのくそ女に、とやかく卑怯だなんていわれねーから、思う存分お前を痛め付けてやる事が出来るぜ。だから覚悟しなアルビレート、いまからお前をぶちのめしてやるからよ！」

だがすると、アルビレートがチチルを呼び出した後、ベレンケスはそう言って、ニタニタとした笑いをその顔に浮かべて、嫌らしくもほくそ笑んで見せていた。

ベレンケスはアルビレートに対して、あざ笑うかの様な顔を見せると、その次にはそのアルビレートに対して自分の左指の指輪を見せつけて、その彼に対してこう叫んでいた。「それじゃいくぞアルビレート、この攻撃魔法を喰らっておっちんじまいな！！」

そう、そしてベレンケスはそう言うのと、アルビレートに対して即座に自分の守護天使の攻撃を仕掛けるべく、こう呪文を唱えていた。

「吾が守護天使ビクタンサよ、その君が豪腕をもって憎っくきアルビレートの恥身を打ちのめし給え・・・」

そう、ベレンケスは、即座にそう呪文の詠唱をすると、自分の守護天使に対してアルビレートに対抗する攻撃命令を、そこで下して見せていたのである。

すると、ベレンケスの守護天使ビクタンサは、その直後、その三十センチたらずの身体に猛烈なエネルギーを漲らせ、その体の筋肉を大きく脈動させ始めた。

そして次に、次第にその腕を二倍三倍に拡張させると、突然その腕から『拳』の魔法を脅えるアルビレートに対して即座に打ち放っていたのである。

それは猛烈な勢いの『拳』で、ビクタンサから放たれたその拳の剛力は、約百数十もの拳に分裂すると、その全てがアルビレートの全身へと肉薄して、あらゆる方向から一気に彼アルビレート目掛けてそこへと勢いよく向かい、剛鉄の様に、た走っていた。

「ひいィい、チチル助けて！！」

だからその為、アルビレートは、それに恐怖し、チチルの防御陣魔法を駆ることも忘れて怯えると、そのまま何を思ったか、ベレンケス達に、突然、背を向けて逃げ出していたのであった。

だが、

ドドドドド！　ドドドドド！　ドドドドド！

ドドドドドドド・・・！！

その直後、逃げるアルビレートの体には、無数の拳が激突していた。

アルビレートは、その拳の連打をまともに受けて撃たれると、立ったままのたうつ様に身体を打ち震えさせて、その暴力的な力を否応なくまともに受け身悶えしていた。

そう、ベレンケスの放った攻撃魔法の『拳』の連打は、アルビレートの全身全ての方向から彼を打撃すると激しい力の激突と共に、そのアルビレートの体を痛打していったのだ。

そして、アルビレートは、その猛烈な拳の攻撃に打たれると、何も抵抗することがで

きず、無様にも最後には路地の横壁に激突して吹っ飛んでしまっていた。

そして「いやー！ ご主人さま、しっかりしてー！！」

そして、その自分の守護天使のチチルの叫び声と共に、アルビレートは吹き飛んだあと、地面に倒れ込むと、そのまま動かぬ骸のように気を失って意識が暗転してしまっていたのである。

「はぁははははは、まったくザマーねーぜ。せっかく自分の守護天使がいながら、防御の呪文も唱えず逃げ出すんだから、これじゃリング使いとしての資格、全然なしだよな。でもこれで俺たちの恐さが判っただろ。俺たちに逆らうと、こんな目に遭うんだからな！！」

「ははっ、ベレンケスそうだよな、こんな貧乏人のペーパーに、俺達が負けるはずねーんだ。だから、これが当然の結果だよ。アルビレート、お前の守護天使なんてどうせお前と同じ役たたずなんだ、何も出来ないロリコン人形なんだよ！」

「ふっ、そうだけそうだけ、お前の実力なんてこんなもんだ。結局お前は、レリルに頼らねーと何もできねート口臭いチビ助けなんだ。だから今度、俺たちに逆らったら、また、ただじゃおかねーからな。精々ウチに帰って、かーちゃんのおっぱいでもしゃぶって泣きベソかいてろ。お前には、それが一番お似合いなんだから、今後、俺達に絶対、逆らうなよ！」

そう、だからそして、ベレンケス、パトン、ゲトルの三人は、気絶したアルビレートを見て悪し様に罵倒すると、その彼の体にペッと唾を吐きかけて、そのまま大笑いをあげてその場から立ち去って行ってしまふのである。

ベレンケス等は、気絶したアルビレートに何の情けもかけること無く、そのままその後、無視すると、復讐の念を晴らし、意気揚々とその場から引き揚げ、そこに意識を失ったアルビレート一人を放置して、何も顧みることも無くその後やはり嬉しげな大笑いを上げて早々にその場から姿を消して、満足げに自分の家へと、その後、帰宅の途についていたのであった。

そう、一人おろおろとする何も解らない、アルビレートの守護天使チチルをその場に残してだった・・・

第五節

「ご主人さま、しっかりして！　しっかりしてー！！」

だが・・・

だが、それから少しして一分後、あのいじめっ子三人組、ベレンケス、パトン、ゲトルが去ると、その後、アルビレートの守護天使チチルは、泣きじゃくりながら主人のことを揺すり起こそうとしていた。

彼女チチルは、小さいくせに懸命に浮遊しながらアルビレートの肩を揺ると、その正気を取り戻させようとして、事もあろうに足で蹴飛ばしたりしている。

しかし、主人のアルビレートは、もはやポコポコに打ちのめされており、完全に気絶してチチルの力ではどうする事も出来なかった。

そう、ある意味、瀕死の状態ではないのだが、アルビレートが大怪我を負ったのは、確かなのである。

だからチチルは焦る、自分の主人がこんな状態になっては、彼女としても放っておくことは出来ないのである。

チチルにとって、アルビレートは、自分の従うべき偉大なリングロードなのである。

その為チチルは、どうかしようとして、そのバカなのか良いのか解らない頭を使って、この危機的状況をどう解決しようかと考えていた。

するとその時、チチルには、ある考えが思いつく。

それは、あのアルビレートと親しいレリル・マスタールという少女に、助けを求めに行こうというものである。

彼女は、チチルがリングの中で外の様子を覗いていた限りでは、あの娘は、まだそれほど遠くへは行ってしまった筈はない、さっきアルビレートと別れたばかりなのだ。

だからチチルは、そう思うと、レリルに助けを求めべく、背中小さな羽をはばたかせようとして動きかけていた。

すると、

「ちょっと待ちなさいそこの守護天使、君が誰かに助けを求めに行かなくても、私がここに来たから大丈夫じゃよ。だからそなたは、この少年の傍にいてあげなさい、いま助けをあげるからね・・・」

チチルが助けを求めに飛びだそうとした時、そこに、突然みすばらしい一人の老人が現れていた。黒いローブを目深にかぶった白髭の老人、その老人は、優しくそうな口調でチチルに近付くと、いきなりチチルの体を舐め回すように見つめて来たのだった。

そして、

「ふむふむ、そなたはなかなか良い体をしておるじゃないか？ それならば将来、美しい守護天使の姿に成長するだろう。しかし、ところで名前はなんというのかな？」

老人はそう言うと、嫌らしい目付きでチチルに手を触れようとしていた。

バコン！！

だがその時、突然、老人の頭の後から赤い髪の美しい天使が現れると、その手にしていた特大のハンマーで、老人の後頭部を容赦なく殴打するのである。

「ぬおおおお！ 痛いではないかマルレリス。わしゃーただこの可愛らしい天使さんに、ちょっとした触れ合いのご挨拶をしようとしただけなのに、何も殴ることはないじゃろ。まったくお前という奴は、すぐワシが他の女の子に近付くと、やきもち焼いてハンマーで殴るから質が悪い。もうワシは老人なんじゃから、もっと労って欲しいものじゃ。まったく、なあそう思うじゃろメルヴィー、お前さんなら解ってくれるよの？」

すると、老人がメルヴィーと言うもう一人の美しい黒髪の天使に呼び掛けると、その彼女は「この変態スケベジジイ！」とあって、いきなり老人の鼻っ柱を蹴飛ばしていたのだった。

「ぬおおおおお、何するんじゃメルヴィー、お前までワシを足蹴にするのか！？ まったくお前たちと来たら反抗的でたまらん、これじゃから女の嫉妬は嫌じゃ。ところでミュール、お前さんならワシの気持ちは解ってくれるじゃろうな？」

すると・・・

ご～ん

老人がそう言った直後、またその老人の頭には、でっかい鉄鍋が振り下ろされていた。「何をするうううう・・・」

だから、

だから老人は、白目を剥いて路上に倒れこむ・・・

よく見ると、頭からは血を流していた。

「ヒュール爺、ちょっとあなたスケベすぎるわ、私そんな爺って嫌い！！」

そして、老人が路上に倒れて、仰向けのまま上空を見上げると、水色の髪をなびかせた豊満な胸をもつやはり綺麗な天使が、鉄鍋を頭上にかかげて顔をぶうーっと膨らましていた。

その為、老人は血を流した頭を押さえつつも、立ち上がると「何するんじゃ～、この三バカ娘！！」と、殴られた割には元気な姿をして怒り散らしていた。

しかし、

「あの～？ あなた達は一体、何者なのですか？」

と、アルビレート守護天使に不思議そうに問い掛けられたので、ヒュールという白鬚の老人も仕方なく怒るのを止め、その小さな守護天使に向き直っていた。

そしてその老人ヒュールは、真顔になっていたのである。

「あのな、ちっちゃな天使さん。ワシはヒュールという巡遣使で、いまはしががない貧乏リングロード・マスターなんじゃが、訳あってワシ等はそこの気絶しているアルビレートという少年に会いに来たのじゃ。しかしその彼に会いにここに来てみると、何と私の愛しいアルビレート少年が三人の少年たちに因縁を付けられて、イジメられそうになって脅されているではないか。だからわしゃそれを見て助けようと、そこの路地裏の角に隠れてその一部始終を最後まで見ていたんじゃ。だが時もう既に遅く、その少年はやられてしまったのじゃよ・・・」

そう、老人ヒュールは、真顔になったあとそう言うと、アルビレートの守護天使チチルに対してニコリと嫌らしく笑いかけていた。

すると、

「・・・っていうか、ヒュール爺は、ただビビって一人の少年がやられているのに、ただ路地裏の角に隠れて見ていただけじゃない。そう言うのは、助けにきたというんじゃない、見殺しにしたというのよ！ 解ったこのくそジジイ、ここで助けにきたヒーローの様に英雄ぶるな！ 助けるならこの少年がやられる前に助けなさいよ、このバカ・・・」

老人がチチルに対して笑いかけると、その時、黒髪の色白い赤目の天使がそういうと、老人のおでこに小さな手でデコピンをくれて攻撃していた。

しかし老人ヒュール、彼は、それにも動じず、胸を張って正義の味方面をして偉ぶっていた。

だが・・・

「へーそうなのですか？ それじゃ善い人なんですね・・・」

しかし、チチルは、その会話の意味が解らずに、ヒュールという老人を善人扱いすると、何故だか「ありがとうございます」と頭を下げていた。

「っていうか、この天使もバカ？」

だから、それを見た黒髪の天使メルヴィーは、その態度に呆れると、ツツツとなにか興味を失ったように上空へ飛翔して、その場で浮遊したまま寝転がって頭に立て肘を突いていた。

どうやら、バカらしくて相手にしたくないらしい。

「ねえ、ところでどうするのヒュール爺、あの子、助けるの、それともこのまま見殺しにするの、一体どうする？」

しかし、そんな無意味な会話を老人とチチルがしていると、その時、水色の天使ミュルルが話題を変えて、気を失っている少年の姿を指し示し、そう老人に問い掛けて来ていた。

だから老人ヒュールは、「おお、そうじゃった、そう言えば彼を癒やしてやらねばならないのだった、思わずそんな重大なことを忘れてしまったよ・・・」

と言って、とにかく少年に歩み寄ると屈み込んで、まず打撲の痣の具合を調べ始めていた。

ヒュールは、俯せに倒れていた少年を仰向けにすると、そこで心音を確認する。

そして、その心音が確かに鼓動している事を知ると、その時ミュルルを呼んで癒やしの魔法を掛けるように使役していた。

その後・・・

「うっ、ううっ・・・」

その癒やしの術の甲斐あり、少年は目を覚ます。

そして「あなた達は、一体だれですか？」と、その少年アルビレートは、怪訝な表情を浮かべて問い質して来ていた。

だから老人ヒュールは、「ようやく会えたの、我が愛しのアルビレート君よ。ワシははるばるエックランから会いに来たのじゃ、お前さんにワシのリングロードの指輪を譲るための・・・」

そう、だから老人ヒュールは、そう言ってそこで、彼、少年アルビレートを、いざ気持ち悪く、きつくここぞとばかりに、これぞと強く抱きしめて来て見せていたのである。

それまさに天の神に導かれて、その彼にやっと直に出会うことが出来たかの様にしてた。

そう時は夕暮れにさしかかる、その日の終わり頃の時・・・

二人の運命の出会い、それはまさに定められた、それその時の邂逅ならざる希な「縁(えにし)」、であったのかも知れないとしてだ————

第二章 指輪の継承

第一節

夕刻過ぎ、寒風が吹き抜けるあばら屋で、アルビレートは涙が枯れるまで泣いていた。あばら屋の、食堂に設けられた食卓用のテーブル、その上で顔をふせてシクシクと涙で濡れて鼻をジューッと吸る。

アルビレートにとって、いまは、心いくまで泣くしかなかったのである。

そう、アルビレートは、自分の弱さを悔いていたのであった。

「あらあらアルビレート、まだ泣いているの？　泣くのも良いけれどももういい加減、元氣を出しなさい。悔しいのは判りますけど、泣いてばかりではそのいじめた学院生の三人に、また馬鹿にされてしまいますよ。いいですか、だからもう涙を拭きなさい・・・」

だが、いまそう言ってあばら屋の台所から熱々にお湯の沸いたポットを持って現れたのは、アルビレートの母のシアンカである。

彼女は、食堂のテーブルまで熱湯の入ったポットを持ってくると、そのポットのお湯をテーブルに置いてあった二つの陶器製のカップに茶漉しで注ぎ、ささやかながらお茶を香り立てていた。

そして、その食卓に座るもう一人の人間に、そっとそれを差し出す。

「さあ、どうぞお飲み下さい・・・」

そして自分も、その食卓用のテーブルの椅子に、腰を下ろしていた。

「ああ、どうも済みませんな、突然、押し掛けたとはいえ、こんな持て成しをしてもらうなど、見ず知らずのワシにはもったいないのじゃが、この際だからこのお茶をいただく事にしましょうかな、今日は外は冷えますからの・・・」

シアンカがお茶を差しだし、それを受け取りながら礼を述べたのは、白鬚の老人ヒュールである。

彼は、そのカップを受け取ると、それに両手を押しつけて自分の手を温めていた。

そして、

「あの、それからですな、もてなしついでにこう言っちゃなんですが、この三人の娘たちに何かおつまみになるモノを出してもらえれば嬉しいのですが。たとえば鳥のもも肉とか、そんなモノがこの家があれば出してやって下され。この三人娘にはエサ・・・いえ食事をとらせてあげたいのですじゃ・・・」

ヒュールは、図々しくも、そう言ってシアンカを見ていた。

ギューツ・・・

それから、はしたなくも、自分もお腹の虫を鳴らす。

そして「しかし腹減りましたの・・・あはははは」と、わざとらしくお腹をさすっていた。

すると・・・

「あら、それならばヒュールさん、ウチもちょうど夕飯の支度が済んでいるところですから、お口にあうかどうか判りませんが、食事をどうぞ食べていって下さいな。それに鳥のもも肉もいま用意しますから、ちょっと待っていて下さいまし。あなたは何せ、アルビレートの命の恩人なのですからね・・・」

アルビレートの母シアンカは、そう言うと台所から食事の用意を運んできていた。

そしてそれから、アルビレートとシアンカ、ヒュールは、今日の夕食をとり始めたのである。

だが、その席で・・・

「ところでヒュールさん、あなた様は、今日アルビレートに会いに来て、なにか用事を済ます為にわざわざこのカーランクルまで足を運んだとか？ それは一体、どんな用事なのですか？ もしよろしければ、食事の途中ですが、それをお聞かせ願いたいのですけれど・・・」

シアンカは、いまスープを美味しそうに飲んでいるヒュールに対して、そう言って話を切り出していた。

「ああ、その事ですか？」

するとヒュールは、自分の横でやはりテーブルの上にとかっとな腰を下ろし、鳥のもも肉に物凄い速さで噛り付いている三人の娘、メルヴィー、ミュルル、マルレリスの姿をみて、嬉しそうな表情をその顔に浮かべてこう言うのであった。

「それはですな、この三人の娘をあなたの息子さんのアルビレート少年に、貰ってもらう為に来たのですよ、この三人をセットとしてね・・・」

「ええっ、この三人の娘さん達をですか!？」

すると、その言葉を聞いたシアンカは、驚いたように目を丸くしていた。

そして「でもヒュールさん、見たところ、その三人の娘さんは天使で生まれが違いますから、ウチのアルビレートのお嫁さんにするのには、ちょっと無理があるのではないですかね？ それに体も小さいし・・・」

シアンカはそう言うと、「困ったわ・・・」というような顔をして、三人の天使とアルビレートを見比べて、戸惑った表情をその顔に浮かべていた。

だからヒュールは『この少年の母親は、バカなのか?』と、そんな顔をして、スープを飲む手を休めていた。

そして「あのですなシアンカさん、実を言うとあなたは何か勘違いをしているらしいのですが、ワシはこの三人の娘を、アルビレート少年の守護天使として息子さんにそれを譲ろうというのが、その本来の目的の本心なのですよ。だからワシは、決してこの娘たちをアルビレート君のお嫁さんにする為にここへ来たのではないのですから、その点を間違えないでいてもらいたいのですじゃ。ワシは一応、巡遣使をしている者ですから、それをあらかじめ承知していてもらいたいのですよ・・・」

ヒュールはそう言うと、自分の左手の指にはめられた三つの指輪を、シアンカに指し示して見せていた。

「巡遣使ですか!？」

するとシアンカは、また驚いた様な顔をして、その指し示された三つの指輪を見つめていた。

一つは赤い指輪である。

その指輪は、ヒュールの左手の薬指にはめられた指輪で、何か金属なのかそれとも石なのか判らない光沢を放っているのである。

そして、その指輪には、見たこともない複雑な紋様が刻まれていた。

それから中指、そこにはやはり複雑な紋様が刻まれた、水色の指輪が光っていた。

その指輪は、繊細な指輪で、赤い指輪もそうなのだが、この水色の指輪には中央に大きな見たこともない玉石のような宝石が輝いていた。

そして、最後は人差し指である。

この指にも、やはり指輪がはめられて輝いているのだが、見たところ、この指輪だけ二色の色が交ざり合った色をしていた。

つまり、黒と白のマーブル模様なのである。

そして、その指輪には、金色の複雑な紋様が描かれていた。

だからシアンカは、その指輪を見てヒュールの身分を察すると、「そうですか、貴方はそれでは、リングロード・マスターなのですね!？」と、そう言って納得を示していたのである。

するとヒュールは、

「そうですのじゃ、私はリングロード・マスターなのです!!」

そう言うと、一応、胸を張って、その身分をあからさまに誇示するのであった。

そして、こんな話をし始めるのである。

「実はですなシアンカさん、ワシのことは見ればもうお分かりであろうと思うのじゃが、ワシは既に六十をこえた老人なのデスじゃ。だから正直言うと、もう巡遣使の職を引退しなければならない歳なのですよ。貴女は知らないと思うかもしれないのじゃが、巡遣使派遣協会のネグリドル・ファビスとカルディリス・メン・ヒュール国の定めた規約では、巡遣使は齢六十過ぎになるとその職を引退し、巡遣使の職を辞してその後継者になる人物に自分のリングロードを譲らなければならないのです。つまり指輪の守護天使を次なるリングロードの能力を持つ人間に継承しなければならないのですじゃ、要するに弟子となる人間にね。

ネグリドル・ファビス協会ではですな、永らくリングロード・マスターとして巡遣使の働きをしてきたリング使いに、自分の後継者になる弟子を設けることを推奨していて、その弟子に自分の所持するリングの能力を全面的に譲り渡すことで、新たな若いリングロード・マスターを養成しようとしているのですよ。だから我々、巡遣使は、引退が間近になると、自分の守護天使の力で神託を請い、その託宣で指し示された人物に自分の全てのリングを譲り渡さなければならない、それが引退するための条件なのですじゃ。だからワシもその規約に準じて神託を請い、自分の後継者となる人物を五年前から探していたのですが、それがようやくこの前、百一度目の神託で貴女の息子さんのアルビレート君に指輪を継承しなければならないという事が判ったのですじゃ。それで今日このカーランクルの街に、足を運んで来たという訳なのですよ。だから私としては、アルビ

レート君にこの指輪を全て譲って、私の弟子にしたいのですじゃ。お解り頂けたでしょうか？」

ヒュールは、そう言うと、ニコリとシアンカに笑いかけていた。

そして、未だにベソをかいてしょぼくれているアルビレートの顔を、窺い覗き見るのである。

すると、

「なる程、そうなのですか!？」

シアンカは、多少、怪訝な表情をしていたが、そのヒュールの言葉に納得を示していた。

そして、

「アルビレート、もう泣くのは止めなさい。このヒュールという方が、あなたを弟子にしてそのリングを譲ってくれると言っているのだから、もう下級の守護天使しか召喚できず他の生徒達に馬鹿にされ笑われることは無くなるのだから、元気を出してヒュールさんの話を聞いてあげなさい。そうしないと、この方に失礼ですよ、まったくあなたは泣き虫なのだから」

シアンカは、そう言って涙ぐむアルビレートを慰めて、優しく肩を抱いてあげていた。

すると、

「それじゃ、ヒュールお爺さんは、僕の事を強いリング使いにしてくれるの!？」

アルビレートは、母親のシアンカに慰められつつ涙を拭くと、ヒュールに顔を向けて疑問げにそう問いただして聞いていた。

そして、真顔になって、目をパチパチとしばたたかせるのである。

だからヒュールは、「アルビレート君よ、君が私の弟子になって、リングロード・マスターの継承の儀式を受けたいというのなら、ワシは喜んで君にこの三つの指輪を譲ってあげても良いのだよ。そしてこの指輪の力を引き継いでくれればね・・・」

彼はそう言うと、アルビレートに対して、にっこりと親しく笑いかけていた。

そして「君にその気があれば、さっそく明日からでも継承の儀式と、リングロード使いとしての技能訓練の実践法を教えてあげよう。ワシはどうせその心算で、君に会いにここへ来たのだからね」

そう言って、また今度は、自分の指輪をアルビレートに見せてあげていた。

そう、三つに輝く、そのリングロード・マスターの指輪をだ・・・

第二節

次の日、アルビレートは昨日会ったばかりのヒュールから、さっそくリングロードの継承の儀式を受けるため、学校を休んで自分のあばら屋の庭で準備を整える事になっていた。

リングロードの継承の儀式、それは特殊なものなのだ。

普通、リングロード・マスターを目指す者が、自分の守護天使を初めて得る為には、人によるが、格式の高い街の神殿にいて七日間の断食と精神集中の儀式をしてから、自らの信仰する天神に守護天使を授けてもらうように神徳を乞い祈念するのである。

そして、それで守護天使が得られれば、その儀式を行った者の手には指輪が顕現し、リングロードの力が自ずと身につくのである。

だが、リングロードの継承の儀式となると、これはもう既にリングの所有者が決まった者から、改めて別の人間にその守護天使を譲渡する事になるから、その所有者を変更する為には、様々な手続きが必要となるのである。

その一つが、リングを譲渡され継承を受ける側の人間の、その内奥に秘められた属性を調べる事なのである。

これは、リングロードとは無縁のごく一般の者には、よく知られていない事なのだが、人間には、その精神つまり魂の在り方が、人それぞれ独自の秘密な`系統、の属性を持っているのである。つまり、その人間それぞれの魂を支えている根源的なパルス、すなわち`神動律、が異なっている事を意味しているのだ。

《神動律》とは、リングロード用語では`密動の規範、と名付けられているのだが、この密動の規範の違いは、人間それぞれの魂の分化、または配合の違いによって生じてくるものなのである。

だから、この神動律が異なっていると、人間は、それぞれの違った行動規範を持つようになり、その様々な個性をその性格上で顕すのだが、これは人それぞれによって非常に似通っている部分もあるのだが、または大きく異なっている場合もあるのである。

その為、まずリングロードの継承を行うには、この神動律の属性を譲渡者が見極めて、確かめて見なければならぬのである。

要するに、リングを譲渡する側の人間が、リングを譲渡される側の人間を、その渡すリングに見合うだけの属性を備えているのか、調べなければならぬのだ。

だからアルビレートは、それを行う為に、今あばら屋の外の庭で水を浴びて沐浴を済ませると、その後、一時間の精神統一の後、裸のまま師匠となるヒュールの目の前で検査を受ける事になるのである。

「あの～、ところでヒュールさん、これって本当に継承の儀式に必要なのでしょうか？ 僕はいま、裸で家の外に立たされていますけど、これってただ僕を晒し者になっているだけじゃないのですよね？ 僕こんな格好でいるのがすごく恥ずかしいんですけど、何か理由があるんですよね・・・？」

時間は十時、太陽が南南東の空にさしかかる頃、アルビレートは一糸まともぬ裸のまま一人の老人と、二人の美しい天使にその身体を見つめられていた。

そのアルビレートの恥ずかしい格好を目を凝らして見つめているのは、もちろんヒュールと、そしてその他ミュルルにマルレリスであった。

彼等は、素裸にされて恥ずかしそうに戸惑っているアルビレートの身体を見ながら、真剣な目をして神経を集中していた。

そう、この三人は、今、心眼を開いてアルビレートの奥深く内面に発動している、神動律を探していたのである。

「ええいっ、アルビレートよ、恥ずかしいのは判るが、今はとやかく言うのはやめるのじゃ。今ワシ等は、心眼を開いてお前さんの属性を調べているのじゃから、その精神集中の邪魔をすると気が散って神動律のありかが調べられん。だから、ちっとは我慢して大人しくしておれ。まだ皮かぶりなのじゃから、それほど恥ずかしくはないじゃろ。こちとらだって好きで見たくて見ている訳ではないのだからな・・・」

今そう言って焦れたのは、白髪の老人ヒュールである。

彼は、その顔に似合わず真剣な顔をすると、イライラしながら頭を搔いていた。

「どうじゃミュルル、お前にはアルビレートの属性が見えたか？　ワシにはまったく見えんのじゃが、ワシの目には映らんのかの？　どうも不可解じゃ、普通なら見えるのに・・・」

そして彼は、近くミュルルに問い掛ける。

そうヒュールは、また悩ましげに頭を搔いてイラついていた。

「うん、私には見える。この子は《黄金樹》の属性だわ、それもかなり直系に近い属性よ、私こんな大きな黄金樹、見るの初めて、なかなかこの子いい神動律を持っているわよ。継承するには申し分ないわ」

すると、それに答えてミュルルは、意外と感心したかの様にそう言っていた。

「何、それは本当なのか？　《黄金樹》するとカーティリクスの系統か？　それでは《深海樹》との親戚になるから、それならば契約の書き替えが出来るじゃろ。やっぱり神託でこの少年に指輪を譲渡しろと出たのは確かな事であったのか？　これならば文句ないの・・・」

その直後、ヒュールは納得したかの様に、喜んで手を打っていた。

しかし、

ツンツン・・・ツンツンツン

そんなヒュールに同じく、心眼を開いてアルビレートの属性を探していたマルレリスが、無言のままヒュールを指でつついていた。

「な、なんじゃマルレリス、お前にも何か見えたのか？　まさか何か他に問題があるという訳ではないじゃろうな？」

その為ヒュールは、そんなマルレリスに、一応、確認の為そう言っていた。

すると、

フルフルフル

マルレリスは、ヒュールの言葉に首を振ると、彼の耳元に近付いて何やらボソボソと何かを耳打ちしている様子だった。

「な、何と、それは本当なのかマルレリス、このアルビレートにニゲリドの属性もある可能性があるかと？」

だからヒュールは、それに驚いたように目を丸くしていた。

《ニゲリド》、それは、`闘神、を意味する属性で、いまではめっきり見かけなくなった

西方人種の中に稀に見られる属性なのであるが、マルレリスはヒュールに耳打ちすると、確かにその属性の片鱗が垣間見えたというのだった。

だからヒュールとそれにミュルルは、その時、その事実には驚きを示したのである。

なかなか二つの属性を合わせ持つ者は、そうは居ないからなのだ。

「う～む、これはどうしたものかの？　`黄金樹、の他に`闘神（ニゲリド）、の属性があるとは、これが果たして継承に何か支障をきたす事になるか今のワシには良くわからん、どうしたものかの？　なあどう思うメルヴィーよ、お前さんになら何か解るかの？」

その為ヒュールは、この問題を解決しようと、先程からこの三人をよそに少し離れた場所で見つらなそうにぶかぶかと空中に浮遊していた三人目の天使メルヴィーに、そう話題をふると、助けを乞う様に解答を求めていたのであった。

だが、

「大丈夫なんじゃないの、私にはそんな事、聞かれても解らないから、適当にやれば良いのよ。どうせ指輪を継承するだけなんだから・・・」

メルヴィーは、そんなヒュールの問いかけを受けると、何やら少し不機嫌になって、外方を向いてしまっていた。

「やだやだメルヴィーったら、まだこの指輪の継承に反対しているの？　そんな態度をとっていると、天使として失格なんですからね、そのことを解っているの？」

だから、その不機嫌な彼女の態度を見て、その時、妹のミュルルがそう言ってメルヴィーをそれとなく何気に非難していた。

しかし、「ふん、そんなのどうだっていーもの・・・」

メルヴィーは、妹のミュルルの非難を受けても、そ知らぬ顔で、また外方を向くと、空中であぐらをかいて、その後、そのまま横に寝そべってしまっていた。

すると、それを見た三女のマルレリスが、頭をウンウンと頷かせ、姉のメルヴィーに何やら同意しているかの様な仕草を見せていた。

要するに、マルレリスもそれほど今回の継承の儀式には、あまり乗り気ではないということらしい。

だが、マルレリスの場合、メルヴィーほど、この継承の儀式に反対している訳ではなかった。

多分マルレリスにとっては、どちらでも良いのだ。

それを示すかのように、彼女は、メルヴィーが空中に寝そべると、そのまわりを何やら楽しそうに無邪気に飛び回っている。

マルレリスにとっては、この継承の儀式で指輪の主がヒュールからアルビレートに変わろうと、それほど気にならないらしい。

ウォーハンマーで、ヒュールの頭を殴ることしか頭にないマルレリスには、その相手が今後アルビレートに変わろうとも、重要ではないのであった。

マルレリスとは、そんな脳天気な女性（幼稚な？）の天使なのだった。

だが、

「あの～、ヒュール爺さん、僕に何か問題があるのでしょうか？　話を聞いていると、その黒髪の天使さんは、僕のことをあまり気に入っていないみたいなんですけど、大丈夫なのですか？」

メルヴィーやヒュール、それにミュルルの話を裸のまま立たされてじっと聞いていたアルビレートは、その時、何か不安になって、ヒュールにそう問いかけてきていた。

どうやら、メルヴィーのその態度に、アルビレートは自分が嫌われているのかと思っただけ。だが、彼女の態度を見るかぎり、それは意外と当たっているのかも知れなかった・・・

メルヴィーは、それだけ不機嫌な態度で空中に浮かび、横目でアルビレートの事を不満げに見つめていたのである。

すると、
「いやいやアルビレート君よ、メルヴィーはな、いつもこんな調子なんじゃ。だから、あまり気にせんでもいいのじゃよ。それよりも、属性の見極めは一応済んだことだし、今度は次の段階に入ろうかの？　今度は、お前さんの今の守護天使チチルさんを使って、継承の門、を開く準備をするのじゃ。そうしないと、このワシが持つ三つのリングを譲渡する準備が整わないからの、だからお前さんには自分の守護天使を呼び出してもらって、今すぐにの・・・」

ヒュールは属性の確認において、少し疑問の残る部分も気になったが、一応それほど気にする事もないと思い、そう言ってアルビレートに次なる準備を指示していた。

その為アルビレートは、ヒュールに言われるがまま、チチルを呼び出す。

そして、ヒュール爺さんの継承の門を開くという準備に対して、その説明を聞こうと耳を澄ますのであった。

「いいかアルビレート君よ、次なる継承の門を開く儀式というのは、お前さんも巡遣使養成学校に通っている学院生だから、少しは知識があると思うのじゃが、継承の門とはすなわち、契約の門、のことじゃ。リングロードを志す者が神殿で天神に守護天使の降臨を乞うたあと、第一に準備するのがやはりこの契約の門を開くことであるだろう？　だからリングの継承の時も、まずはこの契約の門を今現在の守護天使の力によって開き、お前さんの体内ヒソフス（神動律特定維持要素）に、ワシが持つリング三つの神動律パターンを書き込まなければならんのじゃ。それにお前さんの守護天使チチルさんをワシの守護天使を譲渡したあとも、お前さんの守護天使として継続して使役できるようにするには、ヒソフスにその件もふまえて書き込みし、そしてその後、天神に譲渡の許しを請ねねばならんのじゃ。だから今からその契約の門の書き替えの儀式を行うぞ。お前さんも、一応、自分の守護天使を使って契約の門を開くことは出来るよの？　お前さんは巡遣使養成学校の、一応、生徒なのじゃから・・・」

「うん、それならば、出来ると思います・・・」

すると、そのヒュールの言葉に応じてアルビレートは、少しばかりの自信の程をのぞかせて、そう彼に答えていた。

アルビレートは前に、一度チチルを守護天使として自分のリングを顕現させた後、その儀式をしたことがあるから、要領は解っていたのである。

だからアルビレートは、ヒュールにそう言われると、さっそく契約の門の開錠の儀式に取り掛かるのであった。

アルビレートは、チチルを呼び出した後、呪文を唱えると、まずは自分の眼前に契約の門、開放の魔方陣を形成する事から始めていた。

『リンドブル・オーム、リンドムル・オーブ、神界の狭間にありて閉錠の任をつかさどる神よ、我アルビレートは今そなたに開錠の許しを乞いて、その門の開放を促す。然れば其はその門を解き放ちて、我に契約の門の内情を開示し給え・・・、ランビレル・ヒソフス・・・！』

アルビレートは、開錠の呪文を唱えると、自分の守護天使チチルを使役して、共に開錠の歌と呼ばれる神歌を、チチルと一緒に唄いだしていた。

それは別名「天音玉」といわれる歌で、リングロードが神々に願いを乞うために格式高く唄わなければならないのである。

だからアルビレートとチチルは、普段、両者とも子供っぽいのだが、この時ばかりは気を引き締めて、神歌の奏上に没頭していた。

そしてしばらくすると、チチルがアルビレートに命じられてその眼前に形成した魔方陣が、その神歌を受けると、次第に回転しながら光彩を放ち拡張し始めたのである。

そう、そして、

やがてはその魔方陣は、アルビレートの前面をおおうように成長すると、最後に一際、明るい光彩を放って、回転を停止していたのであった。

「よし、よくやった。お前さん下級の天使しか使役できんのに、こういった形式的な魔法には意外と才能があるようじゃな。それでは契約の門も開いたことだし、ヒソフスの書き替えを行うかの・・・」

するとヒュールは、契約の門、開錠の儀式が済むと、アルビレートを少し誉めて、次なる段階をさっそく踏もうと喜んで見せていた。

ヒュールは、二人の天使ミュルルとマルレリスを呼ぶと、一度アルビレートを覆うように拡張した魔方陣を凝視して、その魔方陣の表面上に現れている複雑な紋様のベクス、すなわち神紋の配合を読み取っていた。

そして、その読み取り作業がおわると、ヒソフスの書き替えの作業に入る。

その為、まずヒュールは、第一に自分の守護天使ミュルルを使って、神紋の排出を行わせる準備をしたのである。

「それではいっぞミュルル、この儀式は、お前たちの仕える主人が代わるのに重要な作業なのだから、しっかりやってくれよ・・・」

そう言うヒュールは、アルビレートに向き直って、何やら印を組んで呪文を唱えだし始めていた。

『メルドロート、メルドロン・・・神界に息づくクレアの神よ、其は神紋をつかさどる神ゆえに、今、我が継承の儀式をもて、このアルビレートの神紋を排出し分解させ給え・・・』

すると・・・

そのヒュールの呪文の詠唱の後、突然ミュルルが半透明化したかと思うと、いきなり魔方陣に現れている神紋をミュルルはその手でひつつかみ、引きずりだし、それを数珠つなぎのように絡めとって、抜き出していた。

そしてミュルルは、それを光り宿るその手で、バラバラに分解するのである。

そう、ミュルルによって引き出された神紋は、空中でピース状になると、その後、分解されたまま浮遊して、その場に漂い始めていた。

「よし、それでは今度はマルレリスだ。マルレリス、お前さんは分解されたこの神紋を再

結合の御業で、属性転換するのじゃ。今ワシが呪文を唱えるから、よろしく頼むぞ、決してしくじらんようにな・・・」

そしてヒュールは、マルレリスにそう命じると、また徐に呪文を唱えだしていた。『メルドロン、オア、アクター・・・クリアの神よ、この神紋をもて再び属性の転位を示し、再構築の御業を我が前に顕し給え・・・』

すると、その呪文と同時に、マルレリスが空中に浮遊する神紋に「フウッ」と息吹を吹き掛けると、そのピース状にばらばらになっていた神紋は、やがて一ヶ所に集いだし、突然、旋回を始めていた。そして螺旋状に次々と連結し始めて、一つの流れを形成していたのである。

そう、そして神紋はその後、螺旋状に列挙すると、次第にスパイラル運動を始め、その中で神紋同士の再結合が開始されていた。

そして、

神紋はやがて収縮すると、終わってみれば二つの並列して渦巻く二重螺旋構造になっていた。

そして、それを見てヒュールは、

「よし、これで神紋を再構築する事ができた。それでは、この神紋を魔方陣に戻して、ヒソフスの書き替えを行う・・・」

彼はそう言うと、今度は長々しい呪文の詠唱をはじめ、その呪文の音律に乗せて、排出された神紋の渦を魔方陣に還元して見せていた。

『マクニクス・エンデラ！！』

そして、その神紋をアルビレートの呪文で形成した契約の門、開放の魔方陣に戻すと、最後に一言、終結の呪言を叫んで、ヒソフスの書き替えを終えていた。

「よしアルビレート君よ、これでヒソフスはもう更新されて、ワシの持つ三つのリングの受け渡し準備が整ったぞ。だからこの後は、祭壇を設けて、天神に譲渡の許しを請い、第一の継承の儀式を終わらせるのじゃ。じゃからもう服を着ても良いぞ・・・」

そしてヒュールは、アルビレートにそう言うと、呪文の詠唱で疲れたように額の汗を拭っていた。そしてまたその後、息をハーと吐くと、何か精神的な疲れを取るように、彼は大きな深呼吸をその場でして見せていたのである。

*

アルビレートの継承の門を開き、その継承に必要なヒソフスの書き替えが終わると、アルビレートとヒュールたちは、さっそく天神にリング継承の許しを請うために、あばら屋の外の庭に祭壇を設け、神言奏上の儀式に入っていた。

この神言奏上の儀式は、リングの所有者を変更する上で、避けては通れない重要なものであるから、ヒュールとアルビレートは祭壇の前に、二人、向かい合った形で真剣な顔をしていた。

たとえ継承の門を開き、ヒソフスの書き替えを行っても、この段取りを失敗しては意味をなさない。

だからまずヒュールは、アルビレートに対して、決して神言奏上の際に雑念をわき起

こしてはならないと念を押していた。

そして祭壇に向かって、神言奏上を開始するのである。

ヒュールとアルビレートは、祭壇に向き直ると、その祭壇に二人とも自分が所有しているリングを置いて跪いていた。

そして神言奏上の前に、二度その祭壇に頭を下げて拝礼すると、徐に神言を唱え始めていた。

((η・κ・μξ・φ・φ・κ・τσ・θ・σζ・μ・ρ・β・ε・・・・
 μν・π・χατ・κξ・ρ・ζ・ιη・・・・
 υ・ζ・υ・γ・θ・π・φφ・η・δ・ρ・λ・σ・φ・ι・ξσνθ・ΠΧΩ・
 ・・・ θ・λ・E・))

神言奏上が始まると、アルビレートとヒュールは、目を閉じて心の中で天神に対してリングの継承をすみやかに許してもらうように、厳粛な思いで祈念する。

だから、この儀式は、長時間にわたる精神集中の忍耐力が必要だった。

そしてその光景をミュルルとマルレリス、そしてアルビレートの守護天使チチルは、固唾を飲む様にして空中から傍観するかの様に見守っていた。

そして、かれこれ一時間、神言奏上の儀式がとどこおりなく行われると、アルビレートとヒュールの跪く祭壇の周辺には、空間が歪んだ磁場のようなものが形成され始めるのである。

それは蜃気楼が沸き起こって、空気の幕がゆらめくような磁場なのだが、その兆候が現れ始めると、突然、祭壇に置いたはずの四つのリング（三つはヒュールのロードリング、そして一つはアルビレートのロードリング）が、びりびりと振動をし始め、次第にまばゆい光で輝きだし始めるのである。

そして、アルビレートとヒュールの神言奏上がつづく中、やがては、その四つのリングが祭壇から突然、何か見えざる力の影響を受けて中空へ浮遊し始めると、突然、そのリングはパッと消失して、直後、その四つの指輪は祭壇の前に拝礼しているアルビレートの左指に転移するのである。

「あっ、ヒュール爺、指輪がアルビレートの左指に転移したわよ。これで天神の指輪譲渡の許しが得られたわね。もう神言奏上を終えても大丈夫よ・・・」

だから、その光景を見ていたヒュールの守護天使だったミュルルは、そう言うと、まだ神言を唱えている老人に対して、儀式の完了を知らせていた。

ミュルルはそう言うと、妹のマルレリスと共に祭壇に跪く二人の頭の上を旋回し始めた。

「何、そうか？ それならもう大丈夫じゃの。これで継承の儀式の第一段階は完了じゃ。だからここで一休みでもするかの、神言奏上で疲れたからな・・・」

すると、その言葉を聞き、ヒュールは神言を唱えるのをやめ「アルビレートよもう良いぞ、これで君には、一応、指輪が引き継がれた、だから奏上をやめるのじゃ・・・」

ヒュールはそう言って、アルビレートを祭壇の前から立たせていた。

アルビレートは立ち上がると、その後、自分の指に転移した四つの指輪を凝視して、不思議そうに眺め回していた。

そして「ヒュールさん、これで僕、新しいリングの所有者になれたんだね!？」

アルビレートは、左指にはめられた四つの指輪を大事そうにさすると、喜びを表してその顔に柔やかな笑顔をのぞかせていた。

「そうじゃ、これでお前さんは、ワシの弟子になったのじゃよ・・・」

だからヒュールは、その顔を見て、同意を示すようにそう言っていた。

だが・・・

そんな光景を見て、その場所より少し離れた場所で、つまらなそうに空中へ浮遊していたメルヴィーだけは、その事実になんか納得できないような顔を浮かべて不貞腐れていた。

メルヴィーは、本心では、とても不機嫌であったのは確かなのである。

しかし、リングロードの指輪の譲渡は、完了していた。

何の滞りも無く、速やかにだった・・・

第三節

指輪の譲渡の儀式が終わって午後、アルビレートとヒュールは、シアンカの作った昼食を食べると、さっそく調整と呼ばれる訓練を始める事になっていた。

調整とは、指輪を譲渡された側の人間が、その新しい指輪を自分の指輪として使いこなせるように、リングロードの師匠であるヒュールに、教えを乞うのである。

それに、アルビレートは、まだまだリングロードとしては未熟な術者であるため、ミュルルやマルレリス、そしてメルヴィーの守護天使の力を使役できるように、訓練をしなければならぬのであった。

だから、いま、アルビレートは、その指導を受けるべくあばら屋の庭に立つと、ヒュールを前にして緊張した面持ちを呈していた。

「それではアルビレートよ、さっそく今から調整の訓練に入ろうではないか、準備はいいかな、始めるぞ・・・」

「はい、ヒュールさん、僕なら大丈夫です。強くなる為に、ビシバシ指導して下さい！！」

そしてアルビレートは、元気良くヒュールに返事をする、教えてもらう側の礼儀として、一度、深々と頭を下げてお辞儀をしていた。

「うむ、それでは始めよう」

その為ヒュールは、そんなアルビレートに微笑むと、まず自分の左手を眼前に突き出すように命じていた。

「それではなアルビレートよ、ワシがお前さんに自分のリングを譲渡したからには、お前さんは、第一に、この三人の娘の守護天使を召喚して、自由に呼び出しが出来る様にし

なければならない。だから、まずは一度この三人を指輪に戻して、再び召喚することから始めてみようではないか？ それ位できるよの、お前さんも一応リングロードの卵なのだから・・・」

ヒュールはそう言うと、アルビレートに、ミュルル、マルレリス、メルヴィーを、一度、指輪に帰還させる呪文を唱えるように命じていた。

だからアルビレートは、それに応じてハイと頷くと、左手を突き出して徐に帰還の呪文を唱え始めた。

『・・・僕の守護天使、ミュルル、マルレリス、メルヴィーよ、君たちは一度、指輪に還り再び呼び出しがあるまで、その身を隠り身にしてね、お願いだよ！』

バゴンッ！！

「痛てッ！」

だが・・・

だがアルビレートが、そんな呪文を唱えて天使たちの帰還を促すと、その呪文の詠唱をする様をアルビレートの頭上で聞いていた三人の天使のなかの、一人、マルレリスが、怒ったような顔をして、その手にいつのまにか召喚したハンマーで彼の後頭部を強打していた。

「うッ、何するんですかマルレリスさん、どうして僕の頭を殴るの？」

そうだからアルビレートは、そんなマルレリスの行為を見て驚いた顔をする。

そして殴られた頭を、さぞ痛そうに擦るのだった。

すると、

「バカ者、アルビレートよ、そんな帰還の呪文で、この三人の天使が自分の指輪にすんなり還る訳がないじゃろ！ そんな子供じみた呪文では、わしの守護天使だったこの三人を自由に使役することはできんのじゃ！ だからもっと高度な使役の呪文を唱えろ、でないとまたマルレリスが怒るぞ・・・！！」

そう、アルビレートの幼稚な呪文を耳にしたヒュールは、そう言うと腕を組んで怒った様に怒鳴り散らしていた。

「高度な呪文？」

だからアルビレートは、疑問げな顔をする。「どうして高度でないと、駄目なのですか？」と、ヒュールに訳が解らずそう問いただしていた。

するとヒュールは「あのなアルビレートよ、この三人の娘はお前さんの守護天使チチルと違って、下級ではなくもっと格の高い守護天使なんじゃ。だからお前さんが、いま唱えたような幼稚な帰還の呪文を聞くと、こいつ等は自分たちが馬鹿にされたと感じて臍を曲げたように言うことを聞けんのじゃ。だからお前さんは、もっと高度な帰還の呪文を唱えてミュルルやマルレリス、それにメルヴィーを使役する必要がある。だから今の様な幼稚な子供じみた呪文じゃ、高位の守護天使は感応しないのじゃからな、その事をよく覚えておくのじゃ・・・」

ヒュールはそう言うと、アルビレートに教訓を諭すような口調で注意を促し、最初の教示をそこで弁舌して見せていた。

ヒュールはそして厳しい教師の様な顔をする、幼稚なアルビレートの呪文にケチをつけて、小難しそうな顔の表情をして見せていたのである。

すると、
「そうよアルビレートちゃん、ヒュール爺の言うとおりに、私達が納得する呪文を唱えないと、あなたの呪文に感応しないから、その心算でいてね。私たちは高位の守護天使なのだから、決して侮らないでよ・・・」

その言葉を聞いたミュルルは、アルビレートをバカにする様に舌を出して笑っていた。
つまり、アルビレートは、舐められているのである。

まるで何も知らない、幼稚な赤子の様に見られているかの様にだった・・・
「解ったよ、それじゃ高度な呪文を唱えれば良いんだね？」

だからアルビレートは、ミュルルのその言葉を聞くと、今度は慎重に格調高い言葉を選んで、また左手を突き出し、帰還の呪文を唱える準備を整えていた。

そして、
『わが守護天使、ミュルル、マルレリス、メルヴィーよ！ その身を隠り身にし、我がリングに帰結して、その帰還の居を定めよ！』

アルビレートは、徐に帰還の呪文を唱えると、居丈高げにそう命じて、三人の自分の守護天使に対して指輪に、一度、帰還する旨の意の言葉を率直にそう叫んでいた。

すると直後、その呪文を耳にしたマルレリスとミュルルは、突然その身を光り輝かせるように半透明化すると、その姿を霞のごとく霧散させて指輪に吸い込まれるように飛び込んで一瞬の内に姿を消して指輪の中に霊体として還元し、その身を隠り身にしていたのである。

そして、リングロードの守護天使らしく、素直に自分の指輪に帰還していったのであった。

そう、アルビレートの帰還の呪文は、成功したのだ。

それなりに、高度な呪文を唱える事が、ようやく要領よく理解できたからであった。

だが、
「あれ？」

だが、アルビレートは守護天使の帰還の呪文に成功したと思ったが、その時、自分の目の前に、まだつまらなそうな顔をして浮遊している一人の天使を見て首を傾げていた。

そう、アルビレートの目の前には、メルヴィーだけが指輪に帰還せず、ぶかぶかと空中に浮いて浮遊していたのである。

だからそれを見て、
「あれメルヴィーさん、どうしてあなただけは指輪に還らないの？」

アルビレートは、そんな彼女を見て戸惑った顔をしながら、メルヴィーにそう聞いて問いただして見せていた。

だが、
「何か文句あるの?!」

メルヴィーは、そんなアルビレートの問い掛けに目付きを尖らせ凄むと、その直後、外方を向いて、不機嫌な顔をあからさまに示すのであった。

そして彼女はその後、空中に寝そべると、頭に立て肘を突いて鼻クソをほじりだしてしまう始末だったのだ。

「・・・・・・・・」

だからアルビレートは、その態度に絶句して、困った様にヒュールの顔を見て助けを求めた。

「・・・・・・・・・・」

だがヒュールも実はそれに困って、罰の悪そうに頭をポリポリと頼りなさそうに掻くのである。そうヒュールにはどうする事も出来なかった、喩えアルビレートに助けの視線を向けられても、今はもう自分はリングロードの指輪を所持せず、そのメルヴィーを使役する事は出来なかったからである。だから、それは仕方が無いのだ、メルヴィーは天使は天使でも希に見る、自由、気ままな性質を持つ、欠落天使だったからである。

だからそのメルヴィーの態度を、今は容認するしか無い。

ヒュールはそうアルビレートに解らせると、メルヴィーのどうしようもない悪タレた態度に、寛容の心を持つようにと、彼にアドバイスをして見せていた。

ヒュールは、メルヴィーの事が意外と好きだったのだ、それが喩え行儀の知らぬ欠落天使のわがままな娘の様な彼女であったとしてもだった。

*

だがその後、アルビレートのリングロードとしての調整の訓練は、まだまだ続いていた。

アルビレートは、ミュルルとマルレリスを指輪に帰還させてから、その後、再びその二人を召喚する呪文に成功すると、今度はヒュールに教えられて魔方陣を形成する訓練を命じられていた。リング使いがリングロードの力を使う場合、魔方陣を形成してその呪力を発揮しなければ、余程の高度な魔法は使用できないのだ。

だから、その訓練は重要で、とても必須的なものなのである。

その為アルビレートは、まずミュルルを呼び寄せると、自分の足元に魔方陣を形成しようとして、呪文を唱えだしていた。

『わが守護天使ミュルルよ、・・・・・・・・？』

だが、

だがそこでアルビレートは、ふと、その呪文の詠唱をつまらせていた。

「どうしたのじゃアルビレート、早く魔方陣形成の呪文を唱えぬか、魔方陣形成の呪文は、それほど難しい呪文の詠唱ではないじゃろ・・・」

だからヒュールは、そんなアルビレートを急かして、そう言ってそれぞれと催促をしていた。

ヒュールは、アルビレートに当たり前の様にそう言うと、早く呪文の詠唱をする様に命じて指示して見せていた。

だが・・・

しかし、アルビレートは、疑問げな顔をしてヒュールを見る。

アルビレートは、何か困ったのだ、ヒュールに魔方陣形成の呪文を詠唱する様に命じられて。

「あのヒュールさん、そう言えば僕はまだミュルルさんやマルレリスさん、それにメルヴィーさんの使役印を聞いていなかったのですが、一体この三人は、どんな使役印を

持っているのですか、それを聞かないと呪文の詠唱を唱えられないですよ・・・」

そう、アルビレートは、次にそう言うと、ヒュールにそんな事を聞いていた。

そして彼は、首を傾げて、疑問げに目を丸くしていた。

「おお、そうかそうか、そうじゃった。確かに、この三人の使役印が何なのかを説明しないと、呪文の詠唱はできぬか？　確かにこれは済まなかったな、それではこの際、三人の使役印をどう指定するか、呪文の詠唱時には必要不可欠だから、いま説明してあげようかの・・・」

するとアルビレートがそう言って首を傾げると、ヒュールは済まなそうに謝り、徐にアルビレートに対して説明を始めていた。

ヒュールは、アルビレートに対して真面目な顔を見せると、次にこう言って少し解説じみた説明をして見せていたのである。

「あんなアルビレートよ、お前さんは解っていると思うが、普通、守護天使にはその天使が得意とする魔法の属性を持っていて、その使役印で天使の力を引き出して魔法を扱うことが出来るようになっている。雷撃なら`雷印`、火炎であれば`火印`、であるとか・・・

だがの、ここで注意しておかなければならないのは、高度な格の高い天使を守護天使にすると、使役印もその天使の力が高度なだけあり、一人で無数の属性を扱えるようになっておるのじゃ。だからの、その問題を解決するために、本来、使役印を示して呪文を詠唱する時は`括印`の当て言葉を冠して、総括的に属性を指定する事になる。

だからの、もしミュルルに魔方陣を形成させるときは、例えば『わが守護天使ミュルルよ、その`括印`の御徳をもて、我が身下敷きに法陣の居を定めよ・・・』等と言って、使役印のところを`括印`と要約するだけでそれで良いのじゃ。だからまずはワシの例えた呪文で、ミュルルに魔方陣を形成させてみよ、それならばきっと上手く行くはずだからの、その事をよく注意するのじゃぞ・・・」

そして、

そしてヒュールは、アルビレートにそう言うと、再び呪文の詠唱をするように促して命じていた。ヒュールはアルビレートの師匠らしく、簡潔な説明を述べると、アルビレートのまだ知らない呪文の詠唱の仕方を示して、丁寧に教えてあげていたのであった。

すると、

「あ、解ったよヒュールさん、括印と総称すれば良いんだね。それなら簡単だよ、じゃさっそく試してみるね。何とかそれなら未熟な僕でも、たぶん出来そうな気がするから・・・」

するとアルビレートは、その助言を受けて、再び呪文を唱えだそうとしていた。

アルビレートは、ヒュールの助言を受けてその意味を理解すると、それなりに自信を持って呪文の詠唱を口ずさんで見たのである。

『わが守護天使ミュルルよ、その括印の御徳をもて、我が身下敷きに法陣の居を定めよ！』

すると・・・

するとその直後、ミュルルはその呪文に感じると、アルビレートの足元に複雑な紋様を配した、直径八メートル程度の魔方陣を形成していた。

ミュルルは、アルビレートの使役に応じて確かに魔方陣の形成を、アルビレートの目の前に実現し際現して見せてやっていたのであった。

「やった、やった出来たよヒュールさん、魔方陣を作ることが出来た。これで僕も一応、使役能力を身につけたという事だね。でもすごいや、この魔方陣、レリルが使役するエンレースの魔方陣より大きいよ、やっぱりミュルルさんは高位の守護天使なんだね。僕こんな大きな魔方陣を形成したのは初めての事だよ・・・」

だからアルビレートは、その足元に形成された魔方陣を見て喜ぶと、ヒュールの顔を見てエヘへと、恥ずかしげにはにかんで見せる様に笑っていた。

しかし、

「バカ者アルビレート、ミュルルは天使は天使でも紫天界に割拠する神々の直系的配属下に位置する天使なのだから、お前さんの使役能力がもっと高度で強力ならば、普通、五十メートル位のもう少し大きな魔方陣は簡単に形成できるのじゃ。だから、こんなちっぽけな魔方陣を形成できたぐらいで、喜ぶのではない。お前はまだ未熟の未熟なのじゃ、まだまだ練達したリングロード・マスターには及びもつかん術者なのじゃよ。だから喜ぶのはまだ早い、今のままのお前さんの実力では、まだ喜び勇むには、経験値的地力が足らんじゃよ・・・」

「ええっ！ 五十メートル!？」

だからヒュールは、そんなアルビレートを窘めると、厳しい態度を示してみせていた。

彼ヒュールは、そう言うと、アルビレートを叱咤し軽率に喜ぶなどそう言っていた。

ホントに軽々しく喜ぶと、その後、成功する度に凶に乗って、自分の力を過信してしまう場合もある。だからヒュールは、その点ではいやに厳しかった。今のアルビレートの実力を目の当たりにして見てみると、それが正解に近かったからだ。

だからアルビレートは、そのヒュールの言葉を聞くと、少し恥じ大いに驚いて、隣に浮遊していたミュルルの顔を見た。

するとミュルルは、「エヘン、すごいでしょ!？ 私の実力があなたには解る?」と、その豊満な胸を揺らしながら、自慢げに胸を張ってみせるのだった。

そうミュルルは、自分の能力の高さを彼に知らしめて、その態度に示してあげていたのである。まるで今のアルビレートでは、まだ予想もつかぬ様な見知らぬ高度な力を、彼女が潜在的に、それを自分の身の奥深くに保持して、隠し秘めていると云うことをだ。

だからアルビレートは、少しヘコんでいた。

アルビレートは、自分のまだ知らぬ未熟な部分を、確実に嫌が上でも知ることを余儀なく強いられていたからである。

そのヒュールの言葉と、自分の守護天使ミュルルの自信ありげな態度を見せられ、嫌み無く堂々と自慢されるのを目の当たりにして、教示され教え諭しを受けたからでもあった。

*

だが、その後もアルビレートはさらにヒュールの指導を受け、マルレリスや元々の自分の守護天使だったチチルにも調整の訓練を施そうとして、次第に自分の使役能力を以前よりも高度に発揮できるように、術の洗練化に励むことを目指した。

アルビレートは、魔方陣形成の訓練を終えると、今度はミュルル、マルレリス、そし

てチチルを使役し、リングロードとしての実戦法を学ぶために、実際にその三人の攻撃魔法、及び防御系の魔法を試してみる訓練の場面に移行しようとしていた。

まずアルビレートは、先ほど形成したミュルルの魔方陣で、彼女に初歩的な防御陣形成の使役を命じてみようとする。

防御陣形成は、リングロード・マスターが敵と戦う時、自分自身の身を守る為に必要な護身術なのだ。だから、この訓練を習得しておかなければ、リング使いとして失格なのだと言われてもしょうがない、当たり前前の使役魔術技法でもあるのである。

その為アルビレートは、ヒュールに指導を受け、防御陣形成の魔法訓練を開始することになるのであった。

「いいかアルビレートよ、防御系の魔法はリングロードが法陣合わせやホムンクルスなどの化け物と戦うときに、第一にしなければならない身を護る術だ。基本的に、リング使いは、守護天使の使役魔法を使って敵と戦う以上、戦士ではないのだから、当然、呪文詠唱時に隙ができ無防備になってしまうものだ。だから、それを克服する為に、戦う際には防御陣の魔法であらかじめ自分の身を戦う敵から事前にガードしておかなければならない。だから、この訓練は重要なものだから、しっかりやらなければならん。これはとても大事な大事なことだからの」

アルビレートが防御陣魔法の訓練を始めるに当たり、ヒュールは、まず最初にアルビレートの師匠らしく、その使役魔法の重要性を説いて、その後、実際の訓練に入る事にしていった。

ヒュールは、アルビレートにミュルルの防御陣魔法の形成を促す呪文を教えると、さっそくそれを試してみろとって、腕を組んでいたのである。

そして、

『わが守護天使ミュルルよ、その括印の御徳をもて、我が身にガーディアスの防壁を築き給え・・・』

アルビレートは、ヒュールに教えられたままの呪文で、ミュルルにそう魔術発動を命じると、左腕を突き出して、その後、胸の前で結印を組んだ。

すると、

アルビレートの守護天使ミュルルは、それに応じて即座に力を発揮すると、彼の全身を覆うように、半透明の容易に見えざる魔法の障壁を築き上げて見せていた。

「よ～し、アルビレートよ良く出来た。これで防御系魔法の初歩ガーディアスは、まだ未熟なお前さんでも形成することが出来ると判った。だから次は、マルレリスを使って、もう少し高度な障壁を築ける様にしなければならん。マルレリスは、防御陣形成を得意とする天使だから、これからその訓練を行うぞ、いいか？」

だが、それを見たヒュールは、アルビレートを程なく誉めてやると、そう言って今度はマルレリスを見ていた。

マルレリスは、ミュルルより少し格下だったが、格下であっても防御陣魔法に関しては、かなり得意とする魔術属性を持つ天使でもあったからなのであった。

だから・・・

だからそれに頷いて了解を示したマルレリスは、アルビレートのもとに飛んで来ると、そのアルビレートの頭に可愛らしくたかかって、ヒュールの言葉に素直に応じて見せて

いた。

マルレリスは、何かどうでも良いけど、ご機嫌の様子を見せていたのだ。

だから、多分、ようやく自分の得意とする為の出番が回って来たから喜んでいるのかも知れないと、アルビレートは、その時、マルレリスの思いをそう解釈していた。

そう、マルレリスは、特に陽気な顔を見せて、アルビレートに懐いて来ていたからである。

「よし、それではアルビレートよ、まずはマルレリスに『六形印樹』の防壁を築かせる訓練をするのじゃ。『六形印樹』はあらゆる初歩的な攻撃魔法に対抗できる、汎用的な防御陣じゃから、これを習得して身を護るすべを身につけるのじゃ。しかし、呪文は意外にちとほんの少し簡潔じゃぞ、その呪文をいま教えてやるからの、今すぐにな・・・」

だが、マルレリスがアルビレートの頭の上にたかると、その時ヒュールは、アルビレートに新たな呪文を教えて、それをすぐ様、実践するように命じていた。

ヒュールは、アルビレートに少し期待する様な目を向けると、その後、急かす様に呪文の詠唱をする様に指示し命じて見せていた。

だからアルビレートは、一度「よろしく頼むねマルレリスさん」と、頭にたかった彼女に、ことわりの文句を述べると、ヒュールに促されるまま新たな防御陣形成の訓練を開始しようとしていた。

アルビレートは、ヒュールに事細かな指導を受けると、一度ミユルルの形成した魔方陣を破棄して、今度はマルレリスの魔方陣を足元に顕現させて訓練の準備を整えると、即実践に入り、魔術鍛錬の訓練をその次の段階に移行して呪文の詠唱を呟いていた。

『ロードアドバンス、ゴ・ニケル・・・史印に普く防壁の神よ、其はわが守護天使マルレリスの括印に感じて我が瘦身に六形印樹の法陣を築き給え・・・ベクニトル・ラトス・・・』

そう、アルビレートは準備が整うと、さっそくマルレリスを使役して、六形印樹と呼ばれる防御陣魔法を築く呪文を即座に詠唱して見せていた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・？」

だが・・・

だが、そうアルビレートがその時、呪文の詠唱をしても、今回は何も反応は起こらず、防御陣魔法が彼のまわりに形成され、展開される兆しは何も生じなかった。

そうアルビレートは、その防御陣魔法の形成に、辛くも望み叶わず失敗をしていた様なのだ。

その師匠である、リングロード・マスターだった、ヒュールの期待に反してだ。

だからその現実に、アルビレートは「どうして？」と、怪訝な表情を浮かべていた。

彼は、師匠のヒュールの指導があれば、必ず成功すると思っていた節があったからなのでもあった・・・

だが、

「うむ、これは大失敗じゃの、やはり今の段階での未熟なアルビレートでは、六形印樹の防御陣を形成するのは、ちと難しすぎたのかの・・・」

するとヒュールは、それを見て、少し小難しそうに自分の髭をしごいて見せる。

確かにヒュールは、少し今のアルビレートの能力に、期待をし過ぎた様なのである。

ヒュールは、アルビレートに少し光る様な才能がある事はあると思ったが、今はまだまだ未熟なままの彼だと、今はこれで改めて判ったからでもあった。

だからその日のアルビレートの魔術鍛錬は、それを一応、一区切りとして、それでその日はもうその調整の訓練を終える事になっていた。

アルビレートは兎も角、ヒュールは歳だけあり、それでかなり疲労の色を見せていたからだ。

だから、この日の訓練はそれで終わり。

アルビレートとヒュールは、そこで今日の魔術訓練に区切りをつける事になっていた。

そう、もう時期、丁度いつの間にか日も暮れてくる時間帯になっていたからでもあった・・・

第四節

そして、その日の夜、継承の儀式と魔法鍛錬を一通り終え、アルビレートとヒュールはシアンカと共にあばら屋の食卓用のテーブルを囲んでいた。

食卓に並んでいる食事は、昨日と同じ野菜スープと、その他、自家製のナンである。

そして三人分の鳥のもも肉、これはマルレリスとミュルルそしてメルヴィーに用意された、食事用のこんがり焼けた鶏肉だった。

その食事をとりながら、今ヒュールはアルビレートに対して、今日の継承の儀式や魔術鍛錬の感想などを徐に聞いていた。

「ところでアルビレート君よ、今日はどうじゃったかな？ 継承の儀式を受けてそれに初歩的な魔術訓練もした。こうなると、苛められたことも忘れていい精神修養の糧になったじゃろ？ 昨日のように泣いてばかりいては、強くなれんからの・・・」

ヒュールは、アルビレートを好意の目で見て、シアンカのスープを食しながら、その彼にそう言って話しかけてみていた。

「うん、そうですね。僕、今日ヒュールさんから三つのリングを継承されてすごく嬉しかったんですけど、ヒュールさんが僕みたいな未熟のリング使いに、熱心に色々教えてくれることがそれ以上にとっても嬉しかったです。だって僕って嫌われ者だから・・・」

するとアルビレートは、今日の出来事で、ヒュールがアルビレートに熱心に魔術鍛錬の指導をつけてくれた事を喜ぶと、その反面まだアルビレートは自分が学院の嫌われ者である事を悔いて、喜びを言い表しはしたが、少し暗い面持ちも呈していた。

アルビレートは、まだいじめられっ子である自分を克服できない思いを抱いていたのである。

だが、そう食事を一緒にするヒュールに対しては、彼は、感謝の意を多分に言い表していた。

その点に関しては、アルビレートは落ち込んだ顔も見せず、師匠であるヒュールに、多大な御礼の念を表し、そう言った応えをその態度に示して見せていたのである。

「そうか、それじゃそれは良かったの、ワシとしてもたとえ未熟でも一人の弟子が初めて出来て、とても満足なのじゃよ」

だからヒュールは、自分の可愛らしい弟子が出来て、心底、心の奥で満足した思いを抱いていた。ヒュールにとっても、自分に弟子が出来る事は、初めての事なのだ。

だからヒュールは、そんなアルビレートを、大事なものだと思う事が出来ていた。

ヒュールはそして、そのような思いを抱くと、またシアンカの料理した野菜スープに手を出して、それを美味そうに啜り、空腹なその胃に彼女の美味しい絶妙な味のスープを食して腹の中に程よくおさめて堪能して見せていた。

アルビレートとヒュールは、そんな話の内容の会話を繰り返すと、その後、二人してシアンカの作った食卓の料理を平らげて、満足げに程なくその食事の時間を終えていたのである。

だが、

「でもところでヒュールさん、今日はミュルルさんやマルレリスさんを使役して色々訓練をしましたけど、そう言えばどうしてメルヴィーさんを使った訓練だけはさせてくれないんですか？ 僕そのことが少し不満なんですけど、どうしてなの？」

そう、するとアルビレートは、食事を終わると、同じく腹の膨れたヒュールを見て今ふと思った疑問を別の他の場所へ移動した後、それとなく問いただして聞いてみていた。

アルビレートは、ミュルルやマルレリス以外にも、メルヴィーの守護天使としての力の使役を一度、試してみたかったのである。

そのメルヴィーが、どんなに質の悪い悪辣的な態度の酷いとても困った欠落天使であってもだった。そう実を言うと、今日の魔術鍛練は、三人の守護天使をアルビレートが継承されたといっても、メルヴィーという守護天使にだけは最初は兎も角、その後ヒュールはそのメルヴィーには一切何もさせようとはしなかったのだった。

だからアルビレートは、それが疑問の疑問であつたらしい。

アルビレート彼は、そのメルヴィーも自分の大事な守護天使であると大切に認知し、出来れば何とかしっかりと仲良くなりたいとそう思っていたからだ。

だからアルビレートは、師匠であるヒュールに、そう不思議そうに問うていたのである。

そう彼はその時、少し納得できなかつた。

メルヴィーが、本当はどんなアルビレートの守護天使であるのか、彼はまだ彼女の能力を知らぬままの状況でもあったからなのであった。

すると、

「おお、そのことか、それならば別に今は気にせんでいいのじゃ。あのメルヴィーだけは、ちょっと他の天使より扱いが難しいのでな、じゃから今後、お前さんのリングロードとしての腕が向上すれば、おいおいメルヴィーを使った使役魔法を訓練する心算じゃから、そう気を急かさず気長に少し待つておるんじゃ。時間はまだ十分にある、だからそのメ

ルヴィーはおいおい、おいおい使役させるつもりなのじゃよ・・・」

だからヒュールはそう言うと、そのアルビレートにまだまだ時を待てとそう言っていた。

メルヴィーは、今はとにかく機嫌があまりにも良くない状態なのである。

だからその使役は、まだまだ先送りにするしか無かったのである。

そしてそのメルヴィーには、まだアルビレートには話せない、特別なある曰くを大きな問題事として抱えており、彼女だけには早く近々、第二の指輪の継承の儀式を決行させる手続きが必要とされていたのである。

そう近いうちに、成るべく早く時期と準備が程よく整えられればだ・・・

「ふうん、そうなのですか？」

だからすると、そのそんなヒュールの言い分を聞いたアルビレートは、意外と納得したような顔をして、素直に彼の言い分を理解して見せていた。

アルビレートは、それならば別に何も問題ないとそう簡単に信じて、了解をして見せていたからなのである。リングロード・マスターだったヒュールがそう言うのだから、間違いはないと彼はそう解釈し、聞き分けの良い態度をその後、示していたのであった。

だからヒュールは（おお、なんとか話を逸らす事が出来た、アブない、アブない）と、心の中で思い、アルビレートの横顔を見ながら、そこでほっと胸を撫で下ろしていた。

ヒュールには、メルヴィーの事に関しては、今はまだ隠しておかなければならない秘密を、だれにも言わず黙って公にしない様に心がけていた節が垣間見えていたのである。

だが、

「ところでお前さんは、ワシの弟子になって、まずいじめっ子たちを見返してやる心算なのじゃろ、話によると散々イジメられてきたという事じゃからの。だから多分そうなのじゃろ、お前さんは、本当は学院の劣等生ではない筈なのじゃからな・・・」

するとヒュールは、今度は一転、話を変えて、アルビレートにそう話題をふると、「どうなのじゃ？」と、やさしい表情を見せてそう聞いていた。

ヒュールは、アルビレートが学院の生徒達に馬鹿にされているという事を、そのアルビレートの母のシアンカから聞いて知っていた。

だから多分、アルビレートは、そんな思いを抱いているのではないかと勘でそれを察した。

その為ヒュールは、アルビレートにそう言うと、そのアルビレートの今まで我慢してきた屈辱的な思いを、痛いほど理解して、その彼のその思いに同調していた。

ヒュールも実は子供の頃、いじめっ子に馬鹿にされていた記憶があったからなのである。

だからヒュールは、アルビレートにそう聞いていた。

彼の心が、痛いほどヒュールには解る気がしていたからだ。

すると、

「ウンそう、僕はヒュールさんに指輪を継承してもらったし、それに魔術鍛練の指導までしてもらえるようになったから、それで強くなって、必ず僕をバカにしていたみんなを見返してやるんだ。だからまずは、このまま訓練を続けて、一度、六日後に行われる学院の法陣合わせの実習訓練で、新しく継承したミュルルさん達の力を試してみようと思

うんだ。だからヒュールさん、明日からも僕に色々とリングロードの実践方法を指導して下さいね。僕、真剣に弟子として一生懸命、勉強して学から・・・」

だがすると、そのアルビレートはそう言って、昨日の泣き顔とは裏腹に嬉しそうな笑顔を見せて、少し自信の程を見せていた。

彼アルビレートは、本気で悔しい思いをしてきたのである。

学院のみんなに苛められて、悲しい思いに嘔まれて、

だが、その都度あの優等生のレリルが、アルビレートを何かと良くして助けてくれた事には、感謝していたのである。

そうアルビレートは、何度もレリルに助けられた事があるのであった。

その彼女は、アルビレートとはまた違った、ある意味か弱そうな華奢な容姿の少女の身であったのではあるのだが・・・

「そうか、それじゃワシも一生懸命にお前さんを指導してやらなければならないな。何せお前さんは、ワシの可愛い可愛い愛弟子なのだからな・・・」

その為ヒュールは、そんなアルビレートを見据えてそう言うと、そのアルビレートの頭に手を置いて、父親のように微笑んで見せていた。

ヒュールは、アルビレートを、自分の子供の様に感じたのだ。

だからヒュールは、アルビレートの思いを、安易に否定したりする事は無かった。

学院では、思う存分ぶつかって、喧嘩をすれば良い。

子供の頃のもめ事は、本気で言い合い、何の恨みもなく幼稚な喧嘩をすれば良いと思う。だからヒュールはそう思うと、今のアルビレートを真面目な目で見た。

彼はアルビレートに、今後の今後を期待して導いてやる事を、真剣な思いで考えていたのである。ある時期までは、色々な事を教え諭してやろうとしてた。

だから今後、後々のアルビレートの成長を今の状況から鑑みて、徐々に徐々に成長させてやる心算でいた。アルビレートが本当に独り立ちして、リングロードの道を何の苦も無く歩んでいけるようにする為に、ヒュールにもそのアルビレートの師匠として、それなりの責任と義務が確実にあったからであった。

そう、自分の弟子であるアルビレートが、無事そのリングロードの道を雄壮と進んで行けるようにする為でもあったからだ・・・

*

そして次の日、アルビレートとヒュールは、昨日に引き続きまた訓練を始めていた。

この日、最初に行った訓練は、マルレリスを使った六形印樹の防御陣の形成法だった。

アルビレートは昨日、この防御陣を、結局、完成できずに失敗したままだったのだ。

だから今日は、それを成功させる為、今マルレリスを使役して呪文を唱えていた。

『ロードアドバンス、ゴ・ニケル・・・史印に普く防壁の神よ、其はわが守護天使マルレリスの括印に感じて我が瘦身に六形印樹の法陣を築き給え・・・ベクニトル・ラトス・・・』

だが、

「あれ、どうして防御陣が張れないんだ？ 僕には「六形印樹の法陣、は、完成できないのかなあ？」

そう、アルビレートは、また失敗をしていたのである。

彼はその現実に落胆すると、困ったようにヒュールを見ていた。

「う～む・・・」

すると、それに応えるように、ヒュールは腕組みをして唸っていた。

そして、

「なあ、アルビレートよ、お前さん呪文を唱えるとき、何に集中してマルレリスを使役しようとしているんじゃ？ お前さんは確かに未熟じゃが、指輪の継承が出来た以上、それなりに高位の守護天使を使役する秘められた力を持っている筈だと思うのじゃが、どうしてこう何度も失敗するのか不思議でならん。ワシからしてみれば、お前さんは呪文詠唱の時、何か別なことに気を配ってその精神集中を乱しているようにしか思えんのじゃ。だから何を考えて呪文を唱えている？ 雑念があると防御陣は完成せんぞ・・・」

そうヒュールは、そう言うとき、アルビレートに疑問を問うて見せていたのだった。

するとアルビレートは、その言葉にギクッとしたような顔を見せ俯く。

そして、こんな事を言うのである。

「あの～ヒュールさん、実は僕、呪文を唱えると、どうしてもマルレリスさんの脚が気になってしょうがないんです。マルレリスさんとても魅力的な綺麗な脚をしていますから、彼女が僕の目の前で浮遊している姿を見ると、どうしてもそれが気になって変な想像をしてしまうんです。だから多分それが原因なのじゃないかと、いま僕は気付きました。恥ずかしいかぎりです・・・」

すると、「なんじゃそうかアルビレートよ、お前さん子供の割りには意外とスケベなのじゃな？ 確かにマルレリスは美人で綺麗な脚をしているが、そんな事に気を乱しては、三人の守護天使を使役して絶大なリングロードの力を発揮できる、リングマスターにはなれんぞ。じゃからこの際だから、マルレリスを美人だと思わず豚だと思え、そうすれば気が乱れることは無いからの・・・」

そうヒュールは、そう言って気を乱さない方法を、アルビレートに対して教えていた。

それは特に簡潔な解決法だと思ったが、それで全て上手くいくとそう思えたからだった。

だが、

ボカボカボカボカボカ・・・ボカボカボカボカ！

ボカボカボカボカ・・・ボカボカボカボカ・・・

しかしその時、その言葉をアルビレートの頭上で聞いていたマルレリスは、突然、怒りだしてヒュールの頭を容赦なく猛烈な勢いで、その小さな拳を振るって殴り始めるのである。

だから、

「ぬおおおっ、何するのじゃマルレリス、ワシはたとえて豚と言っただけではないか、それを怒るなんて大人げないぞ。そんな事、それ程、他愛のない事ではないか・・・」

その為、ヒュールは、その怒るマルレリスに「やめんか！」と殴られる痛みを堪えつつ抵抗してそう抗弁を垂れると、頭を押さえつつも、何も出来ずにそのマルレリスにボコボコにされていた。マルレリスは、豚にたとえられたことが相当いやだったらしく、ヒュールの頭を殴りつづけると、最後にはでっかいハンマーをその手に召喚して、それ

をとどめとばかりに振り下ろしていたのである。

バコンッ！

「うがぁぁ！」

だからヒュールは、その一撃を喰らいノックアウトして、白目を剥きながら地べたに転げて仰向けに倒れていた。

そして、

ヒクヒクヒク・・・

ヒュールは、その後、気絶して顔の筋肉をヒクつかせると、完全に撃沈していたのである。

そして五分後・・・

ヒュールは、アルビレートに介抱されると、ようやく目をさます。

そして・・・

アルビレートとヒュールは、マルレリスの気をなんとか宥めると、その後、少しして防御陣形成の訓練を再開していた。

アルビレートは、マルレリスを頭上に配すると、今度はヒュールに注意されたように呪文詠唱時に雑念を断つよう心がけ、六形印樹の防御陣を形成する呪文を唱えていた。

すると、

するとその呪文は成功して、アルビレートの周りには、その名のとおり大きな六角形の防御障壁が張り巡らされていたのである。

「やった！ やったよヒュールさん、成功したよ！ 僕にも出来たよ！！」

そして、その成功に喜びを顕わにするアルビレート——それを見てヒュールは、

「やれやれ、やっと成功したか・・・」

と、彼は少々、疲れ気味に、マルレリスに殴られた頭をさすって「はぁぁ・・・」と、ため息をついて見せていたのである。

元自分の守護天使だった、これまた扱いづらい、そのマルレリスに癖癖してだった。

*

こうしてアルビレートとヒュールのマンツーマンの訓練は、その後、五日間にわたって続けられていた。

アルビレートは、その中で色々な呪文と使役方法を学び、その短期間の内で未熟だった頃の彼よりも、一回りも二回りも大きく成長してリングロードとしての道を歩み始めていた。

その姿は、馬鹿にされていた頃の彼よりも、断然、男らしく見えたが、そうしてアルビレートは、ヒュールにリングロード・マスターの神髄に至るためのちょっとしたコツも少しそれとなく教えてもらってもいたのである。

そしてアルビレートは、リング継承の日より七日目、一度、学院に登校して、その力をみんなの前で試そうとしたのである。

自分の成長が、一体どんなものになったかと、そう思いつつだった。

第三章 称賛のあとに・・・

第一節

「おい嘘だろ、こんな事ってあるかよ・・・!?」

アルビレートが七日ぶりにマントレス学院に登校して、その日の実習訓練に参加してみると、その日、彼、以外の学院生はみな哑然とする事になった。

いま学院生は、学院の修業グラウンドで行われている、二人の法陣合わせの対局を傍観しているのだが、そこで信じられない光景を目にしていたからである。

学院生は、いま行われているアルビレートとレリルの法陣合わせを遠巻きに見ると、皆その目を疑っていたのである。

『マフニクト・エレベス!』

その掛け声とともにレリルから撃ち放たれた電撃、それは確かにアルビレートに対して直撃したかと思われた。

しかし、それを彼は、強力な防御陣で弾き返していたのである。

アルビレートを襲ったレリルの守護天使の強烈な電撃は、アルビレートに届く直前、半透明なる不透過な容易に見えざる六角形の防御陣に見事粉碎されて四散したのだ。

そうアルビレートは、六形印樹の防御陣で、このマントレス学院一のリング使いであるレリル・マスタールの電撃攻撃を防いだのである。

だが、それだけで、その戦いを観戦していた、他の生徒達の驚愕は止まなかった。

アルビレートがレリルの渾身の電撃を防いで、次に反撃に転じると、そこでも学院生たちは、その光景に驚愕を覚えたのである。

『マニレトス、ウォン、ファビル、大気に普く風陣の神よ、其は我が守護天使ミュルルの名の括印に感じて、その偉大なる斬撃の風殺を吾が前に示し給え・・・!』

アルビレートは、レリルの電撃を粉碎した直後、そう呪文を唱えると、そのレリルに風神の刃、と呼ばれる攻撃を仕掛けていたのである。

呪文詠唱、直後、アルビレートの守護天使ミュルルから白光の光彩がほとばしると、その白光は強大な風の刃になってレリルを襲っていた。

『我が使徒エンレースよ、ガーディアスの法により我が身を守り給え・・・』

それにレリルは、ガーディアスの障壁で対抗する。

だが、レリルが守護天使エンレースに防御の障壁を張らせても、アルビレートの放った風の刃は、その障壁を紙切れのように切り裂いてレリルにそのまま直撃していた。

そして、

レリルは、その風の刃の直撃を受けると、ドッと後方へ吹き飛ばされていたのだった。

「両者、そこまで！！」

そして、それを見たこの対局の指導教員は、この法陣合わせの勝負を打ち切ると、その次には誰もが信じられない言葉を発していたのである。

「この勝負、アルビレート・ニケリスの勝ちとする！！」

そう、その時、アルビレートの勝利が告げられていたのである。

「うおおお！ あのアルビレートがレリルに勝ったよ、信じられねー」

「うそ、レリルお嬢様が負けるなんて・・・」

「何だ、何かの間違いだろ！？」

だから、そこで観衆の生徒達はどよめくと、勝利を告げられたアルビレートを見て驚愕した。

そう生徒達には、とても信じられなかったのだ。

あのひ弱で、この学院では一番の劣等生だったあのアルビレートが、この学院一のリング使いレリルを一撃で負かした、それを見れば自分の目を疑わない筈はなかった。

それは、絶対ありえる筈はないと、誰もがそう思っていたからである。

だがしかし、現にレリルはアルビレートの攻撃を受けてふき飛び、地面にどっと倒れこんでいた。

だからこの勝負の勝者は、アルビレートに間違いはなかったのである。

だが、その現実をこの学院の生徒達は、なかなか認めることが出来なかった。

あのアルビレートが、なぜ？

あのアルビレートが、どうして？

生徒達は、その思いに支配されて困惑していたからである。

その為、生徒達は、その場でしばらく啞然とし、惚けたような顔をしてアルビレートを凝視していた。

すると、

その時、どこからともなく観衆となっていた生徒達の間から、拍手が沸き起こっていた。

そう、このアルビレートとレリルの戦いを観戦していた一人の生徒が、アルビレートの勝利に対して拍手を送っていたのだ。

そうアルビレートを、立派な法陣合わせの勝者として・・・

だから他の生徒達は、アルビレートの勝利に啞然とする中、その拍手を耳にすると我に返った様に、みな次々にアルビレートに対して拍手を送り始めたのであった。

最初は二人、三人とその手を叩き、アルビレートに称賛を送る。

だが、その称賛は、次第に生徒たち全員に広まり、やがてはその場に居合わせた生徒達のほとんどが、アルビレートに対して拍手を送り始めたのである。

パチパチパチパチ・・・パチパチパチパチ・・・

そして、

「アルビレート凄いや、お前レリルに勝ったんだぞ！ やるじゃないか見なおしたぜ！！」

「すげーよアルビレート、やれば出来るじゃないか！！」

「うん、すごいすごい、アルビレートはこんなに強かったのね！？」

そう生徒達は口々に、アルビレートを誉め讃え始めたのである。

生徒達は、先程までの驚愕の目を憧憬の目に変えると、やがてはアルビレートの周りに集まりだし、一斉に歓呼の声をあげ始めたのであった。

「アルビレート、凄いよ！」

「やったな、アルビレート！」

そして生徒達は、今までイジメられて蔑まされていた彼を、ここでようやく称賛に値する人物であると認めていたのである。

だから、その歓呼の声は、容易に止むことはなかった。

そう、ここで初めてアルビレートは、皆の生徒達に一目置かれる存在となったのである・・・

第二節

レリルとの法陣合わせの対局が終わったその日、アルビレートは、即座に学院の生徒たちから英雄的な羨望の目で見られる様になっていた。

生徒達は、レリルとの法陣合わせで、アルビレートがその彼女に実力で勝利し、リングロードとして有能に値するという事実を嫌というほど見せ付けられたので、誰もがそれを認め始めていたのである。

だから、その称賛の声と羨望は、止まなかった。

何せ、アルビレートは、この学院一のリング使いと称されていたレリルを打ち負かし、初めて勝利の栄冠を手にしていたから、誰も彼をもうひ弱なダメ人間とは言わなくなっていたのである。

その為、アルビレートは、一躍この学院の人気者になり、そして憧憬の的になったのだった。

だから今アルビレートは、教室でその学院生たちに取り巻かれ、色々な質問を受けていた。

「なあなあアルビレート、ところでどうして君は突然レリルに勝つほどのリングロードの指輪の力を身につけたんだい。その事を俺たちに教えてくれよ、なあいいだろ？」

「そうそうアルビレート、あなたどうして学校を六日間も休んでいて、いきなり強くなったのよ？ 何か特別な修行でもしていたんでしょ？ 私たちにどうして強くなれたか教えてよ」

そうアルビレートは、生徒達に取り巻かれ、そんな質問を受けていたのである。

「あのね、それは・・・」

するとアルビレートは、その質問に恥ずかしげな赤い顔をして俯くと、「実は僕、この前ある一人のリングロード・マスターから指輪の継承を受けて、新しい三人の守護天使を使役する機会を身につけたんだ、だからそれで・・・」

アルビレートは、そう言って取り巻きの生徒達に、自分が一人の老人の弟子になって、この六日間、指導を受けていたという事実を語っていたのである。

だから生徒達はその時「リングロード・マスターから指輪の継承を受けたって！！」と、先ほどアルビレートがレリルに勝利した時の事実よりも、その真実に驚き、目を丸くして騒ぎだすのであった。

「ねえねえ、アルビレート、それ本当のことなの？　あなたがリングロード・マスターから指輪の継承を受けたって？　それがもし本当なら、大変なことじゃない。これってこのマントレス学院の歴史上、三人目の快挙よ！」

そして、一人の少女がそう言って、他の生徒達と顔を見合わせながら、アルビレートを稀に見る大偉人の様に見つめるのであった。

そう、実はその少女が言ったように、このマントレス学院では過去にリングロード・マスターから特別に指輪を譲渡されて、そのマスターの継承者になった生徒は、今までの二百年の歴史の中でもたった二人しか存在していなかったのだ。

現役のリングロード・マスターから指輪を譲渡されて、その弟子になった人物は、指折り数える程しかいなかったのである。

つまり、リングを譲渡されるというのはとても稀なことであり、そして特別な事なのである。

だから生徒達は、そのアルビレートの言った言葉に、何よりも驚きを感じていたのである。

「それ本当かよアルビレート、それならその事をすぐ学院長に報せなければダメじゃないか、何せこの学院の生徒のお前が、リングロード・マスターから指輪を譲渡されたのなら、それはこの学院の他の生徒達や教員にも誇りになるものだから、学院長にそのことを報せてお前がリングロード・マスターの弟子になった事を公にみんなに報告しないとこの学院の恥になるぞ。だからお前は一度、その師匠となるマスターをこの学院に呼んで、みんなの前に紹介して、そしてみんなで厚くもてなさなければいけないんだよ。この学院では、リングロード・マスターから指輪を継承された者には、学院の栄誉の宝冠が授与されるんだから・・・」

「そうよアルビレート、彼の言う通りよ。貴方がもしリングロード・マスターから指輪を継承したのなら、その事をこの学院に報せて学長から表彰されなければならないの。だから今すぐにでもそのことを教員に申し出て、あなたが指輪の継承者に選ばれたって言うことを自称しなければ駄目よ。それはとても栄誉なことなのだから・・・」

その為、生徒達は、そう言ってアルビレートに、一度、自分の師匠となるヒュールをこの学院に呼んで、明日にでも、もてなしのパーティーを開くことを薦めていた。

しかし、

「ええっ？　そんな事しなくてもいいよ・・・」

アルビレートは、そんな話を聞いても、ただ照れくさげに下を向いてはにかむばかりだった。

そう、アルビレートは、そんな事よりも、今は今まで自分をイジメていた他の生徒達が、自分に対して打って変わって友好的に接するようになった、その事実を嬉しく思う気持ちで一杯であったのである。

だから、今は、そんな話はどうでもよかったのだ。

だが、そんなアルビレートの態度を見て、生徒達は焦れる。

彼らは、アルビレートとその彼に指輪を継承したヒュールを学院でもてなして、リングロード・マスターの指輪を継承された、その快挙を心から祝したかったのである。

その為、アルビレートを取り巻く生徒達は、その事を早くこの学院の教員達に報せたくてうずうずしていたのだった。

だから生徒達は、口々に言うのだ、

「アルビレート早く教員に報告しなさいよ、リングの継承を受けたって、それは貴方にとって誇りなんだから・・・」

「そうぞアルビレート、リングロード・マスターから指輪を譲渡されるなんて、凄いだからな・・・」

しかし、

「うん・・・でも・・・」

アルビレートは、その事を洩る。

だから生徒達はついに焦れて、そんな中、一人の生徒がこんな事を言って、いきなり駆け出していたのである。

「それじゃアルビレート、君が言わないじゃ僕がそのことを教員に報せてくるよ！！」

そう、その一人の生徒が教室から飛びだすと、教員室に走って行ったのである。

その為アルビレートは、

「あっ、待って！」

とって呼び止めようとした。

だが、その生徒はもう教室からでて廊下を駆けていってしまったので、アルビレートは他の生徒達に囲まれながらも、困惑した表情をその顔に浮かべていた。

そう、アルビレートは、恥ずかしかったのである。

みんなが自分を称賛して、好意を示し始めていることが、

だが、それも自分がリングロード・マスターから指輪を継承されて強くなったことを認められての事なので、アルビレートは照れながらも、それを嫌だとは言わなかったのだった。

だが・・・

だが、そう、そうしてこの日を境にアルビレートは、この学院の荣誉あるリングロードとして扱われる様になったのである。

しかし・・・

だが、そんなアルビレートがみんなにちやほやされる光景を見て、おもしろくない顔をのぞかせていた別の生徒達もいたのである。

教室の角からアルビレートを憎たらしげに見つめて不貞腐れていた生徒、それは、あのいじめっ子三人組のベレンケスとそれにパトン、ゲトル達であった。

彼らは、アルビレートが他の生徒達に取り巻かれ、ちやほやされているその光景を見

ると、納得いかず卑しくも嫉みの感情を抱いていたのだった。

「チェッ、なんであんな奴が・・・」

そうベレンケス達は、アルビレートがみんなに誉められて、一躍、注目の的になった事が気に食わなかったのである。

彼らにとって、アルビレートはひ弱な蔑むべき存在であった。

だが、彼は不本意なことに、レリルよりも強いリングロードの力を身につけてしまった。

それは実際、自分たちにとって、とても屈辱的な事実であったのである。

だからこの三人は、その目を陰湿的に輝かせ、そんなアルビレートをどうにかしてまたへこませてやろうかという計画を、その時、密かに話し合っていたのである。

「なあ、どうするベレンケス、このままだとあいつこの学院の英雄になっちまうぞ、そんな事、許せると思うか？ あんな奴がこの学院の宝冠を授与されるなんて、そんなの見たくないだろ？ だからよ、もしあいつが明日辺りパーティーでもてなしを受けるのなら、それをその時ぶち壊してやらねーか？ だって気に入くわねーもの・・・」

そうベレンケスに対して言ったのは、パトンである。

彼は、アルビレートに小憎らしそうな眼差しを向けると、そんな話を持ち掛けたのである。

すると、

「そうだな、確かに嫌だよな、あんな奴が学院の栄誉を受けるなんて・・・」

そう言って今度は、ゲトルが同じような心境を如実に表すのである。

だからそれを耳にしたベレンケスは、「よし、それじゃ、あいつがもしパーティーでリングロード・マスターの指輪継承者として賞されるのなら、俺達は、そのパーティーに出席して宝冠が授与されないように、そのパーティーを目茶苦茶にしてやろーぜ。そうすれば、あいつがまた泣きべそかいてへこむ姿を見られるかも知れねーから、そうしてみるのも悪くないな」

ベレンケスはそう言うと、懐から拳大ぐらいの水晶球を取り出すと、その口元を嫌らしく釣り上げて、悪意的にニヤ笑いを浮かべるのである。

そして「この破壊の水晶球で、パーティーを目茶苦茶にしてやる・・・」と、意気込むように、陰湿なる敵意の観をその顔に覗かせていたのである。

第三節

次の日、マントレス学院では、急遽リングロード・マスターをもてなすパーティーが開かれる事になった。

全校生徒をあげて行われるこのパーティーは、アルビレートの師匠となるヒュールをもてなす会であると同時に、リングの継承を受けたアルビレートに学院の荣誉である「金印賞」を授与するための簡略的な式典でもある。

だから、パーティー会場として開放された講堂では、今パーティーの準備が進められていた。

そして、そのパーティー会場の奥、講堂の裏に面する控えの場では、いま二人の少年と少女の姿が垣間見え、何事か会話をしている様子が覗えた。

「でもホントすごいねアルビレート、まさか貴方がリングロード・マスターから三つもの高位の守護天使召喚リングを継承されるなんて、あなたの親友である私も鼻が高いわ」

今そう言ってアルビレートを見詰めたのは、金髪のポニーテール、レリル・マスターである。彼女は、アルビレートを心の底から誉めると、ニコリとして張りのある笑った顔の表情を呈して見せていた。

「えっ、そんな事ないよ、ただ僕は運が良かっただけなんだよ・・・」

だが、それに応えてアルビレートは、はにかんだ様な照れた笑いをその顔に浮かべると、そのレリルにそう言って謙遜していた。

アルビレートは恥ずかしかったのだ、その親友のレリル彼女に褒められて見詰められた事に対して、ほんの少しの嬉しさを感じたからだった。

「ううん、そんな事ない。指輪を継承された以上、貴方はそれなりのリング使いとしての秘められた能力を、貴方、自身が持っていたという証拠だもの、だからそれは自慢できる事なのよ。もっと自分に誇りをもった方がいいわ、多分、それは絶対にね・・・」

するとレリルは、アルビレートを貶さず、もっと自分に凄い事の道が開けたという事の自覚を持てと、そう暗にそう言っていた。

レリルは正直、自分も自慢できるとそう思っていたのである。

こんな高位のリングを継承された友達と自分は親しくして、一応、親友と呼べる関係にある事実があるからだった。

だからそのレリルも、アルビレート同様、その事実が嬉しかったのだ。

それほど凄い友達といえる好きな子が、希に見る荣誉を受けるからであった。

「え、そうかな、でも僕はまだまだ未熟だからね」

だが、そんなレリルに誉められても謙遜するアルビレートは、その顔にまた照れた笑いを浮かべてはにかんでいた。

そうレリルに褒められて、やはり彼は心地よかったのだ。

彼女レリルが、自分の事を仲の良い親友だと思ってくれている事も、アルビレートは嬉しさを隠しきれず喜びを感じていた。

そんなアルビレートは、レリルの事が好きだったのだ。

彼アルビレートは、自分に憧憬の眼差しを向けてくる、その二つ年上のレリル・マスターの事が、年の差があれどとても気心の知れた特別な存在であると、そう思っていたからだった。

「でもさアルビレート、私、昨日あなたと法陣合わせの勝負をしてみて、すごくあなたに

男らしさを感じちゃったんだけど、あなたってすごく成長したわよね。だって、昨日、七日前までとはまるで別人みたいに堂々と私と勝負してきたんだもの。だから私、ちょっとドキッとしちゃった。何となく昨日のアルビレートは、いやに男らしく感じたから・・・」

だが、するとレリルは、昨日の法陣合わせの事を思い出して、またアルビレートを褒め称え、その彼に好意を示す様な称賛の言葉を贈って見せていた。

レリルは、本気でアルビレートが以前、数日前より、一回りも二回りも大きく感じる様になったと、正直そんな事を彼女はアルビレートを見てそう思っていた。

アルビレートは、確かにレリルから見て以前より男らしい顔の表情になったと、本気でそう感じる事が出来ていたのである。

だからレリルは、アルビレートのことを余計、好きになっていた。

少し前の、自分に自信を持てなかった彼よりも、余計にだった。

すると、

「僕が男らしい？」

しかし、そう言われてアルビレートは疑問げな顔を見ると、レリルの言葉に戸惑いをそこで覚えていた。

彼、アルビレートは、自分が男らしいなどと言われたのは初めての事であったからだ。

だからアルビレートは、かなりその時、戸惑った顔の表情をして見せていた。

アルビレートは、自分がそんなに男らしいとは、あまり自信ありげに思った事は一度もなかったからでもある。

すると、

「うんそう、すごく男らしかった。私あなたのこと見なおしちゃった。だって、とても強くて素的な顔をしていたもの、昨日の試合の時のアルビレートは・・・」

そう、するとそんなアルビレートの彼に、レリルは憧憬的な眼差しを向け、彼女レリルはそう言ってまたアルビレートを褒め称えていた。

レリルは、アルビレートとの昨日の法陣合わせで、今までにない力強い男らしさを彼に見いだしていたのだ。

だから今日のレリルは、その彼に、至極、期待をする思いを抱いていたのである。

自分の好きなアルビレートが何か男らしくカッコいい様にレリルには思えたからでもあった。

「ええ、そうかな？ でも僕、何も変わっていないと思うんだけど、気のせいじゃないの」

しかしアルビレートは、そんなレリルの思いも知らず、怪訝な顔をして、自分の指輪を見つめていた。

確かに自分は、昨日のレリルとの法陣合わせで、圧倒的な勝利をおさめ、自分はそれに勝利したが、アルビレートは、自分がそれほど男らしくなったとはあまりそれに関しては自覚がまだ無かった。

確かにアルビレートは、前より強いリングロードの力を身につけた事は自認していたが、それもこれもみな自分の師匠であるヒュールのお陰だと、そう思っていた節が彼アルビレートには確かにそんな認識がある事はあったのだった。

だからアルビレートは、それ程、自分を過大評価はしなかった。

その点に関しては彼はまだ謙虚で、あまり凶に乗る自分自身は持ち合わせてはいな

かったのである。

すると、

「ねえアルビレート、ところであなた、この数日間どんな修行をしてきたの？ ヒュールさんというリングロード・マスターから指輪を譲渡された以上、さぞかし色々な高度な召喚使役術を教えてもらったんでしょ？ だってあなたの継承されたその指輪って、エミュルタールの指輪ですもの、私がしているエンレースの銀輪と違って、それは神族に近い属性を合わせ持つ指輪なのよ。そんな指輪を所持していたヒュールっていうお爺さんも、よっぽど高位のリングロード・マスターだったのね？ エミュルタールっていったら、リングロード・グランド級の高位召喚輪ですもの、だから余程、特殊な修行をしたのでしょ？ だって昨日、全然わたし敵わなかったもの、強く強く成長したアルビレート貴方に・・・」

しかしレリルは、今度は話題を変えて次にそう言うと、アルビレートがしている四つの指輪のうち、人差し指と中指、そして薬指にはめられている継承されたリングを羨ましそうに見て、そのリングの位の高さをそれとなく評価して見せていた。

そうそれは、エミュルタールという特殊で、とても特別な指輪なのである。

そんなリングをアルビレートが継承された事は、確かにこのマントレス学院の誇るべき自慢でもあり、それは確かにとても滅多にある事でもない希な事だからである。

だからレリルは、その事に関しても、アルビレートに憧憬の念を抱いて見せた。

レリルは、そのアルビレートを好くと、ますます憧れの念を抱いて、アルビレートの事を本気で尊敬している様な目を向けて来ていたのであった。

レリル彼女は、本気でアルビレートのことが好きであったのである。

喩え法陣合わせの試合で、自分がアルビレートに負けたという、そんな事実があったとしてもだった。

だが、

「うん、確かにこれはエミュルタールっていう指輪らしいけど、でもエミュルタールて一体なんなの？ 僕の師匠のヒュールさんは、その事について何も教えてはくれなかったんだけど、一体何がどうなのかな・・・」

だがするとアルビレートは、レリル彼女にそんな事を言われると、逆にそのレリルにエミュルタールとは一体何なのかを、問いかけて疑問げな顔をして見せていた。

実は、アルビレートは、正直その意味を、全く詳しく知らなかったのである。

だからエミュルタールとは、どういう指輪なのか、そしてどんな高度な守護天使召喚輪としての位を持っているかを、そのレリルに問いただして見せていた。

アルビレートは、ホントにそれを知り得なかったのである。

自分が継承されて、自分の所有になった、その三つの輝く指輪であってもだった。

だから、

「え、知らないのアルビレート、エミュルタールっていったら、天神七階級の第二位に位置する守護天使の召喚リングなのよ。それって、途方もない魔力を発揮できるリングだから、それ知らないなんてアルビレートあなた変ね、学院の授業で、一度、習ったことがある筈なのよ・・・」

そうレリルは、そんなアルビレートに、驚きの表情を浮かべると、「あなた学校の授業

ちゃんと聞いていなかったでしょ？」と、そう言って、彼女は軽くアルビレートを窘めていた。

そう実は、確かにレリルは学院の授業で、それを教員から教わって聞いた事があった。

指輪の歴史に関する専門的な話の授業の中で、エミュルタールとはリングロードの指輪の内でも、上級召喚術師にだけ所有が許されている指輪なので、その指輪を継承したり天神から授けたりするには、それだけの秘められたリングロードとしての力がないと所持できないのだと。

だからエミュルタールの指輪を、リングロード・マスターから継承されたという事は、アルビレートには、それだけ上級召喚術師としての才能があるという事を示していたのであった。

だからレリルは、彼に憧憬して期待を寄せるのは、それが良く判っていたからである。

しかしアルビレートは、それが解らず、その事実をレリルに聞いて、いまさらながら驚きを示して見せるのであった。

だから、

「へー、それじゃ僕、ヒュールさんから、そんなすごいリングを継承されたんだね？　でも僕に、そんな凄い才能なんてあるのかな？　いまいちそんな事、実感がわからないよ。僕はただ今はまだまだヒュールさんに守護天使の使役方法を教えてもらえばかりで、一応それを暗記して覚えているだけの事だから、まだ本格的な事はよく知らないんだ。だからまだ僕は未熟なのさ、ただ高位の天使を使役するために、大分それなりの専門的基礎使役のコツは、学ぶことは出来たのは確かだと思うけどね・・・」

するとアルビレートは、レリルの話を聞くと、しげしげとその自分のリングをもう一度見つめていた。

アルビレートは、ようやくその自分が受け継いだ指輪の凄さを親友であるレリル・マスターに教えてもらおうと、心底、不思議がって見せていたのである。

それは恥ずかしながらも、今更の今の事であったのだが・・・

だが、

「ねえ、ところでアルビレート、まだパーティーは始まらないの？　私お腹ぺこぺこで死にそうよ、一体いつになったら鳥のもも肉、食べさせてくれるのよ。私たち今朝から何も食べていないんですからね、腹減って死んだらどうするのよ・・・」

だが、レリルとアルビレートがそんな話をしていると、その時、アルビレートの頭の後から、そう言って声をかけてきた女性がいた。

その女性は、黒髪の女性で、目が赤く背中に羽の生えた女性であった。

彼女は、目付きが非常に悪く、行儀もあまり良くない女性なのだが、その女性は、アルビレートに声をかけると、空中で鼻クソをほじりながら寝そべって、グータレた態度を示して見せていた。

そうそれは、アルビレートの守護天使のメルヴィーなのである。

彼女は、空中で寝そべりながら、不機嫌な顔を浮かべると、ついでにアルビレートの頭を不意に遠慮無くドカッと足の裏で蹴飛ばしていた。

「そうそうアルビレート、いつになったら私たちに特上の鳥のもも肉、食べさせてくれる

のよ？ 私もお腹ぺこぺこなんだから、早くしてよね。彼女といちゃついてないで、早くパーティーを始めるように、この学院の学長に催促しなさいよ。私もそうだけど、マルレリスもお腹すかせているんだから、早くしないとマルリ（＝マルレリスの愛称）怒るわよ！」

だが、黒髪の天使メルヴィーがそうやってアルビレートに文句をたれると、次にそうやって抗議してきたのは、水色の髪天使ミュルルだった。

彼女は、アルビレートの目の前に浮遊すると、腰に手を当てて胸元を揺らし、プーッと膨れる様な顔をして、怒ってきて見せていた。

ミュルルは、メルヴィー同様、アルビレートに文句をタレると、その姉に影響されつつその態度も悪く、鳥のもも肉の催促を食欲ながらも遠慮会釈もなくしてきていた。

彼女は、アルビレートを見て怒ると、その小さなお腹を擦って腹が減った事をアルビレートに意思表示してきて、機嫌の悪そうな顔を見せて来たのであった。

すると、

そしてそれに呼応する形で、やはりミュルルの隣にいたマルレリスが、ウンウンと頭をうなずかせ、姉のミュルルの言葉に同意し、いきなりその手元にでっかいハンマーを召喚し、それを構える素振りを見せて来るのだ。

だからその時、アルビレートは危機感を感じて「あっ、ちょっと待ってマルレリスさん、そのハンマーで僕を殴らないでよね・・・」

と、そう彼はマルレリスにそう言うと、彼女を宥めて『あと少し我慢して待ってね』と言って、その危機を回避し、何とかその三人の天使達を抑えて、まだ今日のパーティーが始まってくれないかと気を揉む事になっていたのだ。

アルビレートは、さすがにこの三人の天使には、何かとその手を焼いていた。

この反抗的な、小さな三人娘の自分の高位な守護天使にだった・・・

だが、

「ふふふふふふ・・・」

するとその時、それを見ていたアルビレートの親友レリルは、アルビレートの天使に対する態度が可笑しく思えて、思わず笑いを漏らしてしまっている様子だった。

レリルは、アルビレートの慌てた様な態度を見て、失礼ながらも遠慮無く明るい顔をして楽しそうにその顔を笑顔でほころばせていたのだ。

それは何か、彼女レリルには、微笑ましく思えていたからの様子でもあったからだった。

そして、

「でもアルビレート、この守護天使さんたち、ずいぶん食いしん坊なんだね。高位の守護天使って、みんな食欲旺盛なのかな？ かなり面白い天使さん達なのね？ 何か少し行儀の悪い面が、見た目で見ると気になる様な気もするけど・・・」

そうレリルは、アルビレートに次にそんなことを言って、にこやかな笑顔を見せて来るのである。

そう、アルビレートとレリルが話をしていたこの場所には、彼の守護天使であるメルヴィーやミュルル、それにマルレリス達も、先程からそこにつまらなそうな顔をして同々し、そのアルビレートとレリル・マスターの二人の会話を聞いて、退屈した態度を何

のはばかりもなく見せていたのである。

その為、

だからアルビレートは、顔を渋くすると「パーティーはもうすぐだから、三人とも我慢して待ってね」と、極力、彼女等を怒らせないように宥めて、彼自身が自分の守護天使に、まるで下僕のように扱われているか様に見えた。

そしてアルビレートは、レリルに「あはははは、ホントこの三人で食いしんぼさんだね・・・」と、極力、愛想笑いを浮かべて笑い返して見せていた。

そうアルビレートは、とにかく今日は困っていた。

この自分の三人の天使達の機嫌が、余りにも良くなかったからであった。

だが、

「ねえアルビレート、さっきから貴方の彼女に愛想振り撒いていないで、チチルを呼び出して水汲んでこさせなさいよ。私さっきから喉が渇いて水が飲みたくなったの、だからチチルを使いっぱしりにさせて、私に水を汲んで来てもらいたいわ。ねえ早くそうして、私、水が飲みたいのよ、喉がカラカラなの・・・」

だが、そんな光景を見ていたメルヴィーは、またアルビレートの頭を軽く足で小突くと、彼の守護天使のくせに不遜にも水が飲みたいと言いだし、我が儘にも、チチルに使いっぱしりをさせるように命じて来ていた。

メルヴィーは、アルビレートを睨め付けると、少し凄む態度でそんな命令を自分の主人であるアルビレートに催促して、強要するかのように、態度、悪く話しかけ、我が儘を口に出してそう言うのであった。

だから、

その為アルビレートは、「えッ！？　またチチルに水を汲みにいかせるの？」と言って、やれやれといった様に、頭を掻く態度を見せていた。

そう実は、今日メルヴィーがチチルに水汲みを要求したのは、これで五回目なのだ。

だからアルビレートは癡癡して、仕方なくチチルを指輪から呼び出そうとして、その小指の指輪から、自分の四人目の守護天使のチチルを召喚する呪文を仕方なく唱える事にしていた。

『・・・いでよ僕の守護天使チチル！』

そしてアルビレートは、チチルを指輪から召喚させると、彼はそのチチルに渋々ながらもメルヴィーの要求どおり、その彼女に水を汲んでくるようお願いをしていた。

「チチル済まないけど、水汲んで来てくれる？」

だが、

「嫌ッ！！」

そうチチルは、そのお願いにフンと外方を向いて、空中でふてくされ極端な拒絶的態度を怒った素振り、そのアルビレートに示して見せたのだ。

チチルは、大人しい天使だが、今度はそのメルヴィーの要求に反発して、その様な態度を取って見せていたのであった。

そうそして「もう今日で四回もメルヴィー様の我が儘を私に言い付けたのだから、今度はメルヴィー様は、自分で水を汲んでくればいいんです。私はアルビレート様の守護天使なのだから、同じ守護天使のメルヴィー様の言うことはもう聞きたくありません。

私は使いっぱいりの天使じゃないんです、だからもう嫌です！！」

そうチチルは、ひどく憤慨した表情をその顔ににじませると、アルビレートのお願いを拒絶し、メルヴィーに対してそう言って少し大きく敵意を燃やす言葉をぶつけて見せていた。

そうチチルは、怒っているのである。

何度も何度も水を汲みに行かされて、使いっぱいりにさせられた事をだった。

だからチチルは、もうメルヴィーを無視、怒りの念を交えて、彼女はメルヴィーに対してこれぞとばかりに逆らった態度をそこで見せていた。

すると・・・

「何よチチル、私の命令が聞けないというの！？ それは私たち上級守護天使に対して失礼なことよ！ あなたは下級天使のくせに、私に対して反抗するなんて以ての外よ。そんな反抗的な態度をとると、マルレリスにあなたをシメさせるからね、それが解るの？」

そうメルヴィーは、チチルに対して極端にきつい脅しをかけたのである。

だが、

しかしチチルは、そんなメルヴィーに「イイイイツ」といって白い歯をみせ、反抗的な仕草を見せると、そのメルヴィーにやはり反発して、極力無視する態度を示して見せていた。

カチン！

だから、その為メルヴィーは怒って「マルリやっちゃいなさい！」と、そう言うと、その赤髪の彼女マルレリスに攻撃命令を下す。

するとマルレリスはうんと頷いて、先ほど召喚したハンマーで、その反抗的チチルに狙いを定めて殴りかかる仕草をして見せるのだった。

しかし、

チチルはそんなマルレリスの攻撃態勢を躲すと、アルビレートの肩の後までびゅーっと飛んでいき、その後に隠れ、べーっと舌を出してマルレリスを馬鹿にするように反発的な態度を示していたのであった。

ボガン！

「痛てッ！！」

だからマルレリスは怒って、今度はチチルではなく、アルビレートの頭を一点集中的に狙って、その手持ちのハンマーを強烈に振り下ろすのであった。

だからアルビレートは、直後、その場で頭をおさえて苦悶の表情を浮かべていた。

そして、

「ちょっと、なんでマルレリスさんは僕の頭を殴るの！？ 僕は、何もしていないじゃないか、それを・・・」

そうアルビレートは、マルレリスに殴られて、面食らいつつも、そういって抗議の声を上げて見せていた。アルビレートは、いきなりの事に避ける間もなくその頭を強く痛打されて、その顔に涙目を浮かべて、無防備な被害者の声を上げていたのである。

だが、

だがマルレリスは、先程のチチルの様にフンと外方を向いてその言葉を無視する。

そしてマルレリスは、ひゅーっとミュルルのところまでひとつ飛び滑空すると、その

ミュルルに何故か耳打ちして、何事か自分の言葉を言伝していたのであった。

そして、その言伝がおわると、マルレリスはにこりとアルビレートに対して意味不明に笑って、ムヒヒというような含み笑いをその顔にまた浮かべて見せるのであった。

そしてミュルルが言う。

「あのね、アルビレート、マルリが言うには『チチルが私たちに反抗するのは、その主人である貴方が、ちゃんとした守護天使としての教育を彼女にしていけないからいけないの、だから、その反抗する責任は、その主人がとらなくちゃ駄目だから、私はあなたに罰を与えるわ』という事らしいのよ。だから『殴られて文句は言わないでね』だって……」
「ええっ、そんない」

だからその為、その理不尽な言葉を聞いたアルビレートは、マルレリスの代弁をしたミュルルの方を見て「そんなの酷いよ！」と、抗議の声をまたまた上げていた。

そして心の中で（メルヴィーさんやマルレリスさんだって、今では僕の守護天使じゃんか）と、不満タラタラの声を上げていたのである。

だがアルビレートは、またマルレリスに殴られるのが本気で嫌だったから、それを口にださず、仕方なく頭をボリボリと搔いて口をつぐむしかなかった。

アルビレートはその時、その仕打ちに我慢の姿勢を見せると、何か疲れた様な顔をして、内心では、不本意な胸の内の心の心情を下腹の奥に仕舞って、仕方なく耐えてみせるのであった。

そう、マルレリスに殴られた痛みを、ジクジクと堪えて我慢する様にである。

だが、

「おお、アルビレートよ、こんな所にいたのか？　ワシはあちこち探してしまったぞ、駄目じゃないか、今日のパーティーの主役がこんなところで暇つぶししていちゃ。もうパーティーの準備は整って、みんなお前の登場を待っているんじゃないぞ。ワシも今日は、こんな服着せられて、このパーティーでもてなしを受けなければならんのじゃ。だから早くこっちへ来て、ワシと学長のもとに行くのじゃ。こんなところで遊んでいる暇はないのじゃぞ！」

だが、アルビレートがメルヴィーやマルレリスに遊ばれていると、そんな所に突然、聞き覚えのある老人の声が後から聞こえたので、それに驚いてアルビレートはレリルとともに後を振り向いた。

するとそこには、真新しいタキシードを着た老人ヒュールが立っていたのである。

彼ヒュールは、どうやらアルビレートのことを探していた様子で、彼は、アルビレートのことを見つけると、そう言って急かす様に声をかけ、迎えに来ていた様子だった。

ヒュールは、新しいタキシードを着て、少し不満げな顔をしていたが、アルビレートの姿を見つけると、早くこの学院の学院長のもとに行くぞと、そう催促をしてきていた。

だからアルビレートは、仕方なしにそのヒュールの意に従っていた。

そしてアルビレートは、講堂の裏を出ると、その後ヒュールと共に、この学院の長である学院長のケルビス・ランカークのもとに、急いでパーティーが開始される前に、一度、段取りを踏むため、彼は学長がいる学院の学院長室に向かって、その場を後にするのである。

そう、もう時期、歓迎のパーティーが始まるのだ。

だからアルビレートは、なんだかんだ思いながらも、そのパーティーが早く始まるのを待っていたのだ。それは何せ、アルビレート・ニケリスの初の晴れ舞台となる、金印賞の授与の栄誉が贈られる、とても誇りある、確かに自分の初めての初舞台でもあったからである。

だからアルビレートは、それを嬉しく思った。

どんなパーティーであれ、そのパーティーは、自分とその師匠であるヒュールを持って成すのだ、だからアルビレートは、それを喜ばしく感じた。

そんな事は、アルビレートには滅多に起こらない、大切な大切なこの学院の最高の催し物であると、そう自覚していたからである。

第四節

そして、その式典パーティーには、多くの人達が招かれていた。

今はすでに退職したマントレス学院代々の学長や学院経営の融資者、それにカーランクルの街の領主や学院に通う生徒の父兄、それに学院の卒業生である。

それらの人々と、学院の生徒達が集まり、講堂では、パーティーが始まり、まず初めに学長の挨拶とともに、今日のパーティーの主役ヒュールとアルビレートが、一同の前に紹介されていた。

学長は、ヒュールをネグリドル・ファビス協会の第一級召喚術師（巡遣使）であると紹介すると、会場のみんなからはどよめきが起こったのである。

「スゲー、協会の第一級召喚術師だってよ、あの爺さん、指輪召喚術師十二賢者の次席の巡遣使じゃんか、そうなるとアルビレートは、その一級召喚術師の弟子じゃん、これって快挙もんだよな・・・」

「ホントそうね、一級召喚術師と云ったら、この国では巡遣使人口の内の一万人に一人といわれる、リングロード・マスターのプロだものね、どうりで昨日レリルお嬢様をアルビレートが負かしたわけよ。アルビレートは、その召喚術師から指輪を継承されたんだものね・・・」

そうヒュールは、実はネグリドル・ファビス協会の巡遣使ランク付けでは、第一位の《アラカル》と呼ばれる階級にいる巡遣使なのだ。

だから、それを聞くと、会場で学長の話聞いていた学院の生徒達は、口々に驚きを表し、今パーティー会場の壇上で紹介を受けているのにも関わらず、人前で鼻クソをほじっているヒュールを見て憧憬するのだった。

そしてその次、学長からのヒュールの紹介がおわると、今度は学長は、アルビレートを一級召喚術師から指輪を継承された学院の期待、と称して紹介すると、また今度は生徒達の間から歓声が沸き起こったのである。

それは、アルビレートを祝する歓声で、生徒達は、アルビレートに称賛をおくっていたのだった。

「いいぞ、アルビレート！」

「かっこいい！」

そして、

その後、ヒュールとアルビレートの紹介も終わると、学長は、アルビレートの金印賞授与をパーティーの最後に行うと言ってから、パーティーの開催を祝していた。

そして、会場に集まる生徒達や他の参加者に「パーティーを楽しんでいて下さい」といって挨拶を終えていた。

その後、立食パーティーが、始まるのである・・・

パーティーが始まると、アルビレートとヒュールは、さっそく会場に招かれた生徒の父兄たちや学院の卒業生たちに取り巻かれ、色々な質問や話をせがまれ、まさにこのパーティーの華として扱われていた。

基本的に、このパーティーは、形式張ったものではなく、ただアルビレートがリングロード・マスターに指輪を継承された事を祝する会であるため、ある意味、ヒュールに対する歓迎会でもあるのである。だから、この会は自由な形で行われ、みな好き好きにパーティーを楽しむことを許されていた。

カーランクルの習慣では、誰かを祝するときや歓迎するときは、皆で食べて踊ってもてなすというのが通例で、会場に招かれた人々は、それから楽隊の演奏に乗って踊ったり、講堂にずらりと並べられた料理を手にとって堪能していたのである。

そう、どんなパーティーであれ、この会の来賓者は至極パーティーを楽しんでいたのだった。

だがそんな中、そのパーティー会場の片隅では、あのいじめっ子三人組ベレンケスそれにパトン、ゲトルが不機嫌な顔をその顔にのぞかせ、いま多くの人々に取り囲まれて祝されているアルビレートの姿に、怒りの念を燃やしていたのである。

「ようベレンケス、しかしこのパーティーやりすぎじゃねーか？ たかが巡遣使にリングを継承されただけでこんな盛大なパーティー開くなんて、頭おかしいよな。それに、学院生はみんなアルビレートを持ち上げちまって、今じゃ英雄扱いしているしよ、まったく現金だぜ。だから早く、あいつをギャフンといわせてやりてーよな、そう思うだろ・・・」

アルビレートが祝されて、ちやほやされている光景を見て、憎たらしげにそう言葉を吐いたのはゲトル、彼は、その顔をひどく恨めしそうに歪めると「ケッ！！」と悪かれた態度をとっていた。だから、それに同調して、パトンがこう言うのである。

「まったくそうだよな、あのアルビレートの奴いい気になりやがって、今じゃリングロード・マスター気取りでいやがる。そんなに巡遣使から指輪を継承される事がすごいのかね？ 大した事ねーのに・・・」

「そうだよな、まったくあいつ気にいらねーよ、絶対あとでシメてやりてーよ・・・」

パトンとゲトルは、お互い同調すると、アルビレートに対して悪態をついていた。

しかし、

「まあそう言うなよ、どうせあいつは、金印賞授与の時、俺がこの破壊の水晶球でそれを打ち壊してやるんだ。だから、それまではあいつは賞を授与されると思って浮かれているだけだぜ。でもな、その後はこのパーティーはメチャクチャになって、それでお開きさ。だから、あいつに、少しだけ今はいい思いさせてやればいいんだ、その後はどん底だからな、イヒヒヒヒ・・・」

そこでベレンケスは、いやらしく笑うのである。

「はは、そうだよなベレンケス、確かに今だけはいい思いさせておけばいいか、どうせあいつはこのあと泣きっ面なんだもんな。いい思いさせておいたほうが、そのあとの落胆も大きいし、俺たちの気持ちもスツとするもんな。だから気に入らねーけど、このままその時を待つか、あいつの驚く顔が見て一もんな・・・」

「そうだな、それがいいよな・・・」

だからパトンとゲトルも、ベレンケスの言葉に同意したのである。

一方、あのいじめっ子三人組が、そんな話をしているとは知らずに、未だにヒュールとともに、来賓の人々から取り巻かれ称賛を受けているアルビレートは、今は幸せな気分を満喫していた。

それは、とりもなおさず、この会場に集った人々に「指輪の継承おめでとう！」とか「よくやったね」等といわれ、褒めたたえられているからである。だからアルビレートは、それが嬉しくて、顔がゆるみっぱなしであったのである。

なぜなら、彼は、この方、人に誉められたり、好意をもたれたりした事があまりない境遇の少年であったから、今日これほどまでに、多くの人々が称賛してくれる事に、喜びを感じていたのである。彼アルビレートは、人に疎まれたり蔑まされたりはしてきたが、このような歓迎をされる事は稀であったからだ。その為、今では至福の絶頂をまるで受けているかのごとき気分を味わっていたのである。

そう、これこそ彼には、極楽なのだ。

思い起こせば、約八日前までは、劣等生のレッテルを貼られ蔑まされていた。

そして、ベレンケスやその他の生徒達にもいじめられ、馬鹿にされていたのである。

だが今では他の生徒達は、うって変わってアルビレートを友好的に見てくれる様になった。

この事は、とりもなおさずヒュールに指輪の継承という好運を受けて、因らずも自分がこの学院一番のリングロードになれたからである。

だから、そうである以上、彼に感謝するしかなかった。

いわばヒュールは、ひ弱だった自分にとって、まるで救世主のように自分に力をもたらしてくれた恩人なのである。

だから、その彼に、アルビレートは恩返しをしなければならなかった。

「あのーヒュールさん、ありがと。僕こんなに今日、嬉しいのは初めてだよ。ヒュールさんが、僕を指輪の継承者としてくれたから、僕は、こんなに歓迎されたんだ。だから何もかもヒュールさんのおかげだね。僕あなたの弟子になれて、ホント嬉しいよ」

そう、だからアルビレートは、その後ヒュールとともに人々の取り巻きから、一時、

距離を保ち会場の壁ぎわに移動すると、そこで彼に対してお礼の言葉を述べていたのである。

それは、アルビレートが、みんなに祝されることになったお礼でもあるし、指輪を譲渡してくれて何かと指導もしてくれた事に対する感謝でもある。

ヒュールは、昨日までの七日間だけで、自分に抱えきれない程の多大な恩義を授けてくれた、それが何よりの宝であると感じたからだ。

だから、アルビレートは、言うのである「全ては、ヒュールさんのおかげだよ」と・・

そう、それがアルビレートの本音であり、本心だった。

「そうか、アルビレート、でもワシも嬉しいよ。イジメられっ子だったお前さんが、みんなに称賛を浴びて歓迎される事は、その師匠となったワシの誇りでもあるからの。だから、これからも、ワシの良き弟子でいてくれよ。あと半年は、お前さんの傍で色々教えてやる事があるからの、お前はワシの良き後継者なのじゃよ・・」

その為ヒュールも、アルビレートにそう言って微笑むのだった。

可愛い、愛弟子の彼を見つめて・・

*

パーティーはその後、いよいよアルビレートに対する、金印賞授与の贈呈式にその場面を移そうとしていた。

今その会場では、壇上にこの学院の学長が登壇し、贈呈式前のスピーチを始めているところである。

そのスピーチがおわると、さっそくアルビレートに対して、栄誉が授与される事になる。

その為、会場に集まる人々は、そのスピーチを関心の目で見ている。

そして・・

そのスピーチの終了と同時に、いよいよアルビレートに対して金印賞の授与が行われる。

金印賞とは、学院の象徴である、クリスタル製の宝冠を授ける事である。

この宝冠は、学院の功名に寄与した生徒に授与されるべく、大事に学院長室の書棚の上に飾られていたものだ。

それを金印賞としてアルビレートに授け、学院の栄誉として祝するのだ。

だからアルビレートは、その授与にあたり、その身を厳粛に力ませ、今その栄冠を受け取るべく、学長に呼ばれ壇上に登壇していくのだった。

「それではお集まりの一同、これから、わが学院の期待となるべく、巡遣使ヒュール殿に指輪の継承を受けた、このアルビレート・ニケリス君に、金印賞の授与を行いたいと思います・・」

アルビレートが会場の授与式用に用意された壇上に登壇すると、その時、学院長ケルビス・ランカークが、彼に宝冠を授与すべく、一同の前で、そう高らかと宣言し教頭より宝冠を受け取っていた。

そして、それを壇上に登壇したアルビレートの頭に戴与するのだが、そこで会場に集まる生徒達や来賓は、その光景を期待の目を輝かせ見守ったのである。

学長が手にしていたクリスタルの宝冠が、一つの破壊の精霊の体当たりを受けて、砕け散る光景を・・・

そう、アルビレートに授与されるはずの宝冠が、彼の目の前で、バギャンと砕け散ったのである。

「あっ！ 僕の宝冠が・・・」

だからアルビレートは、絶句した。

自分が受ける筈だった栄誉の象徴が、無残にも打ち砕かれた。

その光景をまのあたりにして、彼は、至極、呆然としたのである。

「そんな・・・」

そう、こうしてアルビレートの金印賞授与の式典は、メチャクチャになっていたのである。

そして・・・

その会場が、パニックに陥っていた光景を見ながら、ほくそ笑んでいた三人の少年たちが、会場の片隅でそれを傍観していた。

彼らは、逃げ惑う来賓達を嘲笑うと、満足気にほくそ笑んでいた。

そして、今や壇上で砕け散った宝冠をまのあたりにして、この世の終わりのごとく絶句しているアルビレートの姿を見て、これ見よがしに腹を抱えて笑っていたのである。

その顔は、全てを台無しにしてやったという、意気揚揚とした悪戯れた観が満面にあらわれていた。そう彼らは、アルビレートを再びへこませて、貶めてやることに成功していたのである。

だから彼らは口々に、

「ざまーみろアルビレート、これでお前の栄冠なんかなくなったんだ、図に乗るなよ！」

とか、

「そうだ、お前に学院の栄誉は、似合わねーんだよ・・・」

などと、あからさまに、その彼をなぶる言葉を密かに投げ掛けていたのだった。

そしてベレンケスは、「馬鹿だなアルビレート、お前がみんなの祝福を受けられる訳がねーんだよ・・・ふん！」

そう、そこで意地悪げに、全てを台無しにしてやったその光景を見て、満足気に鼻を鳴らしていたのだった。

だが・・・

「この仕業は、あなた達ね！？ 私は、さっきから貴方たちが、破壊の水晶球をこの式典の会場に投げ込んだ所を、この目でしっかりと見ていたんですからね。だから言い逃れできないんだから、この責任は貴方たちにしっかりととってもらうから覚悟しなさいよ！ アルビレートの、晴れの舞台をぶち壊しにした償いはさせてあげるんですからね・・・！」

そう、ベレンケス等が、式典のメチャクチャになった光景を見てほくそ笑んでいると、その時、彼らの後から、あのレリル・マスタールが現れると、彼らの会話を聞いて、その仕業をいい咎めていたのであった。

レリルは、実は丁度、式典が始まり、アルビレートに宝冠が授与される時、その光

景を見ながらも、ベレンケスはその会場に破壊の水晶球を投げ込んだ所を密かに目撃していたのだ。

だからレリルは、そのベレンケスたちを非難すると、彼らを引っ掴まえてそのまま学長のもとに引きずり出していたのである。

そして彼らに、この騒ぎの悪行的、責任の重要性を問うていたのだった。

第五節

「君たちは、今日、何をしたか判っているのかい！？ 君たちは、大事な学院の催しを台無しにしてくれたんだからね、その責任は取ってもらうよ！ まったく、せっかくの金印賞授与がメチャクチャになってしまったんだからね、その事の重大さが判っているのかい！？」

いま学院の学院長ケルビス・ランカークは、学院の学院長室で三人の少年を呼び寄せ、怒りの面持ちを浮かべながら、そう言ってわき起こる怒りを抑え声を少し荒らげる姿が垣間見えた。

学長の執務机の前に立たされて不貞腐れた顔を浮かべていたのは、ベレンケス、パトン、そしてゲトルの三人であった。

その三人がいま、学長にお叱りを受けて、先程のそのメチャクチャ騒ぎの責任を問われているのであった。

「まったく君たちはどうしてくれるのだい！？ 君たちが投げ込んだ破壊の水晶球のおかげで、式典はメチャクチャになり、アルビレート君に授与されるはずだった宝冠も粉々に砕け、パーティーに参加してくれた授与式の来賓方は、仕方なく帰ってしまったんだからね。この始末をどうつけてくれるというのだい！？ ベレンケス君、これは何もかも君が仕組んだことなのだろ？ これはちょっと悪質で度が過ぎているのでは無いかね！」

そして、ベレンケス等が不貞腐れる中、学長は怒りを堪えつつ、そう彼らに問い掛けて、その三人の所業に対する彼等への重い責任を問うていた。

だが・・・

「しかしあのですね学長、これは全てアルビレートとレリル・マスタールがいけないんです。あいつ等がおれたちに対して、リングロードの力を使ったりしなければ、俺たちは別に今日の式典をメチャメチャにしなかったですよ。あいつ等は、校則を破って、俺達に街中で指輪の力を使ったんですからね、責任を問うならあいつ等だけにして下さいよ！」

だが、ベレンケスは、そう言って学長に食い下がりつつ、自分たちに責任はないとそう責任転嫁をして、不満の体を顕わにして見せていた。

「そうですよ学長、何もかもあいつ等がいけないんだよ。俺達はこの前レリルのエンレースの電撃を食らって、真っ黒焦げにされたんですからね、仕返しして当然ですよ。俺たちだって、黙ってはいられないんです。ベレンケスの言う通り、アルビレートとレリル・マスタールが悪いんです、あいつ等がいけないんですよ正直な話・・・」

そして、そのベレンケスにつづき、その時パトンもそう言って鼻息を荒くして、また不貞腐れたような態度をそこで学長に見せていたのだ。

しかし、

「君たちは何を言っているんだい、まさか君たちはレリル・マスタール君が学院の校則を破って、不用意にリングロードの力を君たちに使ったというのかい？ もしそうだとしても、君たちが彼女たちに何かしたからそうなったのじゃないのかい？ 私はね、君たちの日頃の悪い噂を聞いているんだよ、君たちはアルビレート君を無下にイジメているのだとね・・・」

すると、学院長ケルビスは、言い訳がましい口答えをするベレンケス等を見て、渋い顔をそこに浮かべて見せていた。

学院長は、ベレンケス達三人を見ると、その事の真偽を求むように厳しい顔を見せ、言い訳がましい言葉を吐くベレンケス達を見据え「まったく」と言うような呆れたような態度で、わき起こる怒りを極力抑えつつ、彼らの言い分を聞いて真剣な顔をそこに見せていた。

ケルビスは、ベレンケス達を見据えると、言い訳をする彼らの言い分を聞いて、その言い分がホントか嘘か彼らを射貫くように見て事の真偽を疑問視して見せていたのだ。

すると、

「いいえ違いますよ学院長、それはただの噂だけで、俺達は何も悪くないんです。悪いのはアルビレートとレリル・マスタール達なんですよ。あいつ等は、噂とは逆に、俺達にいつも因縁を付けて何かと嫌がらせをしてくるんです。だから俺達は、その報復で式典をメチャクチャにしてやったんだから、罰するならあいつ等を罰して下さいよ。俺達の方が被害者なんですから、あいつ等の悪意には困っているんですよ・・・」

するとベレンケスは、この場にきて、本当の事実とはまるで嘘の弁明を学長に言上して、知らぬ素振りの顔をして見せていた。

ベレンケスは、学長に平気で嘘をまくし立てると、やはり鼻息を荒くして学長の言葉に食い下がり、何とかして自分たちの責任をそこで言い逃れしようと、デタラメな言い分をそこで学院長に話して明らかな嘘の弁明をして見せていた。

「う～む？」

だからこの学院の学長は、やはり渋い顔をして頭を抱える。

そして、ベレンケスの言い分がホントか嘘かの判断に、至極、困った顔の表情をそこで見せて、彼らに対する責任追及の矛先に迷う顔の体を表し、彼らの嘘の言い訳を聞いて、これをどうすれば良いかの判断を、そこで苦慮するような態度をその後、困惑するかのようにして示して見せていた。

ベレンケス達は、果たして本当のことを言っているのか、学長はそこでその真偽の解

明に迷うような思いを抱いて、仕方無さそうに考えあぐねていたのである。

そして、

「あのねベレンケス君、たとえ君の言うことが本当だとしても、学院の催しをメチャメチャにした事は、それだけで懲罰ものなのだからね、それを忘れてもらっては困るのだよ。学院は、規則で成り立っているのだから、みんなみんなでその規則を破ることは良くない。学院の規則は、守るためにあるのだよ、だから君たち三人にも非があることは認めるべきだね。君の言うところの事の実事関係は、まだ私には実際、懐疑的に映るからね・・・」

だが、そうして学院長ケルビスは、兎に角ベレンケスを睨むと、そう言って彼ら三人の生徒を本気で怒って窘めて見せていた。

しかし、

「学院長それならば言いますけど、この学院の経営を支えているのは誰だか知っているんですか？ この学院に一番、経営資金を融通しているのは、ウチの爺さんのレッタ・バクニスクなんです。それを考えると、俺たちに厳罰を与えるなんて出来ないでしょ？

その事をどう思っているんですか？ まさか、その現実を無視する心算はないですよ？ ウチの爺さんが、一番この学院の経営に貢献している事を忘れないでいて下さいよ」

しかし、するとベレンケスは、ここにきて自分の祖父の名を持ち出して、学長に弱みを握る作戦に出ていた。

そう実際、ベレンケスの言うことは本当のことなのだ。

このマントレス学院に、一番資金提供をしてその学院の経営を支えているのは、確かにそのベレンケスの祖父レッタ・バクニスクであることには間違いはなかったのである。

だが、

「う～ん？ 確かにそうだけどね・・・」

だからその為、学院長はそのベレンケスの言葉に困惑した。

実は、ベレンケスの言うとおりに、彼の祖父レッタ・バクニスクは、この学院の経営を助けるために、自らの財産からこの学院に多額の経営資金を融資して、その学院の経営財政を援助している立場にあるのだ。だから学院長は、ベレンケスが今日の学院の金印賞授与の式典をメチャメチャにしても、それに対して強く彼を罰することはなかなか出来なかったのだ。

だから、その話をもちだされると、学長もある意味、立場が弱かった。

学院長ケルビスは、椅子に腰掛けながらベレンケス達に困惑的な眼差しを向けると、至極、迷惑気味に次にはこう言うしか出来なかった。

「それならばベレンケス君、君はどうしたらいいというんだね。確かに君はレッタ氏の血族の者だが、確かにウチの学院としては君の祖父には多額の経営資金を援助してもらっている。だけどね、このまま君に何の罰も与えず罰をご赦免にする事も、私は学院長として出来ないんだよ。だから、それなりに処分しないといけない。君の祖父に受けている恩もあるが、このまま何も無しとはさすがにいかないのだよ。つまり学院にも、学院側の規則と都合というモノがあるのだから・・・」

だが、学院長ケルビスは、そのベレンケスにそう言うと、複雑な眼差しを送って、そ

の声にうなりの様な音を漏らしていた。

彼も立場上、苦悩し苦慮していたのである。

だからこの学院の学院長ケルビスは、さすがに困ってベレンケス達三人の処分をどうするか、本気で迷う事となっていたのである。

すると、

「それなら学長、俺達に罰を与える前に、その罰をご赦免にしてもらえるチャンスを与えて下さい。おれ達は、アルビレートやレリル・マスタールに少なからぬ因縁があるんだ。だから明後日、彼等とこの学院の修業グラウンドで、法陣合わせ試合の果たし合いがしたいんだ。俺たちは何も悪くない、だから俺とこのパトン、ゲトルがチームを組んで、アルビレートとレリルのチームと遺恨試合をさせて欲しいんです。そしておれ達はその試合に勝ったら、レリルたちに街中でリングロードの力を使った罰を与えて、俺たちが負けたら、今日、式典をメチャメチャにしたことの罰をおれ達は甘んじて受けますよ。だから、その遺恨試合の開催を認めて下さい。この学院の特別規則では、学院内で生徒達の余りにも手に負えないいざこざがあった場合、その因縁は潔く法陣合わせの勝負で決着をつけようという変則的な決まりがあるでしょ？ だから、あいつ等と対決させて下さいよ。そうすれば、俺は罰を受けることを甘んじて受けて納得しますから・・・」

だが、そのベレンケスは、学院長ケルビスにそう言うと、自分が罰を受けるための条件を提示して見せていた。

ベレンケスは、冗談では無く、本気でその学長にそう願い出ていた。

実際、事の真偽は、まだ学院長のケルビスには、本気で判らぬままの状況ではあったのだが・・・

「う～ん・・・」

だから、ケルビスは苦悩する。

そして彼は、そのベレンケスの要求に対する答えを出す事を、特に迫られる格好にもなっていたのである。

すると、

「う～む・・・そうか、じゃよし、では其れならば判ったベレンケス君、それなら仕方なくそうするしかないのかもしれないね？ 君達にも問題があるが、アルビレート君やレリル君にも何かしらの問題があるらしい。だから、それならばその君の要求する願いを聞き届けよう。確かに君達の言う事の真偽の問題も、今回のことに絡んでややこしい事情がある様だからね。だからそうするよりもうどうしようも無いね」

だから、学院長ケルビスは、そのベレンケスの話を聞くと、しばらく苦悶した結果、仕方なさにそれに納得を示し、遺恨試合の開催をそこで認めざるおえない考えに至ることになった。

それは、その学院の長として、放っておけない、この学校の複雑な諸問題であったからだ。

だから、

だから翌日、学院には、ある学院長の学長令を書したはり紙が貼り出される事になるのである。実際ベレンケス・バクニスクが望んだ、意図的な彼の思惑通りになっての事だった。

第六節

金印賞授与の式典が散々な結果に終わった翌日、マントレス学院では、朝早くから学院に登校した生徒達によって、ある教員室の壁に貼り出された学長令に注目が移っていた。その教員室に貼り出されたはり紙には、しかして、こう書かれていたのである。

『この下記の者、校則違反者により学院長から罰則を与う・・・』

レリル・マスタール、そしてアルビレート・ニケリス、この者は街中で不用意にリングロードの力を使用した事により、その校則違反を重く問いて罰則を与える。

しかして、レリル・マスタールは、この街の高名なビオル・マスタール家の子息の令嬢にして、学院の首席優等生なれば、その立場を考慮に入れて、厳罰はご赦免とする。

しかし、このレリル・マスタール、およびアルビレート・ニケリスは、街中でベレンケス・バクニスクやパトン・コンクラートおよびゲトル・ビンテール等に対し、守護天使の召喚によりて電撃による無用の加害を加えた事により、その両者の対立的な因縁を絶つべく、学長令として、レリル・マスタール、アルビレート・ニケリス対、ベレンケス・バクニスク、パトン・コンクラート、ゲトル・ビンテール等三人との遺恨試合（複合法陣合わせ）を明日、正午より開催する。

して、この遺恨試合に負けた側の生徒には、一週間の懲罰房入りと、その後、半月間の出校停止、及び自宅謹慎を言い渡すなり・・・』

学院長令発布者：ケルビス・ランカーク

そう、この学長令には、レリルやアルビレートに対する、街中での守護天使召喚の校則違反を問う文面や、アルビレート、それにレリルとベレンケス、パトン、ゲトル等の対立的因縁を晴らすための、遺恨試合を開催するという旨が告知されていたのだ。

その為、その学長令を見た生徒達は、「えーっ！？ 果たし合いだってよ」とか「アルビレートとレリルが、ベレンケス達と戦うんだってよっ！」等とあって、教員室の壁に貼りだされた学長令を見て騒ぎ立てていたのである。

「どうしたの、みんな騒いで？」

そして、そこへレリル・マスターとアルビレートも学院に登校して、そのはり紙を目にする事になるのである。

そして「えーっ！！ これってどう言うことよ!？」

そして、それを目にしたレリルは、アルビレートとともに目を丸くしていた。

遺恨試合とは、一体、何事だ？

一体、どういう話の筋でこうなったのかと、彼等は、それを疑問に感じたのが事実なのであったからだ。

第七節

「学長、これはどう言う事なのですか!？ 私たちが、明日ベレンケス達と遺恨試合をしなければならぬなんて、納得がいきませんよ！ 学長は一体、何を考えているのですか!？ 私達には何もベレンケス達に、まったく遺恨などある筈は無いのに・・・」

そして朝、学院長令が貼り出されてその後、いま学院長室でケルビスにそう不満の声をもらしていたのは、レリル・マスターだった。彼女は、執務机で難しそうな顔をして座っているケルビスに怪訝な眼差しを向けると、あからさまに異議を唱えて、疑問を呈して見せていた。

そうレリルは、今朝、学院の教員室に貼りだされたその学長令に、懐疑の念を持っていたのである。それは、自分たちがベレンケス等と遺恨試合をして、どうして負ければ罰を与えられなければならないのかという事に対する、何かの作為的な思惑を感じ取っていたからであった。

多分、学院長はベレンケスに、巧みに丸め込まれたのではないかと、その時レリル・マスターはそう思ったのだ。

だからレリルは、いまその学長に不満をもらす。

どうして自分たちがその遺恨試合に負ければ、罰を与えられなければならないのかと、そこで納得できない困惑的な思いを、それに抱いていたのである。

「学長どうなんです、まさか学長はベレンケスに何か弱みを見せられて、彼等を罰することをしなかったのですか？ 彼等は、昨日、大事なアルビレートの宝冠の授与式を、メチャクチャにした張本人なのに、どうして私達が遺恨試合をしなければいけないのです。これは絶対、おかしい話ですよ。私とアルビレートは、一切ベレンケス達に悪さをした訳では無いのですからね、これはまったく納得のいかない話です。私達が、一体何をしたというのですか・・・」

そうだが、そしてレリルは、学院長室の執務机で悩ましげに椅子に腰掛けている学長のケルビスを前にして、その学院長令に、疑問的な思いを感じてそう彼に訴えかけて見せていた。

そうレリルは、彼等ベレンケス達の所業の罪を問わず、遺恨試合を行うなどと、とても合点のいかないナンセンスな学長の判断を、逆に言い咎めたくて仕方が無かった。

だからレリルは、学院長に怒りの眼差しを向けてその彼の思惑が、一体、何故にそうなったのかと問いただし、事の真偽がどうなのかを、見極めてみたいともそう思ったのである。

だが、

「あのねマスタール君、君の言うとおりのベレンケス君は確かに、昨日、学院の大事な催しを台無しにしてくれた。だが君もマスタール家の御子息の令嬢なら知っているように、彼ベレンケス君は、この学院に多大な経営資金の融資をして、それを以て学院の経営に寄与してくれている、レッタ・バクニスク氏の孫にあたる生徒なんだ。だから、その彼を私どもとしても不用意に厳罰処分にする事は、とても出来なかったんだよ。だから、その立場の苦しさを判ってもらえないかね？ 君も一応、バクニスク家と同じ巡遣使の名家の子女なのだから、私の立場の苦悩も解るだろう？ 何かと君たちには悪いが、ベレンケス君達の望みを受け入れて、仕方なく今回、明日、君たちとベレンケス君達の遺恨試合を開催する事に決めたんだ。だから、それには済まないが、体良く納得することを認めてはくれないかね。私としても、今回のことにおいては、その立場上、至極、苦慮しているんだ。ベレンケス君の祖父には、兎に角この学院としては多大の融通を受けている側に位置して、それ相応の感謝をしなければならない立場にあるのだから・・・」

だが、するとケルビスは、そう言ってレリルの不満をおさえ、学院側の立つ瀬の立場も解ってくれと率直にその様なことを言っていた。

ケルビスは、レリルに対して苦悩したその顔を見せると、次にはその不満を漏らして学院長室に押し掛けて来たそのレリル・マスタールに対して、学院側の立場の立つ瀬の辛さをあかして、遺恨試合の開催を認める覚悟をしてくれとそう言っていた。

学院長ケルビスは、遺恨試合の開催を否定的に疑問視する目の前のレリルに、そう言って決断の程を促し、決定の意向を見せる事になっていたのである。

実際、この遺恨試合は、ある意味もともと彼女レリルの軽率な所業が災いして、生じてしまった問題事でもあったのは、確かな事なのでもあるからだ。

だから、

「あのねレリル君、君は、ベレンケス君の話によると、この前、街中で軽率にも指輪の力を解放して、彼らに電撃を仕掛け、手酷い攻撃をしたという事じゃないか？ それを考えると、君は学院の厳格な校則を破って、不用意にベレンケス君たちに加害を加えたという事になる。だから、君にも罰を与えなければならない状況にあるのだよ。しかし君は、マスタール家の子息の令嬢だから、私としてもなるべく重い厳罰を与えるのは避けたい。その為、なぜ君とアルビレート君が、ベレンケス君等三人ともめているか知らないが、ベレンケス君の要望もあるように、今回の式典妨害問題や君が校則を破って街中でリングロードの力を使った件は、この学院の特別規則で、遺恨試合の敗者にそれなりの罰を与え、勝者にはその罰をご赦免にすることに決めたんだ。だから結局、昨日の式典

がメチャメチャになってしまったのは、君とアルビレート君が、ベレンケス君等と何かともめ事を起こした結果だから、その因縁を絶つために、明日の法陣合わせの試合は必要なことになったのだよ。だから不満もあるかもしれないが、納得してくれないかね？

私も、立場上、苦慮しての事なのだから、それを良く君には理解してもらいたいのだよ。私としても、至極、迷った上での判断なのだからね・・・」

そう、ケルビスは、そう言うと、自分の顎のヒゲをしごいて、目の前のレリルを見据えてみた。学院長は、レリルを見据えると、とても申し訳なさそうな顔の表情をそこで見せ、今回の取り決め事は、仕方の無い事だとそう言っていた。

学院長ケルビスは、レリルが思うに、確実に昨日ベレンケス達にやはり仕方なく丸め込まれたと、そう思うことが出来ていたのだ。

レリルは、ベレンケスが学長にでたらめな言い訳をし、話をすり替え、遺恨試合などと言うとても納得のいかない問題の解決法を、何かの弱みを握り、それを開催させるように仕向けたのだと言うことが、学院長の話を知ると、それが如実に解ることが出来ていたからだ。

学長は、どうやら、ベレンケス達に嘘を吹き込まれ、仕方なく遺恨試合などと言う馬鹿げた試合を催すことを、受け入れさせられたのだとそう思った。

なぜなら、ケルビスという学長は、公正な判断で、学院内にときたま起こる問題を解決する賢哲漢として知られている人物なのだ。

その彼が、いま立場上の苦慮を示唆しているという事は、仕方なしに、明日、処罰の問題を賭けた、法陣合わせの試合を行うと、そんな学長令を發布してしまった事に、それが学長の元々の本意ではないという事を、それは暗に意味しているのであるとそう思えたのである。

だからレリルは、ベレンケス達が、きっと根も葉もない嘘を並べ立て、学院長に遺恨試合などを催す様に画策したのだとそう思った。

学長は、そのベレンケスに、確実に言いくるめられたのだろう。

だからレリルは、その学長の立場の程は仕方なく解った。

しかし、だとしても、彼女レリルには、まだそれに対する納得がいかない思いがあったのである。自分たちは、本気で正当にベレンケス達の間違いを正すために、この前、街中で自分の守護天使の力を、使わざるおえない状況になったと言う事実があるからだった。

だから、

「あのですね学長、ベレンケス達が何を学長に言ったか知らないですけど、私たちは別に、何もやましい事の為に、街中でリングロードの力を使ったのではないのですから、その事を間違えないでいて下さい。事の全ては、あのベレンケス達が悪いんです。あのベレンケス達は、アルビレートのことを手酷くイジメていたのですから、私はその為に街中でリングロードの力を使う羽目になったのです。だから、私達に何も非はある筈がないんです。全ては、あのベレンケス達の、悪意に問題が確実にあるのですから・・・」

そう、レリルはそう言うと、学長に自分はしっかりとした理由があって、リングロードの力を使ったのだと主張していた。

レリルは、その自分の言い分に自信があった。

確実に非があるのは、明らかにベレンケス達の方で、その彼等の意地悪い悪意が、今回

の全ての問題の元凶だということを、学院長ケルビスには解ってもらいたいとそう願っていた。

レリルは、本心では、それをもっと詳細に学院長に言いたい気分であったのである。

悪いのは、全てあのベレンケス達、三人組であるのだと・・・

だが、

「あのねレリル君、でも君たちにどんな理由があれ、街中でリングロードの力を使うのは、決していいことじゃない。学院の規則は、絶対、守るべき厳格な法なんだ。だから、とにかく君たちは、明日ベレンケス君等が望んだ遺恨試合を、正々堂々と受けて、それに勝利し、君たちが彼らとの間に生じているわだかまりを除去したあとで、改めてそのいい分を聞こうと思う。だからレリル君、君たちは、正々堂々とベレンケス君達との法陣合わせの遺恨試合を、明日それに対して挑んでくれたまえ。そして、その勝負に勝てば、君たちレリル君とアルビレート君の校則違反の罰則はご赦免に出来る。だから、君たちの頑張り次第だ、今回の諸問題は、それで全てきれいさっぱり解決出来る筈だと、そう思うからね・・・」

だが、学院長ケルビスは、そうレリルが主張しても、明日のベレンケス達との遺恨試合を、取り消すことは、なんとしても認めることは無かった。

ケルビスは、やはりベレンケス達に、それといった弱みを握られているのだ。

だからレリルは、仕方なく、その条件を受け入れる姿勢を、何か怒りの念を交えて、兎に角、認めざるおえなかったのである。

しかし、学長が昨日ベレンケスに、何か弱みとなる様なことを言われ、言いくるめられたのは明白で、明日、彼らとの遺恨試合を、アルビレートとともに自分が行なわせられる事を仕向けたのは、結局ベレンケスの悪意的な対抗意識が、自分たちに向けられていたのを、学長が苦惱的にそれを暗に承諾してしまったことの表れであり、学長の今の困った態度を読み取れば、明らかにそれを察することが出来たのだった。

そう、学長としても、それは本意ではなかった筈だ。

だがレリルは、その時、ベレンケスが今後アルビレートに対して、敵意を抱くその思いを挫くには、明日の遺恨試合に勝って、徹底的に彼らを叩きのめし、その鼻っ柱をへし折ってやらねば、決して解決できないその彼等の質の悪い性癖なのだと思います、これをいい機会に、彼らに目に物を見せてやろうという思いがわき起こっていたのだ。

そうそれは、自分の好きなアルビレートの為でもあり、自分の為でもあるからだ。

だから、そうして翌日、その遺恨試合は定告通り、この学院の修業グラウンドで行われる事になった。そして、その遺恨試合は、ある意味、仇敵同士の果たし合いでもあるかのような様相も、そこに感じられることが出来てきた。

兎も角、この学院の規則に則って行われる、遺恨試合の正式な決闘なのではあるのだがだった。

第四章 対決！ アンクレック対エミュルタール

第一節

遺恨試合の当日、その日は快清の晴れだった。

マントレス学院の建物は、燦々とした太陽の日に照らされ、丘陵地の岡の上に壮麗と栄え映り輝き、その建物の景観を遠い彼方から普通に見ても容易に一望することが出来ていた。

その中で、学院の修業グラウンドでは生徒達が集まり、ベレンケス等とアルビレート達の遺恨試合が行われる時間を待っていた。

今の時間は正午少し前、天頂に太陽（アドナル）がさしかかる直前である。

生徒達は、遺恨試合の行われるグラウンドの一角に、思い思い観戦の席を構えると、今日の見もの的、果たし合いを見物しようと、事前の噂話に興じていた。

生徒達は、レリルとアルビレート、そしてベレンケス、パトン、それにゲトル等が対戦して、果たしてどちらが勝つか、色々とその勝敗の行方を論じていたのである。

生徒達の評判では、レリルとアルビレートが勝つほうに七割の賛同者、そしてベレンケス等が勝つ方に三割の賛同者が出て、その話題で盛り上がっていた。

そして、その観戦者のなかに、今日、特別に呼ばれていたヒュールの姿も垣間見えていた。

ヒュールは、生徒達とともにグラウンドの一角に腰を下ろすと、やれやれといった顔をして試合が始まるのを待っていた。

「まったく、まだアルビレートの継承の儀式が後に残されているというのに、こんな時に遺恨試合とは困ったものだな。早く第二の継承の儀式の完了の手続きをせにやならんのに、こんな遺恨だのという下らない試合にはかまけてはおれんのじゃ・・・」

そしてヒュールは、そんな事を、独り言のようにぼやいていたのである。

ヒュールは実は、この今日、行われる法陣合わせに、アルビレートがまだ継承の手続き完了前に仮に譲渡されたミュルルたちのリングを使って参戦することに、実を言うと反対だったのだ。正直な話、約九日前、継承の儀式をしてアルビレートに三つの指輪を譲渡したのは、ある意味、まだまだ完璧ではないのである。

だから、本来なら継承の第二段階を明日辺り行って、全ての手続きを完了しておきたかったのだ。

しかし、一昨日の金印賞授与式のメチャクチャ騒ぎから事態がこんなことに発展して、その事の成り行きに苦慮していたのである。

だが、アルビレートは、自分の弟子であると同時に、この学院の生徒である以上、学校の取り決めたこの試合に強制的に出なければならない。

その為ヒュールは、何事も起こらなければいいとそう思うのだった。
ヒュールが心配しているのは、実を言うと、メルヴィーのことなのである。
アルビレートには、まだ、メルヴィーを使役する訓練は施していない。
だから、今日の試合で、アルビレートがもしメルヴィーの守護天使の力を使わなければならぬ状況にならなければいいなど、それだけを願うのだった。
そうヒュールには、メルヴィーの守護天使としての力を使われては非常に困る問題を抱えて、隠していたのである。
そう、いやメルヴィーの守護天使の力を、まだ実際、使おうとしてはいけないのである。
それというのは・・・
しかし、そんなことは兎も角、試合はまだ始まりを迎えない。
その為、その苛立ちの中でヒュールは、仕方なしに、そこで大きな溜め息を漏らしてしまうのであった。

*

その頃、アルビレートたちは学院長に呼ばれ、もうすぐ行われる複合法陣合わせの試合ルールを聞く事になっていた。

複合法陣合わせとは、一対一の法陣合わせではなく、二人以上のリングロードが力を合わせてやはり対局者となる複数のリングロードと法陣を合わせる試合形式のことである。

だから、複数対複数の法陣合わせである以上、その戦いはルールを決めて行わなければメチャメチャになってしまう可能性がある。

だから、学長からのルールの説明は、この試合にとってとても重要な事前の確認事項だった。

このルールを聞かなければ、何かの問題が起こる可能性が何かしかあるのである。

「それではルールを説明するよ、よく聞いておくれ」

その為、学長は、アルビレート、レリル、ベレンケス、パトンそれにゲトルを教員室の前に集めると、さっそくルールの説明を始めていた。

だが、
「どうしたのアルビレート、ルールをちゃんと聞かなくちゃダメじゃない」

その学長が、ルールの説明を始めてしばらくすると、アルビレートは、そのルール説明をよそに、その挙動をおろおろとさせ始めたのだ。

その為、それに気付いたレリルが、その彼アルビレートを窘める。

しかしアルビレートは、しきりに自分の左横を気にすると、首をすくめて怯えた態度を示すのであった。

実はアルビレートは、このルール説明のなか、左隣で同じくルール説明を聞いているベレンケスに睨まれて威嚇されていたのだ。

だから、それに怯えてアルビレートは、困惑していた。

そう、ベレンケスは、戦いの前にその対抗意識を燃やし、アルビレートにメンチを切っていたのである。そして、「アルビレート覚悟しろよ！」彼ベレンケスは、アルビレート

に近付くと、その耳にボソリとそんな事を耳打ちした。

その為、アルビレートは、その顔に恐ろしさをにじませるベレンケスに怯えて、戦う前から意気消沈でもするかのような様相を見せていた。

しかしそんな中、ルール説明も終わると、さっそく五人は戦いの行われる修業グラウンドへ、足を運ぶことになるのであった。

そして、その中でレリルはアルビレートに『そんなにビクビクしないのアルビレート。どうせベレンケスは喧嘩の腕っ節は強いけど、リング使いとしての実力はそれ程、大したことないのだから、相手が三人だって私とアルビレートが力を合わせれば負ける事になんてなる筈はないわ。だからこの勝負、気楽に戦いましょう、負けて罰を受けるのは、あいつ等なんだから・・・』

そうレリルは、グラウンドに足を運ぶ中、前に行くベレンケス等を尻目に、そんな事をアルビレートに耳打ちして彼を勇気づけようとしていた。

しかしアルビレートは、そう言われても、今まで苛められていたベレンケスに対して、逆らえば何をされるか分からない、という彼に対する恐ろしいイメージが染み着いてしまっていたので、そんなベレンケスに恐れを抱く気持ちはなかなか拭うことが出来なかったのだ。

だから彼は『大丈夫かな？』と、少々、弱気になっていたのである。

だが、負ければ本意な話、なぜだか一週間の懲罰房入りと、半月間の出校停止、及び自宅謹慎が言い渡されるのだ。

その為アルビレートは、ベレンケスを恐れつつも、気を引き締めて試合の場にのぞもうとレリルのその言葉に頷いていた。

そう、確かに自分を威嚇してくるベレンケスに、何時までビビッていても仕方が無いとそう思えたのである。

第二節

試合の行われるグラウンドでは、その後、定刻しておきながら中々行われぬ遺憾試合を待ちながら、生徒達は少々気抜けして皆暇そうにグラウンドに座り込みながら、グダ話に興じていた。時刻はもうとっくに正午を過ぎている、その中で待つことに少しばかりの苛立ちを感じていたヒュールも、いまでは学院の生徒達とともにその話の輪に参加して、高名な巡遣使であるのにもかかわらず、彼らとのグダ話に応じていた。

しかし、そんな中で、それからかれこれして暫くすると、グラウンドには学院の教員達が姿を見せ、試合開始の準備をすすめるべく、生徒達に呼び掛けを行い場所移動を促していた。

グラウンドに集った生徒には、遺恨試合を決められた場所で観戦するようにと、生徒達の人垣を移動させ、試合の行われる場と観戦者との間を分けて、その場の仕切りを作りたかったらしい。

どうやら、いよいよレリルとアルビレート、そしてベレンケスとパトン、ゲトル等の遺恨試合が始まる様相を呈した。

生徒達は、それを察すると、教員の呼び掛けの誘導で場所移動を始め、その教員が定めた観戦席の場に思い思い座り込んで腰を落ち着け、みな各々と試合の見られる観戦の場を確保していった。

すると、
「おお来たぞベレンケスだ、それにアルビレートとレリルもいるぜ。いよいよ今日の試合の主役たちが登場だな・・・」

そう、その試合会場となるグラウンドには、レリルやアルビレートそれにベレンケス等が学長とともにそのグラウンドに姿を見せると、観衆となる生徒達は、そのアルビレート等を見て騒ぐと、ワクワクしながら登場したその五人を見て歓声をあげていた。

そして、
その五人の生徒達の登場とともに、学院長ケルビスがグラウンドの一角に設けられた壇上に登壇すると、そこから眼下を見渡して、徐に生徒達に試合前の挨拶をし始めていた。

「えーっ、それではね、今日、今から定告したとおり、学院長令の実施をこのグラウンドで行いたいと思う。ここに集まった生徒達諸君は、今から行われる遺恨試合を最後まで観戦し、学長令が確かに宣告どおり行われた事の立証人になってもらいたい。それでは試合を早速、始めたいと思う・・・」

そう、そして学長のあいさつは、簡単に終わった。
学院長ケルビスはそう宣言すると、教員達に指示してアルビレートたちを試合の行われるグラウンド中央へと誘導させ、アルビレートとレリル、ベレンケスとパトン、ゲトルに対局して向かい合い、少し離れて試合前の事前準備をする様にと促していた。

その為、両者はその後、少しの間合いをおいて向かい合い、今回の遺恨試合の準備をするようにその場の教員達から指示されて、万全の態勢を整えようと、その都度、教員の意に従っていた。

そして早速、彼等五人は、今回の試合に挑む心の準備をして、その後の教員達の指示を待つ事になるのであった。

だが、この試合のルールはここで説明しておく、基本的に役割分担を以て戦うことが義務付けられている。

それは、アルビレートとレリルのチームは、そのどちらかが防御系の魔法に専念し、そしてもう一人が攻撃系の魔法を専属して担当する。

そして、相手チームのベレンケス等も、アルビレート等と同じように攻撃系の魔法に専念する者と防御系の魔法に専属する役割分担をされ、それで複合法陣合わせの対局を

して戦うのだ。

だが、学長が決めた取り決めでは、アルビレートチームとベレンケスチームの力の差を考慮して、アルビレートとレリルはアルビレートが攻撃を担当し、レリルが防御系魔法を担当、そしてベレンケスチームはベレンケスが攻撃を担当し、パトンとゲトルが二人力を合わせて防御陣を張って相手に対抗する様にと決められていた。

そう、この形式で、戦いが行われる。

そして、基本的に攻撃は前面激突法、つまり正面以外の方向からの攻撃は禁止とされ、前面衝突での力と力のぶつかり合いを前提とされる事にそのルールは先に決められていたのであった。そして、それから勝負の決着方法は、相手の攻撃を担当する生徒に対戦側の生徒の攻撃がヒットし、足元に形成した魔方陣よりその体が数寸でも弾き出されれば負け、その時点で勝敗は決するという決まりなのだ。

だから、各防御系を担当する生徒は、自分たちの攻撃を担当する術者を呪文の詠唱によって防御し、防御陣を張りつづけてその攻撃を担当する術者を守り通さねばならないのであった。

そう、これが今回の複合法陣合わせの基本的なルールなのだ。

だから、そのルールの下に、魔術合戦が行われる。

その為アルビレートたちは、最初に事故防止用の緩衝魔法を相手側に向け、それから対局をこれから行う事になった。

レリルとアルビレート、そしてベレンケスとパトン、ゲトルは、通常の法陣合わせの規定どおり、緩衝魔法を掛け合うため、お互い向かい合った形で自分の守護天使を呼び出すことから始める。まずは、レリルがエンレスを呼び出し自分の足元に魔方陣を形成し、その後、ベレンケス等三人に緩衝魔法の効果を施す。

そして、アルビレートも同じく三人の守護天使を呼び出し召喚し、ベレンケス達三人に緩衝魔法の効果を施そうとする事になるのである。

だが、

だが、そうしてアルビレートが自分の守護天使を指輪から呼び出すと、そこで観衆の生徒達の間から歓声が沸き起こる。それは今、アルビレートが自分の守護天使を二体と一体、一度にそれを指輪から召喚し呼び出して見せていたからだだった。

「いいぞアルビレート。ミュルルにマルレリスそしてチチル、お前の守護天使達はこの学院で一番、最高だぜ・・・！！」

「そうだアルビレート頑張れよ！ 負けるんじゃないぞ！！」

そう、そして観戦者の生徒達は、アルビレートが自分の守護天使を呼び出すと、彼アルビレートとその守護天使、三人に、大きな声援を送って、歓喜的に彼アルビレート達を応援する声を皆が期待の目を以て連呼していた。

そして、その興奮冷めやらぬ暑い熱気が、その修業グラウンド全体に充満して、気温の高まりが上がるかの様に、そのグラウンド全体にその熱気が広がり拡充するのかもしれない様な錯覚さえも感じる様な気がする事がしてきた。そう今ではアルビレートと、その三人の守護天使は、生徒達の注目の的だったのだ。だから生徒達は、アルビレートによって呼び出された三人の守護天使を見ると、声をそろえて「負けるなよ！」と応援して、アルビレートが活躍するのを期待するように、その試合が始まるのを今か今かと

首を長くして待ち望んでいるかの様だったのだ。

そう、そしてアルビレートは、そんな声援を受けながらも自分もレリルに倣って、その後ベレンケス達三人に緩衝魔法の効果を施し、それで相手が怪我を負わない様に魔法の手続きをなるべく手際よくそこで行っていた。

アルビレートは、そうして諸々の手続きを終えると、少しはにかみながら観衆の他の生徒達を恥ずかしげに見ていた。

アルビレートは、実は皆に応援を受けるのが、何だかむず痒い様にそう感じたのだ。

皆に応援され期待されることは、今のアルビレートにとって、とてもいまいち馴染めていない未経験な初めての事なのだ。そして、その観衆の生徒達からの期待の目を受けて、彼はその観衆の生徒達に、好意的に注目を浴びることに少しこそばゆい心地の感覚を覚え、何か凄く照れくさいかの様な戸惑いを至極、感じていたのであった。

だが・・・

すると、そんな手続きが終わると今度は、ベレンケス達が自分の守護天使を召喚し、その自分たちの指輪から各自の使役天使を呼び出す段取りに入る。

ベレンケス達三人は、指輪のはめられた左腕を突き出すと、その後、召喚の呪文の詠唱を口ずさみ、三人各々の天使を指輪の中から呼び出しに取りかかっていた。

『我が守護天使アブリット、私の前に召喚し、その御姿を現せ！』

『我が守護天使ピークス、わが前に顕現せよ！』

『我が守護天使ベレック、その装身を見せ我が使役の力となれ！』

そうそして、ベレンケスとパトン、ゲトルの三人は、自らの頭上にやはり三人の守護天使を召喚し、その三体の雄々しい男の守護天使の勇姿をベレンケス達はその召喚の呪文を短く唱えることで、中空の高みに顕現させる事に成功していた。その三体の守護天使は、何の遅延もなくすみやかに指輪の外に顕現すると、ベレンケス達は、その天使達を自慢げにアルビレートやレリルの前に見せつけ、どうだとばかりにその大きな態度を誇らしげに揺らして見せていた。

「……………」

だが、そこでアルビレートとレリルを含め、観戦者となっている他の生徒達からも、その時、その召喚された守護天使を目の当たりにして、そこで軽い戸惑いが起きたのだ。

ベレンケス達三人の守護天使の風貌が、何時もと違って変だと思えたからだった。「おいちょっと待てよ、ベレンケスとパトン、ゲトルの守護天使って、あんな守護天使だったか？ ビクタンサとマイチート、それにベニクマじゃなかったのかよ！？」

そう、ベレンケス達が呼び出した守護天使は、実は、いつもとは違う様相をした守護天使だったからなのである。

観衆の生徒達の知る限りでは、ベレンケスはビクタンサという天使を守護天使にしていたはず、そしてパトンはマイチート、ゲトルはベニクマである。

だが、いまその三人が呼び出したのは、ベレンケスがアブリット、そしてパトンがピークス、それからゲトルがベレックなのである。

だから、その違和感に、その場にいた生徒達はみな驚いていたのである。

「ちょっと、どういう事なのよベレンケス、あなたの守護天使はビクタンサじゃなかったの？　なんで三人共、見慣れぬ天使を呼び出せたのよ！？」

その為、レリルもそれを不審に思い、ベレンケスに対してそう疑問げに問い掛けていた。

レリルが知る限りでは、確かにベレンケスは「背徳のビクタンサ」を自分の守護天使として使役していた筈なのである。

だが、

するとベレンケスは、その顔に不敵なニヤ笑いを浮かべると、悪怯れた態度をとって、こうレリルに言い返していた。

「ふん、実は俺達三人は、この前、神殿にいつて前々から新しい守護天使を身につけるために守護天使降臨の儀式を行って来たんだ。だからその成果があって俺たちにはこの三人の天使が守護天使としてついたんだ。今までの守護天使以上の力を発揮できる、高位な守護天使がな。だからこの試合は、俺たちが勝つことになるぜ、見ろよ俺たちの守護天使の勇姿を、お前たちの守護天使には絶対負けないだけのこの天使たちは強い力を発揮できる守護天使なんだから覚悟しろよな。俺達があまり強くてびびって逃げださないようにしなよ・・・」

そう、ベレンケスはそう言うと、自分とパトン、ゲトルの頭上に浮遊している各守護天使を指し示して、自慢げに胸を反らせていたのである。

「新しい守護天使を降臨させた!?」

だからレリルは、その話に眉根を寄せると、不審げにその三人の守護天使を見ていた。

何故なら、ベレンケスの呼び出した守護天使は、どこか違和感のある姿をしていたからなのである。それは、彼等の守護天使に生えている背中の翼が、普通の守護天使とは違って色が黒い色の羽をしていたからなのである。そして、アブリットという守護天使も、ピークスという守護天使も、それにベレックと言う守護天使もその纏っている衣がすべて黒づくめで厳しい姿をしていたのだ。だからそれはまるで死に神の様で、その異様な様態にレリルは何か不吉なものを感じとっていたのである。

「ねえ、どう思うアルビレート、あいつ等の守護天使ってどこか変じゃない？」

その為、彼女レリルは、隣のアルビレートに意見を求めると、疑問げに首を傾げてその事実を不審に思った。

レリルは、確かに彼等の呼び出した守護天使に、何か不気味な違和感をそこに感じ取っていたのである。

だが、

「ちょっと待って、あの守護天使ってアングレックの指輪の守護天使よ。羽と衣が黒いから一目瞭然だわ。遠い昔に邪法化した、禁忌の指輪の守護天使よ!!!」

そう、レリルがアルビレートに意見を求めると、その後、そう言ったのはアルビレートの守護天使のミュルルであった。

彼女は、マルレリスとともにベレンケス達の守護天使の姿を見ると、その顔を峻険にして女性にしては厳しい態度をその顔ににじませて警戒していた。

そしてミュルルはメルヴィーの顔を見ると『ねえ、そうよね姉さん?』と、初めから指輪の外に出ていた姉のその彼女に同意を求めていた。

すると、

「さあ、どうだかね。あの天使がアングレックの指輪の守護天使だとしても、私には関係

ないわ。私はこの勝負には参加しないのだもの・・・」

そう、メルヴィーは、妹のミュルルにそう問われても、空中で寝そべるとまったくやる気のない態度でそこにぐうタレていた。

メルヴィーは、そのミュルルの言葉に何の興味も示さず、ただ空中に浮いているだけで全くの無関心だったのだ。

だから、

「ああ、もう、メルヴィーったら、何時もそうなんだから・・・」

だから、ミュルルは、そんな姉の姿を見ると、その豊満な胸を揺らしながら抗議の声を上げて、その姉のメルヴィーに、至極、焦れた思いを抱いていた。

しかし、

「ねえミュルルさん、そのアングレックの指輪ってなんなの？ その昔、邪法化したってどういうこと？ 禁忌の指輪ってどういう意味なの？」

そう、その時、先程ミュルルが言った言葉に怪訝さを感じて、アルビレートがそんな質問を彼女にしてきた。アルビレートは、その邪法化したという言葉が気に入り、何か背神的な意味を含むようなその言葉の響きに、注目を向けていたのである。

そう、だから、その意味を知りたくて、アルビレートはそのミュルルに問いただして見せていた。

すると、

「あのねアルビレート、アングレックの指輪とは、別名、邪法の指輪ともいわれ、むかし錬金魔導師が好んで作った指輪なの。錬金魔導師はね、普通の守護天使召喚リングを魔族化させる業を開発して多くのアングレックを作製したわ。基本的に守護天使は天界の聖なる神々の配属下として神に近い神聖を持っているのだけど、その神聖を歪曲して魔界天使化したのがアングレックなのよ。だからある意味、墮落天使の指輪といってもいいわね。光の天使が闇の天使になって指輪の所有を降臨や継承によらず誰でも手にすることが出来るようにした指輪だから、あの赤髪のモヒカンボーヤたちは、どこからかそのリングを見付けだしてきて、その魔界天使を自分たちの守護天使にしてしまったらしいわ。だから気をつけないとダメよ、アングレックは強い魔界の力を発揮できる「魔導器、なのだから・・・」

そう、するとミュルルはそう言ってアルビレートに、アングレックとは何なのかの簡単な説明をそこで試みていた。

そう実は、アングレックとは普通の守護天使の指輪を改竄して、魔神界に属する魔界天使の属性を備えた墮落天使を使役する人造的指輪に変えてしまったものを言うのである。

そして、その聖から墮落した守護天使の力を使ってリングロードの力を発揮すると、通常の指輪よりも強大な魔力を使役できる代物として知られているのであった。

だから基本的に、その指輪は呪われた指輪と称され、なるべく不用意に使用してはならない何かしらの日くがあった。通常、リングロードが自分の守護天使を得るには、神殿で天神に守護天使の降臨を請い、その上で自分だけの召喚リングを顕現させて契約を済ませる。

また、それ以外の場合では、アルビレートがヒュールから譲渡されたように、継承の儀式で新たな守護天使を得る事もそれは可能なのである。

しかし、アンクレックの指輪の場合、その指輪をはめさえすれば誰でもその指輪の守護天使を、一時的に自分の使役天使として使用できるのだ。

だから、降臨の儀式や継承の儀式も不用で、安易にその所有の受け渡しができる明確な所有者不確定の指輪なのだ。

だから、自らの力で高位な守護天使を得ることのできない未熟なリングロードは、しばし、このアンクレックの指輪を市場で買い求め、強いリング使いとしての力を手に入れる場合も少なくない例としてあるのだ。だから今では、その指輪は数少ない希少価値がでて、金持ちや貴族などの間で珍しいアンティークの様な物として好んで買い求められ、大事に扱われ収集されているというのだ。だから、この約六百五十年前ほどから錬金魔導師によって一時期、作製され始めたアンクレックの指輪は、今では、その数は非常に少ない見つければ掘り出し物の希少な価値を持つ珍奇的な魔導師の生産物的指輪達なのではある。

だから、そうである以上、それを手に入れるのには非常に困難な代物であるのだ。

しかし・・・

しかし、その指輪をベレンケス等三人がそれを所有しているという事は、この三人は、そのアンクレックをどこからか探しだして購入して来たらしいのだ。

それもかなり力の強い属性を備えたリングをだった。

だからミュルルは、アルビレートにその説明をすると、『気をつけなさいよ、相手は魔界天使なのだから・・・』とあって、彼女は極力、彼に注意を促していた。

だからアルビレートとレリルは、その事実には戸惑うと、ベレンケス等が召喚した三人の守護天使たちを見て、非常に困惑した表情をそこに浮かべていた。

『魔界天使・・・』

その名の響きに、多少おそれを感じとったからであった。

だが・・・

「おいアルビレート！ この勝負、負けたら承知しないぞ。お前は一応、私たち三人の主人なのだから、魔界天使ごときにビビってたんじゃ恥だからな！ だから私はこの戦いに参加しないけど、うまくマルレリスとミュルルを使ってあんな奴らを蹴散らせよ。私は、高みの見物をしているから、無様な負け方はするなよ・・・！！」

そうその時、メルヴィーは突然そんな事を言うと、アルビレートの前にあらわれて少々捻くれ気味の体で彼アルビレートを、叱咤鞭撻してきていたのだった。

彼女は、アルビレートにそう言って威張ると、その後、空中で寝転がりながら頭に立て肘をつき、鼻クソをほじりながらアルビレートをぎろりと睨んできた。

そして、その穿り出した鼻クソをまるめて、ぺしっぺしっとならびながらアルビレートに向けて弾いて見せてくるのだった。

だからアルビレートは、「うわっ、汚ね！！」と言ってよけたが、メルヴィーは次々に鼻クソの連打をアルビレートに浴びせるので、アルビレートは「汚いから、やめてくれよ！」と、そのメルヴィーという彼女に、抗議の声を上げていた。

しかし「とにかく負けるなよ・・・」メルヴィーは、そんなアルビレートに念を押すように凄んで見せると、アルビレートは「わ、判ったよ」とあって、一応、了解の意志を示すしかなかった。

アルビレートは、メルヴィーの質の悪さに癡癡したのだ。

この自分の主人をなんとも思っていない、その態度にだった。

だが・・・

しかしメルヴィーは、そのアルビレートの言葉を聞くと、今度はツツツと寝転がったまま上空へ浮遊し、地上から五十メートルの地点で静止して、そのままそこに寝そべて試合の前だというのに軀をかきながら寝てしまうのだ。

だからそれを見て「まったくメルヴィーさんには困るよ・・・」

アルビレートは、彼女に聞こえないように小さな声で少々悪態を吐くと、何か溜め息交じりに嘆いていた。彼アルビレートは、そんなメルヴィーという天使に、困惑した表情をその幼そうな顔に浮かべて見せていたのであった。

しかし、そんなことは兎も角、いまは試合である。

ベレンケス達は、いつもの守護天使とは違う天使を召喚したとはいえ、一応そのリングもリングロードの召喚リングであり彼らの所有物である為、譬えアंकレックの指輪と呼ばれる魔導器であれ、この試合のルールを無視した訳ではないので、これから試合を行わなければならない。だからベレンケス達は、自分の守護天使を呼び出すと、アルビレートとレリルに緩衝魔法の効果を施してから自分たちの足元に魔方陣を三つ形成させていた。

そして、その試合前の準備を、整え終えたのである。

「よし、それでは両チームとも、試合前の拝礼をして互いに双方の健闘を約束しなさい！」

そして、それを見たこの試合の審判員の指導教員がそう指示をして、アルビレート達やベレンケス達等に、試合前の礼をする様にと促していた。

だからアルビレートとレリルは、その対戦相手ベレンケス達に頭を下げる。

そして、そのベレンケス達も嫌々ながらも、アルビレートとレリルに対して不満げな顔を見せて、軽く頭を垂れる程度に首を動かしてその礼を示して見せていた。

そしてその後、試合が始まるのである。

「アルビレート頑張りましょう、この試合どうしても負けられないわ。だから気合いを入れていきましょうね。罰を受ける事にはなりたくはないのだから・・・」

「う、うん、そうだね、判っているよ。とにかく怪我をしないように気をつけよう。相手はベレンケスだから何をするか分からないからね・・・」

そして二人は、そんな会話をして、試合前の意気込みを高めて見せるのだった。

しかしこの勝負、どんなものになるか、他の生徒達にとっては物珍しい見世物の様なものでもあると、そう思われていたのである。

第三節

その後、試合は、学院の指導教員の立ち合のもと、開始される事になっていた。

しかし、試合を始めるにあたり、もう一度ルールの確認が示される。

それは攻撃を担当する生徒は、決して防御陣形成の魔法を使ってはいけないというものや、はたまた、防御系を担当する生徒は、当然、防御陣形成に専念し決して攻撃系や他の魔法は使ってはいけないというものだ。

これを無視しては、この試合のルールは成り立たないので、指導教員は口が酸っぱくなる程それを示唆していた。

そして、試合が始まるのである。

アルビレートとレリルは、ベレンケス達と四十メートルの間合いを以て対局し、試合開始の合図があがるのを待っていた。

すると、その緊張感のなか、試合を観戦する生徒達の間にも試合開始直前のボルテージが上がり始め、アルビレートやレリル、それにベレンケスに声援を送る声が高まりだしていた。

生徒達は、「頑張れレリル！ 負けるなアルビレート・・・」、「ベレンケスお前の強さを見せてくれ！！」と口々に叫ぶと、この試合に期待を膨らませて試合開始の合図があがるのを待っていた。

生徒達は、正直いうと、この試合を楽しみにしていたのだ。

今や約十日以前よりも強く成長したアルビレートと、ベレンケス達が戦うこの構図に、特異なものを感じていたからである。

アルビレートは元タイジメられっ子、そしてベレンケスはいじめっ子、この構図が生徒達には果たしてどちらが勝って、どの様に今までの遺恨を晴らすのかというその事に対する興味で、一緒くたにされていたのである。

だからある種、これはイベントみたいなものなのだ。

生徒達は、日頃、学院ではでかい面をして何かと肩幅をいからせているベレンケスが、アルビレート達に負けてのされる姿も見てみたいし、そして、強く成長したアルビレートが、ともすればそれ以上のより強い力によって打ち負かされ、新たな英雄的生徒が出現するのも見てみたい。

だから、その期待で生徒達は、観戦のボルテージを最高潮まで高めていたのだ。

そう、面白い試合が見られると、

そして何よりも生徒達は、法陣合わせというこの学院特有の試合形式を楽しむくせがついていた。だから、試合前において、これほど気分が高まるのである。

そして付則的に、この試合の後には、学長令により負けた生徒には罰則が強制されるその特典が絡んでいるのだ。だから、自ずとこの試合観戦が盛り上がるのは、誰であろうと領けた。どちらが罰を受ける事になるか、見ものであるからだ。

そうである以上、対戦する当事者のアルビレートやレリルそれにベレンケスやパトン、ゲトルも、この試合に負けられる筈はなかった。

負ければそれなりに、大いに屈辱だからである。

そして・・・

兎に角そんな中で、試合は始まりを迎えようとしていた。

アルビレートとレリルは、緊張感のなか全ての準備を以て胸の前に左手をつきだして、呪文の詠唱をする用意を調える。

その上で、指導教員の試合開始の合図を待っていた。

『始め！』

そして、両者向かい合って一分後、試合開始の掛け声が、その教員より徐に叫ばれるのである。

第四節

試合が開始されて直後、まずアルビレートとレリルは、レリルが呪文の詠唱を始め自分たちを保護する為の防御陣魔法形成を行っていた。

レリルは、エンレースの力を駆って呪文を唱えると、普段、好んで使うガーディアスの障壁とは別の防御陣を形成しようと、呪文を詠唱していた。

『エムディバス、ロム、コンディニス、障壁をつかさどる神の一つケレムの神よ、我はいまエンレースの御名によりその力を乞い、我が陣営にマフトクの障壁をもたらし給え・・・』

レリルはそう詠唱の韻律を唱えると、エンレースを使役して、アルビレートを中心にしたやはり半透過色の球形防御陣を形成して、相手側の攻撃に備えていた。

そして彼女は、防御陣の障壁を築くと「アルビレート後はよろしくね、私は防御陣の維持の呪文詠唱に専念するから、決して負けないでよ！」と、そう言って、また長々しい呪文の詠唱に入っていた。

『エパニドス、ルン、モエル・・・ベニルカ、アプトドス・・・ルデニフム、マニカ・・・ヘパニグス・・・、ルン、モエルヘクニクタ・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

・・・パトゥルス、クルタス・・・・・・・・・・』

そして、たった今、形成した防御陣の力をより強化して、防御系の魔法を唱えられないアルビレートと自分をガードする為に、神経を集中する事に専念するのだった。

だがその頃、ベレンケス達もパトンとゲトルがピークスとベレックの守護天使の力を駆って、防御陣の形成を始めていた。

パトンとゲトルは、二人同時に呪文を唱えると、やがてはベレンケスを中心にした自分たちの陣営の対抗防御陣を完成させる。

そして、その中で、ベレンケスもアルビレートを攻撃するための呪文の詠唱に入るのである。

それを見て・・・

アルビレートは、ベレンケスが攻撃系の呪文を唱えだしたのを知ると、その時マルレリスを呼び寄せて、彼女を使役して攻撃魔法を仕掛ける旨を伝える。

アルビレートは、直ぐさま精神集中をすると、攻撃系の魔法を唱えだそうとしていたのであった。

「いくよマルレリスさん、ちゃんと僕の言うことを聞いてよね・・・」

そして『・・・異界に輝くヘムドトスの星、照界に輝くエムナの象、その双者の交射によりてベレイオーラの光の矢を、マルレリスの御徳に感じてここに現し給え・・・』

その呪文詠唱後、アルビレートは、左腕を突きだして、ベレンケスに対してその矛先を向けていた。

だが、

ドゥウオオオオオオン！！

その時、とてつもない衝撃がアルビレートとレリルを囲う防御陣に、激突していたのである。

そう、それは、ベレンケスがアブリットという守護天使の力を使って攻撃を仕掛けた、速攻の魔法の衝撃波なのである。

その魔法は`圧炸裂、という魔法で、アルビレートは知らないが、魔界天使のアブリットが得意の一つとする攻撃法なのでもあった。

だから、その威力は強烈で、アルビレートは呪文を唱えたにもかかわらず、衝撃で振動する防御陣を凝視して、身悶えするように圧倒されていた。

「レリルまずいよ、ベレンケスの守護天使は、とても強力な攻撃魔法を使えるみたいだよ。このままだと、今のレリルが張った防御陣じゃ次の攻撃には耐えられないよ・・・」

だから、そしてアルビレートは、レリルに対してそう言うのである。

すると、

「判ったわアルビレート、それじゃ防御陣を変えて前面に一点集中させるわ、だからあなたも早く攻撃をベレンケスに仕掛けて、でないと次の攻撃が来てしまうわよ！」

レリルは、そう言うと、即座に別の呪文の詠唱に移っていた。

『エムディバス、ロム、コンディニス、障壁をつかさどる神ケレムの神よ、我はいまその障壁を破棄し、新たにマータスの障壁を前面に築きたまわん』

すると、その呪文に反応して、今までアルビレートとレリルを覆っていた球形の防御陣が収縮すると、今度はアルビレートの前面にまるで大きな壁が出来たみたいなの、分厚

い八角形の防御壁が形成されていた。

それは、前面からの攻撃のみを弾き返すことが前提として形成された防御陣で、それを以てベレンケスの攻撃に対抗したのである。

そして『・・・異界に輝くヘムドトスの星、照界に輝くエムナの象、その双者の交射によりてベレイオーラの光の矢を、マルレリスの御徳に感じてここに現し給え・・・』

その直後、アルビレートは、先程の呪文をもう一度唱えると『`オブティナルス・グレイヤー！！』と叫んで、即座にベレンケスに攻撃を仕掛けていた。

すると、その叫びとともに、アルビレートの頭上に浮遊していたマルレリスが、左手を突き出し、そこから無数の光速的な光子矢を放ち始めるのである。

びゅしゃしゃしゃしゃ・びゅしゃしゃしゃしゃしゃしゃ・！！

そして、その光の矢は真っ向的にベレンケスの眼前にまで飛ぶと、その障壁を射貫くように強烈的な激突力の痛打を示して見せていたのであった。

だが・・・

「ふん、そんなもんで、おれ達の張った防御陣が崩せると思うか？ アルビレートお前はバカだろ、そんな蚊が刺すような攻撃じゃ、ピークスとベレックの防御陣は崩せねーんだよ。だから攻撃するならもっとましな魔法にしな、でないとお前では俺達等を倒すことは出来ないぜ、絶対にな・・・」

そうパトンとゲトルは、口を揃えてその攻撃法を嘲笑っていたのである。

そして、

「ククッ、そうだぞアルビレート、おれ達はこの三人の守護天使の力で、お前たちを徹底的のにしてやるんだ。だからお前の守護天使じゃ、おれ達の守護天使の力に勝てるわけねーんだよ。だから、これ食らって吹っ飛びまいな、この攻撃魔法は強力だからな！」

パトンとゲトルがそう言った後、ベレンケスはそこに口を挟むと、やはり嘲笑って呪文の詠唱に入っていた。

それは古い呪文で、先程より強力な魔力を発露させるものだったのだ。

『・・・冥界の王ランディニスよ、我ベレンケスは守護天使アブリットの御名をかり、其に`煉獄火、の猛火を使役する旨を言上したまう。然ればその御徳をわが前に示し、敵を焼き払うその御業を放て！ `パドゥルース、デクトゥ！！』

そしてその直後、アルビレートたちに、ベレンケスの放った猛火が襲っていた。

煉獄の猛火は、すべてを焼き尽くす青色の炎、その炎が渦をまいて直状的にレリルの張った防御壁に激突すると、物凄い熱を発して拡充していた。

その為、防御陣の後背に守られているレリルとアルビレートだが、その猛烈な炎熱の熱気にさらされて、冷や汗ならぬ脂汗を額から垂らすこととなっていた。

ベレンケスの放った炎は、レリルの防御陣を痛打すると、見る見るその厚みを減じさせ、その防御能力を削いでいっていったのである。

「あ、熱い、どうにかならないアルビレート！ これじゃ私たち、蒸し焼きにされちゃうわよ！」

その為レリルは、悲痛な声を上げると、焼かれる額に手を当てて苦悶の表情を浮かべていた。

「判った、それじゃミュルルさんに、水洗礼の使役を試してみるよ・・・」

だがアルビレートは、レリルの悲痛にそう答えると、さっそくミュルルを使って煉獄の猛火を中和する水系の呪文を唱えていた。

『わが守護天使ミュルルよ、其はその括印の御徳によりて、この猛火を打ち払うべくミストストレスの御業を示し給え！』

すると、アルビレートが呪文を唱えると、ミュルルの体からは非常に細かい水の粒子が噴出して、ベレンケスの放った煉獄の猛火を冷やしていく。

その為、その現象がつづく、次第にアルビレートとレリルを取り巻いていた炎熱は冷め、仕舞には空中で白煙をあげながら消失してしまっていた。

そう、その呪文は成功したのである。

「よし、これで・・・」

そして、アルビレートはそう口ずさむと、今度は即攻撃に転じて、新たな呪文を唱えだすのであった。

「よし、それじゃ今度はミュルルさんとマルレリスさんの力を使って、同時攻撃をかけるよ、だから二人ともしっかりね」

アルビレートはそう言うと、徐に呪文の詠唱に入る。

『ミギリなるもの、そしてヒダリなるもの、両者はともに反目して合い叛けば、しかして混同し力なす時もある。しからば、その御力を示して、いまこの二天使にグラビュトゥンの御業をみだし給え！』

すると、アルビレートの呪文詠唱完了と同時に、ミュルルとマルレリスは手をつないで向かい合うと、物凄い勢いで回転を始めていた。

彼女たちは、空中で立ったまま水平円形に回転すると、さらに高速回転を深め、そこに空間の歪みを生じさせたのである。

そして、その空間の歪みを生じさせると、そこに灰色なる力場を形成して、大砲のようにビュシュッとそれをベレンケスの方向に向けて放っていたのであった。

直後、

ズダーン！

という盛大な音とともに、ミュルルとマルレリスの放った砲弾のような灰色の力場球は、パトンとゲトルの張った防御陣に激突して、その障壁に歪みを生じさせていた。

つまり、その防壁に亀裂を生じさせていたのだ。

だからその時、パトンとゲトルの二人は焦って、防御陣形成の呪文詠唱をより強めて、亀裂の生じた障壁に修正を施す。この障壁が破られれば、次の攻撃を食らってベレンケスは倒されてしまうのだ。

だから、即座にその処置をしなければならなかった。

そして・・・

そして、その後も、このアルビレートとベレンケス達との戦いはつづいていた。

両者は、互いに攻撃魔法を打ち合い攻防戦を繰り広げるが、その魔法合戦は、拮抗し、お互い互角の法陣合わせを展開していた。

ベレンケスが攻撃に転じれば、レリルが防御陣でそれをなんとか粉碎する。

はたまた、アルビレートが攻撃に転じれば、パトン、ゲトルが奮戦してそれを退ける。

その攻防が続くうち、その法陣合わせを観戦していた生徒たちは、いつしかその戦いに引き込まれ、声援を送るのも忘れて見入ってしまった。

その互いの実力が伯仲して、両者の見事な戦いがそこによく演じられていたからだ。

第五章 メルヴィー暴走？

第一節

鈍色の紫電が弾ける。

その後、アルビレートの放ったエンリュートの撃法は、ベレンケスのまわりに築かれた防御陣によって、難なく激破されていた。

これで十二度目、いつまでこの攻防は、終わり無く続くのかともそう思った。

アルビレートは、自らの放った電撃の霧散する様を見ると、焦燥に近い思いをその胸に去来させていた。

「ふふ、どうしたアルビレート、それでお前の攻撃はお終いか？ それなら俺がまた攻撃するぞ、これを食らってビビるなよ！」

しかしそんな中、そう言って強気の姿勢を見せたのはベレンケス、彼は、まだまだ長引く戦いにアルビレート同様、息を荒く弾ませると、精神を集中して呪文の詠唱に入る。

そして、

『ドゥークマドゥル・レベルレット、魔界にうごめく闇の精霊よ、其は吾がアブリットの御名に感じ、わが右腕に暗黒の渦を満たして、敵なるアルビレートの前面を打て！！』

『ベリエル・サイクロー！』

ベレンケスは、その呪文とともに、アルビレートに奈落の竜巻の渦を放っていた。

彼の右腕から発せられた竜巻は、猛烈な風の刃になり、アルビレートの前面を撃破しようとする。

だが、その竜巻は猛烈であるが、レリルの張った防御陣に至ると、渦巻く風の猛威を減退させ、次にはその攻撃はレリルの巧みな防御陣に防衛されていた。

互角、この戦いは、両者の力が拮抗していたのである。

「クッ、ベリエル・サイクロー（奈落の渦）でもダメか？ クソッ、レリルもなかなかやりやがるぜ・・・」

だが、自分のうち放った魔法攻撃を弾かれた様を見て、悔しそうに舌打ちするベレンケス、彼もそう言いながら、しかしてこの戦いがなかなか決着が着かぬことに、やはり苛立ちを感じ始めてもいたのである。

ベレンケスが攻撃を放てば、レリルが防御陣でそれを粉碎し、アルビレートが攻撃すれば、パトンとゲトルがそれに応じる。

この駆け引きの中で、両者、互いに一步も譲らず、攻防戦を続けていた。

「ふむ、この戦いなかなか力が拮抗したい戦いじゃな・・・だがかのしかしあれば・・・？」

そして、その戦いを感じたように見えていたヒュールが、生徒達の築く観戦の輪から、自分も目を凝らすようにして、その戦いを傍観しながらヒゲをしごいて一人そうゴチっていた。

しかし、彼は、そうは言ったものの、この長引く戦いを観戦していて、ヒュールは先程から何か気になるものをその目にとらえて気にしていたのだ。

「うむ、あのベレンケスとか言う少年や、パトンとかゲトルとか言う少年のまわりには、何やら不穏な靈気が充満しているように思うのじゃが、気のせいかな？　何かいやな予感がするのじゃが・・・」

そう、実はヒュールには、先程からベレンケス達のまわりに黒い影のような靈気が充満しはじめている事に、気づき始めていたのである。

それは、揺らぎ立ち上るような黒い靈気で、いま戦っているベレンケスやパトン、ゲトル等の体から噴出していたのである。

しかし、それは微かなもので、よく目を凝らしてみないと判らない。

だが、ヒュールには、それが確かに実際、確実にして見えていたのだった。

だが、戦いは、そんなことは兎も角、まだまだ続けられていた。

アルビレートは、再びエンリュートの撃法で、ベレンケスに攻撃をお見舞いする。

そしてベレンケスも、ベリエル・サイクローでそれに応戦していた。

その戦いの中で、両者は、互いに勝敗を早く決しようとし、極力、力を尽くしていた。

そうお互い、負けるわけには、絶対いかなかったのである。

「ねえアルビレート、あなたちょっとリングロードとしてまだまだ未熟よ。いくら相手がアングレックのリングロードを使っているからって、私やマルレリスの力を使って、あんな下級な魔界天使ごときに勝てないなんて、修行が足りないわよ。本来なら、私たちの力はもっと強大なんですからね、もっと確りしなさいよ！」

しかし、その戦いのさなか、アルビレートの守護天使ミュルルが、苛立ち混じりにそんなことを言うと、アルビレートを窘めるように怒りだしていた。

ミュルルは、気に食わなかったのである。

自分たちの守護天使としての力は、こんな戦いでまごつくようなレベルの低いものではなく、もっと強大な力を発揮できるはず。それなのに、まだアルビレートの召喚術者としての能力が未熟なため、ミュルルやマルレリスの力を最大限に発揮できない、その事が不満なのである。

だからミュルルは、アルビレートにそこで文句をたれるのだ。

すると、

ウンウン

その時、マルレリスも、ミュルルの言葉に同意して頷いていた。

「そんなこと言われたって、しょうがないじゃないか・・・」

だからアルビレートは、その戦いの最中しょぼくれるのである。

戦いは拮抗、実力は伯仲、そんな中でこの勝負、アルビレートにもどう決着をつければいいのか良く分からなくなっていたのだった。

だからアルビレートはその時、メルヴィーの様子をうかがう。

こんな膠着した戦いを打破するには、一度メルヴィーの力を使役してみたいなと思ってもいたからだ。

ヒュールの話によると、メルヴィーは、ミュルルやマルレリスよりも強い力を発揮できる守護天使であると教えられた事がある。

だがしかし、扱いづらく、その使役はまだヒュールに許されてはいないのだ。

だからアルビレートは、どうしようかと迷いを生じさせていた。

メルヴィーは、今この戦いの最中にあっても、空中の少し離れたところでのんきに寝そべって、鼻クソをほじりながらつまらなそうに戦いを観戦している。

だから彼女に、頼りたいという気持ちも芽生えていた。

しかし、戦いはまだまだ続く。

アルビレートは、ベレンケスにどうしても負けられず、その後も呪文の詠唱をして、マルレリスとミュルルを使役し攻勢に出ていた。

だが、そうした拮抗した戦いが行われる中、しばらくすると、何やらベレンケス達の間には何かの異変が生じていた。

『冥界の王ランディニスよ、我ベレンケスは守護天使アブリットの御名をかり、其に`煉獄火、の猛火を使役する旨を言上したまう。然ればその御徳をわが前に示し、敵を焼き払うその御業を放て！』

ベレンケスが、もう一度`煉獄火、の猛火の呪文をアルビレートに試みた時である。

その時、突然に、ベレンケスの守護天使が、挙動不審な態度を示したのである。

それは・・・

ベレンケスの守護天使アブリットは、その主人が呪文の詠唱を唱えたにもかかわらず、何の反応も示さぬと、その時、何やら「ウオオオオオオオオオオ」という、うなり声を叫び始めていたのだった。

その直後「がぁぁぁぁ」、「るおぉおぉお」その叫びに呼応するかのように、パトンの守護天使ピークス、ゲトルの守護天使ベレックも、そう雄叫びをあげ始めたのである。「な！？　なんだ??？」

だからその為、その雄叫びを聞いたベレンケスは、自分の守護天使の挙動がおかしいことに気づき、一時、茫然としていた。

して、すると`るおん！！、と何かが弾けていた。

そう、ベレンケスの守護天使が、突如、閃光を発して上空へ飛翔したのである。

そして、それに続き、ピークスとベレックも・・・

「な？　どうしたんだアブリット、どこへ行くんだ!？」

だからその時、ベレンケスとパトン、ゲトルは焦っていた。

いきなり守護天使が自分たちのもとを離れて、空中に飛翔したものだから、いったい何が起こったか分からなかったのである。

「どうしたんだよピークス、勝手に動いちゃダメじゃなか・・・」

「そうだベレック、どこへ行くんだ!？」

そしてパトンとゲトルも、その自分たちの守護天使の突然の行動に面食らい、茫然とピークス、ベレックがアブリットとともに、上空へ飛翔して行く様を訝しんでいた。

「おい、なんだ、どうなってんだ、ベレンケス達の守護天使が変だぞ・・・」

「本当だ、どうしちゃったんだろ？」

だから、その光景を観戦の場から見ていた生徒達も、不審に思い、騒ぎ始めていた。

そして、

ルウウウウウウウウン！

直後、そんな音が、上空から下方へと響いていた。

上空へ飛翔したアブリットとピークス、ベレックが、地上から五十メートルの地点で静止すると、不快な音を発したのである。

「なんだこの音は・・・！」

「うわああああ、耳が痛い！！」

そう、その音は、人間の鼓膜を狂わせるような音だったのだ。

『オースレン、オースラン・・・束縛を生業とする地獄の番卒よ、我アブリットの名に感じてその御業を示し、敵の身体を拘束し、二人の天使の御力を強固な鎖で捕縛せよ・・・』

そして、突然アブリットという守護天使は、召喚術師の介在によらず、自ら呪文を唱え始めると、そう言って言葉を口ずさんではいたのである。

してその時である、不思議な力が不意にアルビレートの守護天使、ミュルルとマルレリスを突如として襲っていたのは、

「きゃーやだ、体が動かない・・・」

「うーうーうー・・・」

そして、ミュルルとマルレリスは、突如、見えざる力で強力に拘束されてしまったのだ。

「ぎゃー、アルビレート、あのアブリットという守護天使ちょっとおかしいわよ・・・」

「ギャギャギャ・・・」

そしてミュルルとマルレリスは、突如、捕縛されて、その場で暴れるようにして身悶えして抗うように藻掻いていた。

「ちょっと待って、どうしたんだいミュルルさん、それにマルレリスさん・・・一体、何が起こったの？」

だからアルビレートは、そんなミュルルとマルレリスを見て、あわてて問いただしていた。

すると、

「ちょっとアルビレート、一体どうしたのじゃないわよ。あのアブリットという守護天使は、私たちが拘束の呪文で動けない様になっているのよ。もしかしたらあの天使、はぐれ天使になったかもしれないわ。あいつ等、指輪との繋がりが断たれたのか確実の話、あれは実際、暴走してしまっているのよ！」

そうミュルルは、そんなアルビレートに、そう言って率直に答える。

「暴走！？」

だからその為アルビレートは、ミュルルのその言葉に首を傾げる。

そう実は、その暴走という意味が、解らなかったからだ。

「ミュルルさん暴走ってどういうこと、あのアブリットって、何をしようとしているの？」

だが、

だがアルビレートが、再びミュルルにそう問いただすと、その時、突如閃光が瞬時に

辺りに迸っていた。

「うわあああああ！」

「きゃー！」

そうその時、アブリットが修業グラウンドの一角に向けて、青白い閃光を放ったのである。

そして、

ドゥウウウン！

グラウンドには、突如、突発的に爆発が起こっていた。

「うわああ、あの守護天使、暴走しているぞ！ みんな逃げろ！！」

「きゃー、こっちに向けて、攻撃しようとしている・・・！」

そう、ベレンケス達の守護天使アブリットとピークス、そしてベレックは、自ら呪文を唱えるとやたらに攻撃を始め狂い出したのだった。

どうおおおおん！

ゴゴッ！

そして、だからアルビレートとベレンケス達の遺恨試合を観戦していた他の生徒達は、その時、パニックに陥っていた。

アブリット、ピークス、ベレックは、呪文を唱えると、修業グラウンド一帯を焼き払い始めていたのである。

「どうしたんだアブリット、なんで勝手に呪文を唱えているんだ！？」

「そうだピークス、どうししまったんだよ・・・」

だからそれを見て、ベレンケスとパトン、ゲトル達は焦っていた。

彼らは、先程まで自分たちの使役を受けて従順に従っていた守護天使たちが、突然、彼らの使役を放れると、勝手に暴走し始めたので面食らってもいたのである。

しかし、

「あぶないベレンケス、後ろへ逃げて！」

だが、その時である、レリルは突如、叫ぶと、ベレンケス等に対して即退避を促す警鐘の声を、そこで即座に張り上げて見せていた。

直後、アブリットは、ベレンケス達三人に向けて、攻撃を仕掛けていたのだ。

アブリットの呪文の詠唱により、青白い閃光がベレンケス達に迸っていた。

そして、

「うわああああ！」

その閃光は、ベレンケス達の眼前三メートルの地点に着弾すると、その場の地面をえぐり吹き飛ばされた土砂と爆風が、ベレンケス達三人を吹き飛ばしていたのである。

「ベレンケス！！」

その為、それを見たレリルは、試合を忘れて慌ててベレンケス達のもとへ駆け寄っていた。

「アルビレートまずいわ、このままじゃ怪我人がでる。なんとかあの魔界天使たちの暴走を止めないと、この辺一帯、火の海になるわよ！」

だがそしてレリルはそう叫ぶと、アルビレートにこの騒ぎをなんとかする様にと示唆してくる。

だがしかし、アルビレートは、そう言われても、どうすればいいか困ってしまっていた。

「きやあああああああ！」

「うわあああああああ！」

しかし、その間にも、アブリットとピークス、ベレックは、狂ったように修業グラウンドを攻撃魔法で爆破、破壊し始めていた。

その為、その暴挙を受けて、観戦者の生徒達や指導教員、それに学長達も、あわててその場から退避し、逃げるようにしてグラウンドから離れていった。

アングレックの魔界天使アブリット、ピークス、ベレックは、完全に暴走していた様なのである。

最早、遺恨試合どころではなくなっていた。

そして、そのような光景を見て茫然とするアルビレート、彼はこの状況をどうすればいいかと、至極、困って困惑してみせていたのである。

するとその時、

「・・・・・・・・・・！」

アルビレートにも、アブリットの放った攻撃魔法の閃光が襲っていた。

ドゥオオオオオオン！

「うわあああああ！」

だからその攻撃を受けてアルビレートは吹き飛ば、アブリットの放った閃光は、アルビレートの眼前で爆砕すると、彼を強力に横へと吹き飛ばしていたのであった。

「アルビレート！！」

だからその光景を見て、レリルは叫ぶ、

彼女は、先ほど吹き飛んで気を失っているベレンケス達等をグラウンドの隅に引きずって安全を確保しようとしていると、アルビレートが吹き飛んで転がる様を目撃したからだった。

「アルビレート、大丈夫！？」

だからレリルは、焦って彼のその名を叫ぶ、だが・・・

「痛てテテテ・・・」

アルビレートは、吹き飛んだにもかかわらず、頭を押さえながら何とかその場から起き上がっていた。

だから、

「あっ、そうか、緩衝魔法が効果を発揮したのね！？」

そう、それを見てレリルが、そう口ずさむ。

そう実は、試合開始前にベレンケス達が施した、アルビレートに対する緩衝魔法が、アブリットの攻撃を緩和させてくれていたのである。

だからアルビレートは、それほどダメージを受ける事はなかった。

しかし、アルビレートは、起き上がっても、頭を押さえればしばらくその痛みを顔に歪めた。いま吹き飛んで少々、頭の側頭部を地面に打ち付けていたからだ。

その為アルビレートは、苦悶的に上空でやたらと攻撃魔法を放ちグラウンドを焼き払っているアブリットたちを見ると、憎たらしげに顔を顰めてみせるのだった。

「クソう・・・なんであの天使は、でたらめに攻撃をしているんだ？　普通、守護天使はリングロード（指輪召喚術師）の使役なしには、強力な力を発揮できない筈なのになんで？」

だがそしてアルビレートは、そこで忌ま忌ましく悪態を吐くのである。

だが、

「そんな事よりアルビレート、早くなんとかしなさいよ。このままだと、この学院がメチャクチャになっちゃうわよ、かなり急がないと大変な事になるわよ、本当にこのままだと確信的に、現実の話になるから・・・」

だが、そんな風にアルビレートが一人、納得できないような言葉を吟じていると、その時ミュルルが、焦れったそうな顔をしてその様な催促をしてきていた。

ミュルルとマルレリスは、拘束の呪文を受けて身動きを封じられているのだが、口だけは動かせるようで、アルビレートにそう言うと、早くなんとかしろと率直的に捲し立ててきていた。

だからアルビレートは困って、こんな状況にもかかわらず首を傾げるのである。

「う～ん、どうしよう？」

ツンツン、ツンツンツン・・・

しかし、その時である。

アルビレートが、このような状況に困っていると、その時、彼の肩を後から誰かが突然につついて来ていたのだ。

そして「ちょっとお困りのようですね？　お困りなら、私があなたの力になってあげましようか？　お望みなら力を貸してあげてもいいですよ・・・」

そうそして実は、そんなことを口走って来たのである。

だからアルビレートは驚いて、後を振り向く、するとそこにはメルヴィーがニコニコした顔をして、空中に浮かび屈み込んでいたのである。

「あっ、メルヴィーさん！？」

だからその為アルビレートは、怪訝そうな顔をして、メルヴィーを見ていた。

すると彼女は、またこう言っていたのである。

「ねえアルビレート、この際だから私がなんとかしてあげましようか？　ミュルルもマルレリスも身動きができないで拘束されちゃったから、もう頼るのは私しかないわよ。だから、あなたが望むなら、私が力を発揮してあの魔界天使たちをぶちのめしてあげるわよ。だとしたらどうする、試しにそうしてみる？」

そうメルヴィーは、アルビレートにそう言うと、至極、嬉しそうに顔をニヤけさせていた。

しかし、

「えっ？　でもメルヴィーさんは、まだ僕が使役しちゃいけないってヒュールさんが言っていたけど、大丈夫なの？」

だがアルビレートは、そんなメルヴィーに、そう言って疑問の程を呈する。

アルビレートは迷ったのだ、メルヴィー彼女にそんな話を持ちかけられて・・・

すると「あのねアルビレートちゃん？　時と場合によっては、たとえ師匠の言葉でも、それを破って時にはやらなければならない状況があるのよ。今がその時じゃない、この

ままあの魔界天使たちの暴走をほったらかしにしているの？ このままだと、生徒達に怪我人がでるかもしれないわよ。それを考えると、ここは私があなたの守護天使として力を発揮しなくてどうするの？ そうしないと、あの魔界天使たちの暴走は止められないわよ・・・」

そう、だからするとメルヴィーは、そう言ってアルビレートを正論的に唆していた。
「えっ、でも・・・」

だが、やはりアルビレートは煮え切らない。

それは何故なら、メルヴィーを使役する事を、ヒュールに実はまだ固く禁じられていたからなのである。

だが、
「うわああああ！」

「きゃー！」

その間にも、魔界天使の三人は、暴走して生徒達を狙って攻撃魔法を矢鱈に放ち続けていた。

その為、生徒達は、その攻撃をさけようとして、逃げ惑っていたのである。

それを見て、「ほらアルビレート、早くしないとあなたの同期生がやられちゃうわよ・・・」

だからメルヴィーは、魔界天使たちの攻撃を受けて、逃げ惑うほかの生徒達を指し示すと、そう言ってアルビレートに決断の程を促していた。

すると、
「う、うん、それじゃ判ったよ。それならメルヴィーさん、僕に力を貸してあいつ等をやっつける魔力を発揮してね。このままだと、君の言うとおり学院がメチャメチャになっちゃうから頼むよ・・・この際だから仕方ないね？」

だからそうアルビレートは、その時、メルヴィーを使役することを決断すると、彼はそうせざるおえない状況になってはいたのである。

「そうよ、そうこなくっちゃ、それならば私との契約をここでして頂戴。それをしないと、私の力はあなたには使えないわよ・・・」

だがするとメルヴィーは、そう言って、次には喜ぶように今度は「契約」という二文字を要求して来たのだ。

「契約？」

だからその為、アルビレートは首を傾げる。

契約ととは一体、何かと不思議にそう思ったからである。

「あのメルヴィーさん、契約ってなんのこと、君を僕の守護天使にする契約は、この前ヒュールさんにしてもらって、もう済んでいることじゃない？」

だからアルビレートは、疑問に思っ、彼女そうメルヴィーにそう率直に問いただしていた。

すると、
「あのねアルビレート、私はミュルルやマルレリスと違って特殊な天使なのよ。だから、私の力をあなたが使役するには、もう一つの契約をする必要があるの。だからそれをしてからでないと、何事もことが運べないのよ。だから早くその契約を私として、早くし

ないと、あの魔界天使たちの暴走は止められないわよ・・・」

しかしメルヴィーは、そう言って、アルビレートに契約の即遂行を促していた。

「えっ、そうなの？ それじゃ契約ってどうすればいいの？」

その為アルビレートは、そのメルヴィーの言葉に納得してしまい、契約をどう手続きすればいいかと、そんな事を聞いていた。

するとメルヴィーは「あのね、あなたが私に絶対的な忠誠をこれから誓いますと、手を挙げて宣言すればそれでいいのよ。そうすれば契約は成立して、私が力を発揮できる条件が整うわ。だから早く手をあげて宣言して、愚図愚図してられないわよ！」

そうだからメルヴィーはそう言って、契約の仕方を、アルビレートに指示して見せる。

しかし、

「えっ、メルヴィーさん、僕が君に絶対的な忠誠を誓うってどういうこと？ それって何かおかしくない？ 君は僕の守護天使でしょ！？」

だがその言葉を聞いたアルビレートは、その契約の不可解さに首を傾げていた。

しかし・・・

ドゥオオオオオン！

その時、アルビレートの近くに、アブリットの放った閃光が着弾していた。

そして、その爆風が、アルビレートに自ずと吹きかかる・・・

「ほらアルビレート、あなたがもたもたしているから、またあのアブリットという魔界天使が、あなたを狙い始めたわよ。早くしないと、丸焼きにされるから、疑問を差し挟まないでさっさと私との契約をすればいいのよ。そうしないと、時間の無駄になるわよ！」

しかしメルヴィーは、そのアブリットの攻撃がまたアルビレートに降り掛かりそうになると、そう言って早く契約の即遂行の決断を促してきたのだ。

だからその為アルビレートは、仕方なく疑問であったが、メルヴィーに促されるまま契約の宣言をしようと、右手を挙げてメルヴィーに教えられた言葉を言上し始め様としていた。

『僕アルビレートは、これからメルヴィーさんに絶対的な忠誠を誓い・・・』

「待て！ アルビレート！ そんな宣言をしてはいかん！！」

だが・・・

だがその時である、突然アルビレートの宣言を制止する言葉が、突如として投げ掛けられていたのだ。

ヒュールである。

彼は、突然グラウンドの隅からアルビレートが右手を挙げてメルヴィーとの契約の言葉を言上している姿を見て、焦って急ぎそう叫んで来ていたのである。

しかし、

『・・・ます・・・』

そうしかしアルビレートは、そんな声を知らずに、最後までメルヴィーに促された契約の言葉を言上してしまっていた。

すると、

その時、突如メルヴィーの体が、まばゆい光に包まれて輝きだしたのである。

それを見て「バ、バカ者アルビレート、お前は何をしているんじや。これではメル

ヴィーの力が解放されてしまうのではないか！　せっかくワシが苦勞して封印しておいたのに・・・」

そう、だからヒュールは、アルビレートにその様に怒ってそう叫んでいたのである。「えっ？」

だがその直後である。

アルビレートが、ヒュールの叫びに面食らって疑問げな顔をする時、メルヴィーはその光を霧散させると、突如、背中の翼を大きく広げていたのだった。

そして、

アルビレートは見たのだ、メルヴィーの背中の羽とその髪の色が灰色に染まるのを・・・だがそしてメルヴィーは、その顔の額に、金目の第三の眼を開いていた。

「えっ？　どうしたのメルヴィーさん、どうしちゃったの！？」

だからアルビレートは、それを見てメルヴィーの豹変に驚く。

すると、

カッ！

メルヴィーの額に開かれた第三の眼から、突如、強烈な閃光が迸っていた。

そして直後、アルビレートの眼前のグラウンドには、膨大な火柱が立ち上っていた。

「うわああああ！」

その火柱は、天まで突き抜けるほどの盛大な大音声を巻き上げると、幅五十メートルほどの一帯を、瞬時に力強く焼き払っていたのだ。

だからアルビレートは、その強烈な炎熱の炎にさらされて、その場から退く。

「キャハハハハハハハハッ！」

だがそしてアルビレートは、メルヴィーが狂乱的に笑うその声を、その耳で確かに聞いていたのだ。

「えっ！？　メルヴィーさ・・・ん？　・・・」

カッ！　カッ！

だがそして直後、またメルヴィーの額の眼から、閃光がほとぼした。

その直後、二本の巨大な火柱が、学院の修業グラウンドに立ち上っていた。

「うわああ、メルヴィーさん、どうしちゃったんだよ・・・やめてくれよ・・・」

だから、その光景を見て、アルビレートは焦ってメルヴィーを呼び止め様としていた。

だが・・・

「うるさいアルビレートよ、わらわに指図するではない！！」

だがそう、そしてメルヴィーは、そう言ってアルビレートをそこでそう制して来て見せていた。

そして・・・

「おい、そこの魔界天使三人組よ、ここでわらわと勝負して力試しをしろ！　でないと汝等をわらわは容易に焼き捨てるぞ！！」

そうメルヴィーは、そう宣告すると、目の前で空中に飛翔していたアंकレックの魔界天使三人を見つめて、ニヤリと残酷そうに微笑んでいたのがあった・・・

第二節

いま修業グラウンドの五十メートル上空では、メルヴィーと三人の魔界天使が対峙していた。

灰色の翼を大きくはばたかせ飛翔しているのはメルヴィー、その向かいで黒い翼をはばたかせている三人の天使は、アブリット、ピークス、ベレックの彼等である。

この一人と三人が、いま互いに向かい合った形で、火花を撒き散らそうとしていた。「汝アブリットよ、其はわらわと戦う気があるか、それとも逃げるかどうするぞ。わらわは、汝等と手合わせしたくてうずうずしておるのじゃ。さあどうする、その返答を聞こう！」

そうそして今、そうアブリット等に対してそう言葉を発したのは、メルヴィーである。彼女は、まるで、どこかの高貴な女王の様な口調でそう言うと、目付きをキツく鋭く尖らせていた。

すると、
「ふん、貴様はヒエラリキーか！？ そのような灰色に染まる羽を有して我ら魔界天使に戦いを挑んでくるとは愚考であるぞ。聖と魔の境にありて半濁する者には、所詮どちらの神々よりも加護は与えられん道理、その道理をわきまえず我らと合いまみえようとは無理な話、貴様は、どこかに引っ込んでいてもらおう・・・」

だが、それに対して、そう要求を突っぱねたのは、アブリットである。
彼アブリットはメルヴィーの羽の色を見ると、その色が灰色であるが故にバカにして嘲笑っていた。

だが・・・
その時、突如メルヴィーの額の眼から、閃光が走っていた。
その閃光は、突然、鋭利な光の刃になると、アブリットの右頬を即座に掠めていたのである・・・

「ぬ!？」
だからそしてアブリットは、その右頬から一筋の血を滴らせていた。
「貴様!!」

そうメルヴィーの額から迸った光の刃は、アブリットの右頬に約数ミリの切り傷を負わせ、浅く切り裂いていたのである。

だからアブリットは、それに顔色を変えると、好戦的になり身構えていた。
「よかろう、貴様と勝負しようではないか！ 我らは、アंकレックの指輪の守護天使として、永らく人間どもに使役されて苦痛を受けていたところだ。しかし時がきて、ア

ンクレックの指輪の守護天使としての用も切れた事から、こうして自らの力で魔力を發揮できるようになった。だからいい機会だから我らの自由な力を發揮して、貴様を廃棄天使にしてやろう、覚悟はいいか、もうお前には命は無いぞ!？」

アブリットはその後、そう言うのとピークスとベレックとともに、呪文の詠唱をし始めようとしていた。

だが、それを見てメルヴィーは、ニヤリと不敵に笑っていた。

その後、この両者の戦いは、始まる。

まず、魔界天使アブリット等は、共同して呪文を詠唱し素早く唱える。

その呪文の詠唱は、唱和、と呼ばれ、複数の天使が同時に同じ呪文を唱えるというものだ。

それによって魔力を強大にして、相手を粉砕する。

だから、アブリットとピークス、ベレックは、呪文を詠唱すると、メルヴィーを睨んでその眼光を極端に鋭くしていた。

『ダーク・エプリア、ルーグ・リトリア、魔界に蠢く三頭蛇の首領よ、我は今その御力を拝して、エクスダスの蛇眼を試みる。然れば、その御業を我に示さん!!』

アブリットとピークス、ベレックは、そう呪文を唱えると、直後メルヴィーに対して膨大な衝撃波を放っていた。

その衝撃波は、アブリット、ピークス、ベレックの体から瞬時に迸ると、メルヴィーに向かって直状的に差し向かっていた。

ぶいいいん!

だが、

『アームレス・ハーツ、防壁をつかさどるケレムの神よ、その御業を示し、反衝の力を我が前に示せ!!』

そうメルヴィーは、その攻撃を、前面に反衝壁を築くことで防衛していた。

アブリット等から放たれた衝撃波は、メルヴィーの眼前に築かれた反衝壁に弾かれると、二つにパツクリと割れて、そのままメルヴィーの後方に吹き飛んでいた。

すると直後、彼女の後方で盛大な音をあげて修業グラウンドを囲っていた外塀の壁が、ドドンと吹き飛んだのである。

そう、外塀に衝撃波が激突して、その壁を破壊していたのだ。

だから、そこから濛々とした粉塵が立ち上り、グラウンドにはその粉塵がもたらす煙が流れ込んで来て視界が悪くなって来てしまっていた。

「キャハハハハ、笑止、笑止、そんな魔法ではわらわを倒すことはできぬ。やるならば、もっと強大な魔法で我に対抗せよ! それともこれで精一杯か!？」

だがそして、それを見て嘲笑うメルヴィー、彼女は子供じみた笑いを浮かべると、余裕の表情でアブリット達をけなしていた。

「ぬぬ!!」

だからその為、それに怒ったアブリット等は、今度は三人散開してメルヴィーを取り囲むと、トライアングル状に包囲陣を布いていた。

そして、

『メルバラークアダムス・ルレ・ホイル・・・地殻に眠るマグナスの竜よ、その眠りを解い

てこの地上へ姿を現せ！』

アブリットとピークス、ベレックは、またそんな呪文を唱えて、メルヴィーに対抗していたのである。

グウオオオオオオオオオオオオ・・・・

するとその時、突然、学院のグラウンドが揺れて地鳴りをもよおすと、突如、赤い体をした四匹の竜が地面よりうねりをあげて出現し、メルヴィーたちがいる上空へと頭をのぼして来ていたのだった。

そして、その四匹の竜は、紅蓮の炎をその体にわき起こすと、旋回してメルヴィーを襲って来たのである。

四匹の竜は、四方よりメルヴィーを取り囲むと、次第に旋回して彼女を包囲する。

そして、そのうねる様な長い管のような体を、メルヴィーに巻き付けるように絡みつけて来る。

そしてメルヴィーは、その竜に取り巻かれ、やがてその四匹の竜の体に取り込まれていた。

ボウッ！

メルヴィーの纏っていた、白い衣が発火する。

すると直後、彼女に強力な炎熱が襲っていた。

「あっ、メルヴィーさん！！」

だからそれを見たアルピレートは、その時、彼女を心配してそう叫んでいた。

メルヴィーは、四匹の巨大な竜がより繩の様に絡み合うその中心で、燃えていたのである。

そうメルヴィーは、完全に炎の竜に飲み込まれて埋没していた。

赤い紅蓮に燃えるその炎熱のただ中である。

しかし・・・

「キャハハハハハハ、こんなもの全然、熱くなどないわ。貴様ら、わらわを誰だと思っている、我は魔界天使界を統べるデンデニル・オームの娘なるぞ。然れば、このような呪法では、我が肉体を焼くことは適わず。よってこの地殻の火炎竜達を汝等に還してやろう、覚悟せよ！！」

だが、そう四匹の火炎竜の炎に飲み込まれた筈のメルヴィーは、その時、竜の体のなかでそう叫ぶと、次には徐に呪文を唱えだしていたのだ。

『メルバラークアダムス・ルレ・ホイル・・・愚天使に強いられて我を取り巻くマグナスの竜よ、汝等はその矛先を彼の三天使に向けて見返りの居を定めよ！！』

だがすると、

今までメルヴィーを取り巻いていた四匹の竜は、その呪文に逆に感応すると、即座に散開する。そして、本来の呪文を発動した、アブリットやピークス、ベレックを今度は彼等へと反対に向かって襲いかかっていたのである。

四匹の竜が、その体をくねらせて、三人の魔界天使に飛来する。

「ぐうおおおおお！」

「ぬああ！」

そしてその直後、ピークスとベレックは、その火炎の竜に飲み込まれて、苦悶の声を

発していた。

「ピークス、ベレック！！」

それを見たアブリットは、焦りの色を浮かべて、即座に下方へと退避した。

そう、実はピークスとベレックは、炎熱に晒されて、その体を強烈な炎に焼かれていたのである。

「「がああああああ！！」」

そしてピークスとベレックは、その体を猛烈な火炎竜の炎熱で焼かれると、そのまま苦悶の絶叫をあげてのたうっていた。

そして黒焦げになり、そのまま消失してしまっていたのである。

そう、肉体を焼かれて、闇の属性に還元してしまったのだ。

つまり魔界天使としての『死』、それを意味していたのである。

「キャハハハハハ、どうじゃ我の火の洗礼は！？ 自らの放ったマグナスの竜に焼かれて廃棄されたのなれば、それは本望であろう。然れば、あの世で初天使としてやり直すが良い！！」

だが、それを見て高らかに笑うメルヴィー、彼女は愉快げに哄笑すると、その次にはぎろりと一人となったアブリットをここぞとばかりに睨み付けてきていた。

そして、いきなり攻撃をし始めるのである。

メルヴィーは、何やら短い呪文を唱えると、両手を突き出して、そこに力を満たし始めていた。そしてその力が充足すると、アブリット目掛けて無数の火球を放っていたのである。

メルヴィーの両腕から放たれた火球は、アブリット目掛けて飛来すると、彼を焼き払おうと盛大に爆裂していた。

ドウおおん！

ゴゴン！！

しかし、だからそれをアブリットは、飛翔して素早く避ける。

彼は巧みにメルヴィーの攻撃を避けると、仕方なく地上すれすれまで降下していた。

すると直後、メルヴィーの放った爆裂の火球は標的を失い、あちこちに激突して学院内の壁や建物を破壊し始め、そこら中で甚大な被害を巻きおこし始めていた。

メルヴィーは、狂ったように爆裂の火球を乱射するものだから、その被害は目もあてられない。その為、学院はさながら、火の渦に巻き込まれ飲み込まれるようにして炎上したのである。

「ああ、やめてくれよメルヴィー、どうしちゃったんだよ一体！？」

だから、その光景を見て頭を抱え啞然とするアルビレート、だが、そこへ彼の師匠であるヒュールが、いち早く即座に駆け付け遠くから懸命に急いでアルビレートの元へと走って来ていたのである・・・

第三節

「アルビレートよ、お前さんはまったくなんて事をしてくれたのじゃ！　せっかくワシが封印しておいたメルヴィーの力を、解放してしまうなんて正気の沙汰ではないぞ！

見ろあのあ奴のメルヴィーの暴挙を、あ奴は力が解放されて主人を無視して好き放題やっておるのではないか、まったく困ったものじゃ・・・」

メルヴィーがアブリットを攻撃し始めて、ヒュールがアルビレートのもとに駆け付けると、彼はその時、その顔に厳しい面を浮かべてアルビレートのことを叱り付けてきていた。

ヒュールは、アルビレートの元にまでくると、怒気を胎ませながら極端に険しい顔をして見せて来ていたのである。

「・・・・・・・・」

だからその時、アルビレートは、いきなり怒られて惚けた顔をしていた。

何故、自分が怒られなければならないのかと、そう思ったからだ。

「ちょっ、ちょっと待ってよヒュールさん、それよりも一体メルヴィーさんはどうしちゃったの？　僕は彼女と、一つだけ契約を交わしただけなのに・・・」

だからその為、アルビレートは、そんなヒュールにそう言って疑問げな顔をして見せる。

だが、

「バカ者、それがいけなかったんじゃ、お前はメルヴィーに唆されて、解いてはいけない封印を解いてしまったんじゃ！！」

だが、そうして実は、彼アルビレートは、またヒュールに、そう怒られていたのである。

ヒュールは言う・・・

「あのな、お前さん知らんのか！？　メルヴィーは守護天使は守護天使でも、ヒエラリキーの属性をもつ守護天使なんじゃ。率直に言うとあ奴は、ミュルルやマルレリスとは違って、光と闇の中間に位置する天使なのじゃよ、『聖』と『魔』のな。じゃから、ワシは、あ奴の闇の力を封印しておいて、なるべく『聖』に位置する属性を面に顕すように法術を施しておいたのじゃ。しかし、お前が不用意にメルヴィーの力を解放してしまう契約の言葉を言上してしまうから、その封印が解けて、あのよう暴走し始めたのじゃ。じゃから、こうなったらもう一度、封印を施さないと、この先あ奴は何をしでかすか判らんのだぞ。まったく、じゃからメルヴィーの使役をお前さんが可能とするには、第二の継承の儀式を完成させねばならんと言っておいたのじゃ。これでは、全てが台無しではないか、第二の継承の手続きを終えて初めてメルヴィーだけは完全にお前さんの守護天使になる筈であったのに、これでは、ワシは一生お前さんの師匠としてついてやらね

ばならん事になってしまったわ。指輪の継承の儀式が途中で不完全のまま履行されてしまうと、巡遣使はその責任をとって死ぬまで弟子のお守りをしなければならん。そうなると、ワシの隠居暮らしの夢がここで断たれてしまったのではないか、一体どうしてくれるのじゃ！」

だがそしてヒュールは、そう言うときアルビレートを見て、至極、嘆いてみせるのである。

だから、
「えっ、そんなこと言われても、ボク知らないよ。初めからそんなこと説明しておいてくれれば、こんな事にはならなかったと思うんだけど・・・」

だがそう、アルビレートは怒られつつも、そう言って反論をしていた。

一体自分にどんな責任があるのかと、疑問げにそれをそう思い自分の首をかしげて見せてはいたのである。

しかし、
「ええい、うるさいわアルビレートよ！ つべこべ言わずこの瓶を持って、仕方ないからこの際、無理矢理メルヴィーをこの小瓶に封じ込める。でないと、暴走して手が付けられんからな！」

だがヒュールは、そんなアルビレートを窘めると、懐から徐に拳二つ大ぐらいの瓶を取り出して、それをアルビレートに差しだして来ていた。

「ええッ!？」

だからその為アルビレートは、それを見て怪訝な顔をしてそれを凝視していた。

ヒュールが手にしていたのは、透明な一つの札が貼られた、在り来たりの小瓶なのである。

それをヒュールはアルビレートに差しだすと、「早く持て！」と強要していた。

「ちょっと待ってヒュールさん、この瓶にメルヴィーさんを封じ込めるの!? もしそれをしたら、メルヴィーさんはどうなっちゃうの、本当に大丈夫なの？」

だからアルビレートは、その瓶を受け取りつつも、疑問げにそう聞いてみていた。

すると、
「大丈夫じゃ、ただメルヴィーを一時その中に封じて、あ奴のヒエラリキーの衝動が萎えるのを待てば、また少しの間は何時も通りのメルヴィーに戻るのじゃ。だからあ奴を、その瓶のなかに閉じ込めなければならん。もたもたしておると、この学院を丸焼きにしかねんからな・・・」

だからそう、ヒュールはそう言って、今アブリット目掛けて火球を滅多矢鱈にぶちかましているメルヴィーを見て心配するようにその彼女を凝視するのだった・・・

その頃・・・

魔界天使アブリットは、メルヴィーの火球の猛攻を受けて、まだまだ逃げ回っていた。メルヴィーの火球の攻撃は、まるで雨嵐のようにアブリットに飛来するので、それを避けるのに精一杯であったからである。

その為、反撃の呪文を、唱える事もままならなかった。

しかし、

ズゴオオオオン！

バボオオン！

その間にも、メルヴィーの攻撃で、学院内の建物やグラウンドに甚大な被害が出て来ていた。

そうメルヴィーにはこの勝負、ある意味、勝とうが負けようがどうでも良かったのである。

ただ日頃の鬱憤を、この機会に晴らしたい、それで暴れている様なものだった。

「それぞれそれ、どうしたのじゃアブリットよ反撃せぬのか？ 反撃してこぬと、お前を丸焼きにしてやるぞえ・・・」

そしてメルヴィーは、アブリットを、ここぞとばかりに挑発するのである。

「ぬぬううう・・・」

するとアブリットは、屈辱的に顔を歪めて、その挑発にのっていた。

彼は、一度、地上スレスレを飛翔して滑空すると、そのあと急上昇してメルヴィーの攻撃をかわす、そして徐に呪文の詠唱をする。

『天に届く雷の雷鳴、地に轟く地鳴りの響きよ、我がアブリットの名に感じて、その振動の妙を彼のメルヴィーなる女将へ破壊の音となりて放て！！』

びゅウオオオオオン！

直後、アブリットを中心として、大気の振動が起こった。

その振動は、アブリットから放たれると、強大な空気のうちねりとなってメルヴィーに直状していた。

しかし、

パァァン・・・

その大気の振動波は、メルヴィーの眼前に至ると、盛大な乾いた弾ける音とともに激破されて、四散していた。

メルヴィーが、事前に、その攻撃を防衛する呪文を唱えていたからだ。

「くうううッ・・・」

だから、その為アブリットは、悔しそうに歯軋りする。

だが・・・

次の瞬間、思わぬ衝撃波が彼を襲っていた。

ぐうおおおん・・・

その衝撃波は、アブリットを直撃すると、彼を紙屑のように吹き飛ばしたのである。

彼の背中の黒い羽根が、無数に吹き飛んで宙を舞っていた。

「ぬがああああ！！」

そうメルヴィーは、アブリットの攻撃を実は、一部、反射して送り返していたのである。

だからアブリットは、自分の攻撃をしっぺ返しされる形になり、その衝撃で、衣服や羽はぼろぼろになり、無残な姿をそこにさらす事になっていた。

それを見て、

「キャハハハハハ、面白いぞアブリットよ、その情けない姿、なかなかの男前ではないか、

良ければわらわの愛妾にしても良いぞ、タマ無しのな・・・」

そう、だからメルヴィーは、そう言って彼をまたなぶる様にバカにして、子供じみた哄笑をあげていた。メルヴィーは、相手をあざ笑うと、その顔に残忍な面の表情を浮かべて見せてはいたのであったのだ。

第四節

戦いは、最早、メルヴィーのアブリットに対する、圧勝的な場面に移り変わっていた。メルヴィーは、傷ついたアブリットを容赦なく攻撃すると、その彼の黒色の翼をもぎ取るがごとく攻撃をやたらに続けていた。

アブリットは、その攻撃を受けて傷ついた羽を動かし、なんとか逃げ回っている。

だが、メルヴィーの攻撃は、光射の瞬きのごとく瞬時に閃き学院のグラウンドに盛大な火柱を迸らせる。

メルヴィーは、爆裂の攻撃で、一帯を焼き払っているのである。

その為、学院のグラウンドは消し炭のごとく黒焦げになり、爆雷が着弾したごとくでこぼこにその地面がえぐり返される様になっていた。

そして、その被害は学院の建物にもおよび、学院の西棟に位置する研究棟という建物は、そのメルヴィーの爆裂的攻撃の余波を受けて今は炎上し、そして倒壊しかかっていた。

そうメルヴィーは、学院がどうなろうとお構いなしであったのだ。

目の前の魔界天使アブリットをもて遊ぶがごとく攻撃を続ける彼女は、手が付けられないじゃじゃ馬娘のように哄笑し、狂乱したかのように滅多矢鱈な攻撃を続けていた。

その攻撃の中で、彼女は狂氣的にその破壊の衝動を楽しんでいるかの様にも見えていたのである。

しかしその頃、アルビレートとヒュールは、そんな暴れ回るメルヴィーを拘束しようと、今その計画に思いをめぐらし方策の算段を講じようとしていた。

ヒュールは、メルヴィーを小瓶に封じるにあたり、アルビレートにその小瓶をしっかり離さず掲げているようにと命じていた。

彼は、これから法術を以て、メルヴィーをその小瓶に封じ込めるのである。

だから、そのアルビレートに指示を送ると、彼は念を押すように段取りを手早く説明していた。

「いいかアルビレートよ、メルヴィーをその小瓶に封じるには、あ奴をワシの法術の効力が届く範囲内に呼び寄せねばならん。だからワシはいまからあ奴に、一応、掛け合って戦いを止めさせる手段を講じるから、あ奴がそれに乗ってこのグラウンドの近くに降りてきたらメルヴィーに気付かれないように近付いて瓶を頭上にかかげるのじゃ。だから決してその瓶を離してはならんぞ、そうするとあ奴を封じることは出来んからな……」

ヒュールは、アルビレートにそう指示を出すと、しばし待てとってメルヴィーの方を振り向いていた。

メルヴィーは、いま、上空で逃げ回るアブリットに、その腕から雷撃を逆らせて攻撃を仕掛けている。

その攻撃は、相変わらず滅多矢鱈な攻撃だが、メルヴィーはニタニタと顔をにやかせながら狂乱を演じ続けていた。

だからヒュールは、それを見てそのメルヴィーに呼び掛けを行う。

「や、止めるのじゃメルヴィー、メルヴィーよ、もうお遊びは止すのじゃ。まわりの状況をよく考えるのじゃ……」

そうヒュールは、メルヴィーの名を叫ぶと、真剣に、そのメルヴィーに必死で呼びかけを行っていたのであった。

*

だが・・

だが今メルヴィーは、いい気分だった。

自由に魔力を発揮でき、盛大に大暴れができる。

そして、敵をのして、今まで自分のなかに溜まっていた、鬱憤を晴らすことができる。

それが何よりも楽しかったのだ。

敵アブリットは、最早、戦うすべを持たぬかのように逃げ回るだけ、しかしそれを追い詰めて、最終的には奴を廃し初天使に還元してやる、そうすればこの座興を、おのずの勝利に満悦できる趣向を味わう事が出来るともそう思い始めていた。

だからメルヴィーは、アブリットを狙ってその腕から電撃を逆らせていた。

何よりもここでメルヴィーは、今現在の自由を感じていたのである。

「止めるのじゃメルヴィー、もう止すのじゃ！！」

だが・・

だが、そこで唐突に、彼女の耳に聞き覚えのある老人の声が届いていた。

それはヒュールの声、すっとぼけたような響きを呈するその声は、メルヴィーにとって聞き馴染んだ昔からの当たり前の甲高い声だった。

その声を聞き、メルヴィーはふと下方に視線を落とすのである。

するとそこには、ヒュールが手を挙げてしきりに「やめるのじゃ、もう戦いはよせ！！」と、叫んでいる光景が目飛び込んできた。

だがその時、メルヴィーはそれを無視、せっかく今は面白い戦いができて魔界天使のアブリットを、もう少しで仕留められるのだ。

だから、その電撃攻撃を、止めることはなかった。

メルヴィーは、`メルカーク、という雷撃の呪文を頻繁に唱え続けると、アブリットを狙って攻撃をし続けたのである。

その攻撃を受けて、アブリットは必死の態で上昇下降を続けていた。

アブリットは、今は逃げるしかなかったのだった。

先ほど自分の放った振動の衝撃波が、メルヴィーの防御魔法によって跳ね返され、結局その直撃を受けてしまった。

だから、その時のダメージで、今は反撃の呪文を唱えられる状況ではなかったのだ。

しかし、このまま逃げ回っているだけでは何もならない。

その為アブリットは、自分のダメージが回復するのを待って、メルヴィーに反撃の呪文を放つ機を見計らっていた。

そう、時間かせぎをして、逃げ回っていたのである。

「それぞれ、どうしたアブリットよ、逃げてばかりでは魔界天使として様にならぬぞ。お前が闇に属するものの使であるのなら、強大な魔法でわらわを攻撃してみよ。そうせぬと、先ほどマグナスの竜によって初天使に還元されたピークスとベレックに顔向けがたつまい。奴らはお前の同族だった者なのだからな・・・」

しかしそんな中、アブリットはメルヴィーにそう挑発されて、奥歯を噛み締めるがごとくその腹立ちを抑えていた。

だが、ここで不用意にメルヴィーの挑発にのれば、先程の二の舞になってしまう。

彼は、メルヴィーの得体の知れない力に、恐れを抱いていたのだ。

このヒエラリキーに属する灰色の天使は、その半濁な属性の癖に、相当の実力を秘めている。

それに、先ほど自分は、魔界天使のデンドニル・オームの娘なのだと言っていた。

だから、出来ることならこの戦いを放棄して、どこかへ逃げていってしまいたいという衝動に駆られていたのである。

何故なら、デンドニル・オームの娘であるのなら、第一級の魔天使の素質を相手を持っているという事を、あるいみ意味しているからだ。

そうなると、とても自分がかなう相手ではないと、そう思っていたのである。

最初はヒエラリキーとしてバカにしたが、相手の方が格が上だと今になって気付いていたのであった。

しかし戦いを始めた以上、このままでは逃げだすことは出来ない。

いま逃げ出せば、必ずあのメルヴィーという天使は、その虚をついて自分を粉碎するだろう。

だから、ここは何とか反撃のチャンスを見計らって、相手の隙をつき攻撃する機会を待つしかなかった。

その上でアブリットは、メルヴィーに対して一矢報いて、あとの事を考えようとそう思っていたのである。

自分は魔界天使、しかしてヒエラリキーの属性を持つ半濁な天使に、何も抵抗できずに負けるのが嫌だったからである・・・

*

ヒュールは、今、上空を見上げてメルヴィーに対して、頻りに戦いを止めるようにと叫んでいた。このまま戦いを続けられたのでは、メルヴィーのはちやめちやな攻撃で、さらに学院に被害が出てしまう。

今は学院の生徒達や教員それに学長は、この場を離れて他の場所に避難していたから人的被害が生じるのは避けられたが、このままメルヴィーの暴走をほったらかしにしてはおけなかったのだ。

だからヒュールは、上空で電撃攻撃を続けているメルヴィーに対し「もう戦いを、お仕舞いにしろ！！」と、しきりにそう叫び呼び掛けを行うのだった。

「メルヴィーもういい加減にせぬか、こんな一方的な戦いは無意味じゃぞ。相手はもう逃げるだけで精一杯になっているではないか・・・」

「うるさい！ 黙れヒュールよ、わらわに指図するではない。わらわは、いま楽しんでおるのじゃ！！」

だが、メルヴィーは、そんなヒュールの呼び掛けに対しても、そう言って話を突っぱねてあくまで今の戦いを止めようとはしなかった。

そう、ヒュールの呼び掛けなど、まったくお構いなしに取り合う事はなかったのである。

「まったく、これじゃからメルヴィーには手を焼くのじゃ。あ奴、アルビレートを唆してワシが施した封印を解いて、今はいい気になってしまっておる。このままにして置くと、いよいよ有頂天になってヒエラリキーの衝動を解放しようとしてまったく制御が効かぬようになる。じゃから嫌なのじゃ、灰色天使は扱いに困るからの、一体どうしたモノか・・・」

だからヒュールは、そう言って嘆くのである。

しかし、このまま彼は手をこまねいて、見ていることも出来ない。

だからヒュールは、ここで秘密兵器を使うことを決断していたのだった。

「よし、それじゃアルビレートよ、この際だから仕方ないから奥の手を使うことにするぞ。あ奴はいま、戦いに夢中になってワシの制止の声を聞こうとしない。じゃからここはこれであ奴を誘って、こっちにおびき寄せて、その隙に封鎖の法術をかけてしまうんじゃ。だからお前さんはこれを持って、あいつを誘い込め、これならば、メルヴィーの気を惹くことが出来るじゃろ」

だからヒュールはそう言うと、アルビレートに懐からあるものを取り出して、それをアルビレートに手渡していた。

「ええっ、ヒュールさん、こんなのでメルヴィーさんをおびき寄せることが出来るの！？」

本当にこれでメルヴィーさんを惹き寄せられる事が出来るの??」

だがその時、アルビレートは、ヒュールに手渡されたその奥の手と称するものを見て、疑問げに顔をゆがめていた。

こんな物でメルヴィーをおびき寄せることが、本当に出来るのかと、そう思ったからだ。

「ちょっと、ヒュールさん、これって鳥のもも肉でしょ？ こんなので本当に今のメルヴィーさんは惹き寄せられるの!？」

そう、アルビレートが手渡されたのは、香ばしい匂いをたてる美味しそうな鳥のもも肉だったのである。

だからアルビレートは、それを凝視すると、疑問げにヒュールを見るのだった。

しかし、

「大丈夫じゃアルビレート、ワシはな、もう何十年とメルヴィー達と伴に巡遣使の仕事をしてきてあ奴の弱点を知り尽くしている。じゃから、あいつをおびき寄せて夢中になっている戦いから気をそらさせるには、この鳥のもも肉の匂いが一番いいのじゃ。だから、その鳥のもも肉を振って、その匂いがあ奴の鼻に届くように、お前さんはそこから動かずじっとして待つじゃ。さすれば、今ワシがメルヴィーにご馳走の在り処を示してやるからの。だから、メルヴィーが鳥のもも肉の匂いにつられて素っ飛んできたなら、そこであ奴を封じ込めてしまうぞ、いいかしくじるなよ・・・」

そうだがヒュールは、そう言うと、自信ありげにアルビレートにそう笑いかけていたのである。

*

いま戦いは転じて、再び、メルヴィーの火球攻撃に、アブリットが逃げ回る構図が展開されていた。

メルヴィーは、その手に炎熱の炎を満たすと、容赦なくアブリットにそれを見舞うのである。

彼女から放たれた火球は、アブリットを目掛けて飛来するが、アブリットはなんとかその攻撃を躲して自らの体力の回復を待っていた。

メルヴィーは、そんなアブリットを見て、ニヒヒと残忍げな笑いをその顔に浮かべていたのであった。

だが、

「おいメルヴィーよ、戦いを止めてちょっとあれをしてみるのじゃ。あれはお前の好物の鳥のもも肉じゃぞ、それを腹一杯、喰いたいとは思わんか？ ええどうじゃ!？」

だがそこに、ヒュールの声が、再び呼び掛かっていたのだ。

その為メルヴィーは、その声につられて、ヒュールが指し示す方を徐に見た。

すると、

「む？ あれは・・・」

そう、その時メルヴィーは、その目にアルビレートが手にして頭の上で振りかざしている鳥のもも肉の、美味しそうな姿をその目で捉える事になっていたのである。

こんがり焼けた鳥のもも肉が、まるで燦然と輝くかの様にアルビレートの手に握られていた。

それを見てメルヴィーは、その時、一時攻撃の手を緩めて、その鳥のもも肉に気を奪われていたのだ。

「あれは、美味しそうな鳥のもも肉じゃ、喰いたい・・・」

だからそしてツツとそれに誘われて、アルビレートのいる方へ羽を動かしかける。

だが、そこでメルヴィーは、思い止まる。

何故なら、まだアブリットとの戦いを、終わらせてはいなかったからである。

今メルヴィーは、あと少しでアブリットを仕留めるところまで、彼を追い詰めていた。

そして彼を初天使に還元して、勝利する喜びを味わうところまで来ている。

そうになると、今は鳥のもも肉につられて戦いをやめにしては、その楽しみを放棄することになってしまう。だから、まずはアブリットを叩きのめし、その勝利した後あの鳥のもも肉を喰ってやろうとそう思ったからだ。

鳥のもも肉も喰いたいが、今はまだ戦いも面白かったのである。

だからメルヴィーは、アブリット目掛けて、また火球の攻撃を再開していた。

しかし・・・

そこで今度は、メルヴィーの鼻に香ばしい何とも言えない匂いが、漂ってくるのが感じられていた。

それは、とても美味しそうな匂いで、彼女の食欲な食欲を掻き立てるものだったのだ。

だから、そこでまたメルヴィーは攻撃の手を休めて、アルビレートの手になっている鳥のもも肉を凝視していた。

「うぐううう、喰いたい！！」

そう、だからそこでメルヴィーは、かなりのジレンマに陥っていたのである。

このまま鳥のもも肉の誘惑につられて戦いを止めてしまえば、せっかく封印から解放されて、その魔力を駆り魔界天使一匹をぶちのめす楽しみを満喫することが出来なくなってしまう。

せっかく自由に鬱憤を晴らすことが出来るのだから、アブリットとこのまま戦い続けたかったのである。

だが、この匂い、この匂いはメルヴィーの好物の鳥のもも肉の匂いなのだ。

しかも、特上照り焼き。

香ばしくて脂の乗ったこの匂いを嗅ぐと、このまま戦いを満喫したいという衝動と共に、あの鳥のもも肉も早く喰いたいという思いに苛まれる。

だから、ここで彼女には、至極、迷いが生じていたのである。

このまま戦うべきか、それとも・・・

「うむむ、何たることじゃ、このジレンマはわらわの乙女心を苦しめる・・・」

そうだからその為、メルヴィーは、頭を抱えてどうすべきかと苦悶する。

だが、ここは鳥のもも肉は後になっても食べられるのだと思い、彼女は決断し、再びアブリットを攻撃しようと呪文を詠唱し始めていた。

今は、戦いを続けることを、選んだのである。

しかし、そこでこんな言葉が、唐突にメルヴィーに投げ掛けられていたのである。

「メルヴィーさん、これいらないならマルレリスさんとミュルルさんにあげちゃうよ、それでもいいの！？」

そう、アルビレートが、そう言ってメルヴィーに誘いをかけたのである。

だから・・・

「嫌ッ！　それだけは止めてー！！」

そうメルヴィーは、その言葉に、結局、正直負けたのである。

彼女メルヴィーは、アルビレートがそう言うのと、アブリットの事などはもう忘れてし

まったかの様にいきなりはばたくと、物凄い勢いで上空からアルビレートの元に急降下して来ていた。そして、アルビレートの手にしている鳥のもも肉の目の前までくると、それを凝視して、だら〜ッと、よだれを垂らすのである。

「アルビレート、早くそれ頂戴、早くそれ頂戴・・・」

そして、メルヴィーは、まるで我が儘な女の子のように、物欲しそうに鳥のもも肉の催促をそこでそう求めて来たのであった。

「ねえ、早く早くそれ頂戴よ、アルビレート・・・」

だが、そこで・・・

「よし今じゃ！！」

ヒュールは、今やメルヴィーが鳥のもも肉につられてアルビレートからそれをひったくり、それにむしゃぶりつき始めたその光景を見て、そこで徐に法術の呪文を唱え始めていたのである。

『エンデルスエンデラ・ミトニクスランデル・・・エニクパトゥ、ミテラタンカン・マトニクス・・・ウデラランドル・ベホミタラント・ミデルレトパス・デレミタサ・・・』

いま我は、メルヴィー・デンデニル・ウーブなる天使を拘束し、その身をアルビレートのかかげる封緘の小瓶に封鎖する。然れば天神よ我が名に感じてその御業を可能たらしめよ！』

そして、

『デスニクル・ラントル！！』

そう彼は、封緘の呪文を完成させて、その両手を鳥のもも肉に噛り付いているメルヴィーに対して向けて拘束を仕掛けたのだ。

すると、

その直後、ヒュールの腕から閃光が迸って、それが一条の束になりメルヴィーに向かって、た走っていたのである。

その閃光は、メルヴィーの体に到達すると、彼女を強力な呪力で包み込み拘束していた。

「アルビレート今じゃ、小瓶の蓋を開け！！」

そうそしてヒュールはそう叫ぶと、アルビレートに瓶の蓋の開封を命じていた。

「判った！！」

その為アルビレートは、ヒュールに言われるがままにかかっていた小瓶の蓋を開けて、その瓶をメルヴィーに向ける。

すると、

ビュウウウウウン！

その時、そのような音が辺りに反響すると、その直後、閃光に拘束されたメルヴィーが『ギュイン』と瓶の中に吸い込まれて行ったのである。

だがそして彼女は、完全にアルビレートの持つその透明な小瓶に、封じられて行ったのだ。

だからアルビレートは、それを見届けると瓶に蓋をして固く閉じる。

そして、それを頭上にかかげて、喜びを顕わにしていた。

「やったよヒュールさん、メルヴィーさんを封鎖することが出来た。これで万事上手く

いったね、もう暴走できないよ！！」

だからアルビレートは、そう言うと、ヒュールに駆け寄ってその瓶を彼に差しだしていた。

そして徐に瓶の中を覗き込むと、メルヴィーがその中でどうなったか目を凝らして見ていた。

すると、メルヴィーは瓶の中で小さくなり、その手に鳥のもも肉を掴んだまま、いまだにそれを頻りに頬張ってむしゃぶりついている姿が垣間見えたのだ。

だから、それを見てアルビレートとヒュールは、
『はあ～、なんて食い意地の張った、強欲な天使なのじゃ・・・』

と、呆れて肩を落とすのである。

だが、そして、やれやれといった表情で天を見上げた。

すると、そこに一人の天使が、空の彼方に逃げていく光景を目撃していた。

そう、アブリットがその黒い羽をはばたかせ、青空の彼方に飛んでいく様が二人の目には映っていたのである。

それを見てアルビレートとヒュールは、その場に腰を落とすと「ふう～」と安堵の息をついて、もう一度、小瓶に封じられたメルヴィーの姿を見て微笑んでいた。

これでもう暴走は出来ないだろうと、そう思ったのだ。

だから学院は、これでもう被害をこうむる事はない。

しかし、その後の事後処理は、大いに大変なものであったのは言うまでも無かった事なのである。

エピローグ

エピローグ

その昔から、魔界天使界には、デンドニル・オームなる魔界天使がいた。

彼は、大魔界長デルガスト・オータの息子で、次代の魔界長となる血統を有した長子だったのである。

だが、彼はある時、恋に落ちた。

その恋に落ちた相手は、光の天の神々に仕える大天使長の娘、エリシャス・ティアマンスである。

デンドニルは、その天使に恋をして求愛を申し込んだ。

しかし実はその時、その大天使長の娘エリシャスも、魔界天使デンドニルの存在を知り、秘かに恋心を抱いていた。

そして、二人はいつしか愛に溺れ、一人の灰色の天使を神界に産み出す事になるのである。

それがメルヴィー・デンドニル・ウーブ、彼女は、ヒエラリキーの属性を持つ、光と闇の間に生まれた天使だった。

しかし彼女が生まれたのち、そのメルヴィーは、父と母の禁忌の恋により、その素性を疎まれる様になった。

闇の天使たちからは、敵の憎むべき子といわれ、光の天使たちからは、汚れた属性をその身に宿す子として煙たがられた。

そこでエリシャスは、その我が子を抱いて、一人、光の天使界にある《秘徒の居城》に籠もり、そこから外へ一歩も出なくなった。

エリシャスは、好いて魔界天使デンドニルと交わり契りを結んだ。

しかし、その後、彼女はそれを悔いていたのである。

それは光の天使としての、一生の過ちであったと・・・

だからエリシャスは、メルヴィーを育てながら、その過ちを断つべく、彼女に光の天使としての教育を施し、聖天使界の一員として認められるように厳格な子育てを行ったのである。

しかし、

メルヴィーは、そのヒエラリキーの衝動を持つゆえに、何事においても無関心で、それらの事に何も真剣に取り組まぬ子に育ってしまっていた。

ヒエラリキーの属性とは、基本的に、光と闇、聖と魔の二つの属性の狭間であって、そのどちらともつかずあいまいな立場で、二極間のどちらを選ぶか、それとも灰色のままであるかという葛藤をわき起こす衝動であるという事を意味している。

つまり、どんな時でもどっちつかずのあいまいな立場にあり、その狭間で、自分がどうすべきなのかと、日夜その選択を迫られて苦しむという事である。

灰色の天使であるが故に、光に染まる属性も持ち、そして闇に染まる属性も持つ。

その中で、やがてはそのあやふやな属性ゆえに、判然としない鬱憤の念に苛まれる。

これがヒエラリキーなのである。

だからメルヴィーは、その灰色の属性ゆえに、子供の頃は、その葛藤の中で苦しんでいた。

光の天使からは、汚れを孕む子として煙たがられ、闇の天使からは敵の子として疎まれる。

その中で、メルヴィーはある意味、天使界に不満を抱いていたのである。

聖と魔にも受け入れられず葛藤を続ける日々、しかして、自分は灰色の天使として生きていかねばならない。

だから彼女は、天使界で暮らすことを殊更、嫌っていた。

だが、そこで、そんな彼女に転機が訪れるのである。

それは、彼女が人間界のリングロード・マスターの守護天使として、召喚される事となったからである。

そうメルヴィーは、リングロードの降臨の儀式で、人間界に赴く事になったのだ。

だから、これはメルヴィーにとり、願ってもない朗報であった。

光と闇のどちらにも受け入れられない彼女にとっては、聖と魔、光と闇が混同して雑多に色彩をなす人間界では、自分の灰色の属性を気にする者もない。

喩えいたとしても、所詮、人間は天界の摂理に対して無知である以上、自分が灰色の天使であっても、天使界にいる時よりは肩身の狭い思いをしなくても済む。

そこで彼女は、自ら率先的に人間界のリングロード・マスターの守護天使になることを望んで、その召喚に応じた。

そして彼女は、人間界で、その力を発揮する機会を、手に入れたのである。

だが、彼女に待っていたのは、封印という行為だった。

メルヴィー、そしてエリシャスが後に光の天使と改めて交わって出来た子、ミュルルとマルレリスは、人間界のヒュール・アトランドという若者に召喚され、守護天使として使役される事となった。

だが、ヒュール・アトランドなる人物は、メルヴィーやミュルル、マルレリスを自分の守護天使とすると、その力を以て巡遣使としての仕事を続けたのだが、その中で、メルヴィーのリングロード・マスターに対する時たま、暴走する不従順の態度があまりにも目に余ることから、彼は、彼女の闇の属性を天神に力を乞い封印したのである。

そして、今日に至った。

しかし、喩えメルヴィーの闇の力を封印しても、彼女の中で蠢く鬱憤を晴らしたいというヒエラリキーの衝動は、萎える事はなかった。

光と闇の中で葛藤を続けるあいまいな思い、それが彼女を、ある意味、何事にも興味を示さない様な、排他的天使に仕上げてしまったのである。

そして・・・

だが、何事においても、今ではメルヴィーは、そんな欠落的な性癖を抱えても、至極、

人間界の風紀に馴染んでいた。

そして今では、天使界で両極に疎まれて生活するよりも、わだかまりのない人間界でリングロード・マスターの守護天使として、気楽にその用をなす方が彼女には、至極それが一番性に合う天使としての生き方であったのは言うまでもなかったのだ。

そう、それが実は、メルヴィーが灰色の天使として生まれ出た時、以来からの、確実に込み入った真実の由来話だったのである。

「という訳なのじゃよ、アルビレート」

だが、その話の大体のあらましを今アルビレートはヒュールから聞き、至極、納得した表情をその顔に浮かべていた。

アルビレートは、その話を聞くと、メルヴィーのヒエラリキーの属性を持つその意味を理解し、よく分かる事が出来たからである。

だから、

「それじゃメルヴィーさんは、光と闇の属性を持ち、それと同時に、灰色であるという事なんだね？ だからそのヒエラリキーの衝動が、きのう噴出して、暴走してしまったという事なのか？ そうなると今後、僕はメルヴィーさんをどう使役すればいいの？

僕は、彼女を使役するリングロードとして、この先、仲良くやっていける事が出来るかな？」

だから彼アルビレートは、その時、ヒュールにそう言うと、メルヴィーとの今後の関係を心配して、首を傾げて見せていた。

すると、それに応えてヒュールは、「大丈夫じゃ、メルヴィーは確かに扱いづらい守護天使じゃが、これからお前さんにはずっとワシが師匠としてついてやって、こ奴の使役方法を事細かに教えてやるから、きっとメルヴィーを立派に使いこなすことが出来る様になる。じゃから、心配せずとも安心せよ。もうワシとメルヴィーは既に、腐れ縁になってしまった様なものじゃからな・・・」

そう、ヒュールはそう言うと、ふと傍らに置いてあった透明のビンに、目を移していた。

そこには、いま、不貞腐れた顔をして、瓶の中のケツ底に座り、ぶーたれているメルヴィーの姿が垣間見えた。

彼女は、学院の遺恨試合メチャクチャ騒ぎから一日経っても、未だに封緘の札が貼られた瓶の中に閉じ込められて、ヒエラリキーの衝動が萎えるのを、待たされていたのである。

だから彼女は、今その灰色に染まった羽を次第に白く染め直し、額に開いた金目の第三の眼は、やはり次第に閉じられつつあった。

しかし彼女が、元に戻って、ほぼいつも通りになるには、あと五日ぐらいの時間が掛かる暇があるのである。だから、それまでは、彼女をこの瓶の中に閉じ込めておくしかなかった。

そうしないと、再び、闇の属性の封印を施さない限り、また暴走をする可能性があるからなのである。

だが、それを見ると、何やらアルビレートには、彼女が可哀想であるという気も芽生えて来るのだった。

彼女メルヴィーは、ただ、ヒエラリキーとしての封印された性情を、魔界天使との戦いで晴らしたかっただけなのである。

ただ暴れたかった、だけだ。

それは、邪悪な精神に基づくものでもなく、ある意味、とても純粋な天使としての衝動なのであろう。

何ものにも束縛されず、自由を得たい。

しかし、喩えそうであっても、さすがに暴走してまわりの状況に目が向かなくなるのは、それはメルヴィーの欠落した唯一の欠点であった。

だから、アルビレートは、瓶の中に閉じ込められて、
『このやろ、出せー！　ぶっとばすぞ、コノ！！』

と、喚いている彼女を見ると、少し、しょうがない天使さんだとそう思うのだった。

そう、彼女を、まるで悪のように責められないのも、確かな事実なのであるからだ。

実際、メルヴィーは、別に悪徳で邪悪な天使では、無いからでもある。

だが・・・

だがアルビレートは、そんな事実がありつつも、そのヒュールの言葉を聞くと、これから自分は必ずこの天使を立派に使役して、このカルディリス・メン・ヒュールーの有能なリング使いとして立派に成長し、巡遣使としての優秀な働きが出来る有名なリングロード・マスターになりたいと、そう思っていたのだった。それが、指輪を譲渡されたアルビレートの、これからの望みでもあり、それが唯一、一番のこれからの願いでもあったからなのである。

だが、

だが、そしてその後の世には――――

だが・・・

だがしかして、はたまた彼アルビレートは、とにかく困った守護天使を自分の使役天使として、譲渡される事とはなったのだ。

その特異な性質を持つ「メルヴィー・デンデニル・ウープ」という名の、灰色の天使をだ。

自認認証：表明表記

自認認証：表明表記

小説タイトル：メルヴィー・リングロード

著者：秋月しょう一郎

初期考案年日：1989年～1990年

執筆：2002年秋頃・・・

※画像借用：Thomas Breher による Pixabay からの画像

メルヴィー・リングロード

著 秋月しょう一郎

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
